
魔法少女だらけの聖杯戦争

浅田湊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女だらけの聖杯戦争

【Nコード】

N4858W

【作者名】

浅田湊

【あらすじ】

聖杯戦争

それは七人の魔術師が己の技を競い、聖杯を賭けて殺しあう場だ。マスターの一人である遠坂凜はアーチャーである鹿目まどかを引き連れて聖杯戦争に参戦する。

迎え撃つは不屈の翼を冠する純白のランサー

幾多のカードを操るキャスター

ハチャメチャな魔法の杖を振るうバーサーカー

不死身と謳われるライダー

そして、今だに姿を見せぬアサシンだった
しかし、第三次聖杯戦争時のイレギュラーにより狂った聖杯は
それに加えて最悪の悪夢を召喚してしまう
それらの魔女を倒した先に待つモノとはなんなのだろうか？
鹿目まどかはどんな答えを見い出すのだろうか？

アルカディアにも投稿しています

最強のカード（前書き）

まどか〓概念〓F a t e

ほむら〓なんか大量の銃器〓ギル様

そんな簡単な発想から始まりました

実は前々からニコニコの多数アニメキャラでやる聖杯戦争を見て少し興味があつたり……

そんなこんな“魔法少女”だけで行われる血で血を洗う第四次よりも色んな意味で過酷となるであろう聖杯戦争が始まります！

最強のカード

聖杯の探求――

それはこの遠坂家において魔術師の血とともに代々受け継がれてきた宿願である

私の父は前回の聖杯戦争で帰らぬ人となった

それ以来、私も聖杯戦争へ参加する為に準備を重ねてきたのだ

「さて……準備は万端、体調も良し！」

部屋の中で遠坂は制服から戦闘服に着替え、儀式の最終チェックを行っていた。

もしも、儀式に不備があればいくら強いサーヴァントを手に入れたとしても契約不備に縛られては元も子もないからだ。

特に遠坂自身が持つ呪いとも言うべき『うっかり属性』に対してはいくら警戒してもし切れないくらいだ。

「うん、我ながら絶好調！これなら、サーヴァントの召喚もバツチリね」

遠坂は自身の準備に不備が無い事を確認し終えると耳にかかる黒髪を払いのけた。

そして、儀式場である屋敷の地下にある魔法陣へと急いだ。

その日、朝から私の気分は高揚していた。

10年来の目標だった聖杯戦争が今まさに始まろうとしている。

今日はその参加条件となるサーヴァントの召喚を行うことにしていたのだ。

「素に銀と鉄」

「礎に石と契約年来の大公」

『凜、聖杯はいずれ現れる』

「祖には我が大師、シュバインオーグ」

「降り立つ風には壁を」

『アレを手に入れるのは遠坂の義務であり』

「四方の門は閉じ、王冠より出て」

『魔術師であるならば、避けてはとおれぬ道だ』

「王国に至る三叉路は循環せよ」

それが父の最期の言葉

「閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ」

「繰り返すつどに五度、ただ満たされる刻を破却する」

ならば私は魔術師として生きよう

「——告げる」

「汝の身は我が下に、我が運命は汝の剣に」

そして見事に聖杯をこの手にして見せる
そう決心すると遠坂は魔法陣に手を伸ばす
すると、魔法陣が光り輝き始める

「聖杯の寄るべに従い、この意この理に従うならば答えよ」

「誓いを此処に」

「我は常世総ての善と成る者」

「我は常世全ての悪を敷く者」

あまりの膨大なエネルギーの蠢きに自然と遠坂の顔から汗が零れ始める。

「汝、三大主、言霊を纏う者」

「抑止の輪より来たれ」

「天秤の守り手よ——！」

魔力の嵐はその言葉と共に陣を中心にして荒れ狂い、遠坂にこれ以上無い程の手応えを感じさせる。

しかし、少しすると魔力の嵐は収まりその場には何も無い空間が広がるだけだった。

その光景に遠坂は目の前の光景が信じられず固まってしまつ。手応えを感じた筈なのにまさかの失敗という結果なのだ。その事に驚きを隠せる筈が無かった。

「……ちょっと………なんで何も起こらないのよ？」

あまりに信じられない光景に思わず叫び、儀式の手順を確認して行く。

「まさか、失敗………？ そんな！ 儀式は完璧だったはず？」

儀式の失敗の原因を探る為に手順を見直していると居間の方から大きな物音が響き渡った。

「何？ 居間の方から………？」

遠坂は急いで階段を駆け上がる
そして、ドアノブを勢い良く回し始めるが、イライラからか上手く開かず沸点を通り過ぎた遠坂はドアを蹴飛ばした。

「いたたたた………ここは？ 確か、私………」

遠坂の目の前に居たのは瓦礫の山に座っているテレビアニメに出て来るような可愛らしい魔法少女のコスチュームを着た少女が存在していた。

全く理解出来ない状況に遠坂は思わず「はっ？」と、素っ頓狂な声をあげてしまう。

「あの……ここ、何処ですか？」

同じように状況を全く理解できていないピンクのコスプレ？をした魔法少女？は助けを求めるかのように遠坂に尋ねた。

「ちょっと、待ってね……夢じゃないと、なるとキャスターを引き当てた？はあ、ツいてないわ……」

「キャスター？何の事を言ってるんですか？」

ピンクのコスプレ？少女は状況が理解出来ずに首を傾げる。

その全く会話が成り立っていない状況を不審に思い、遠坂は恐る恐るこう尋ねた

「聖杯戦争って分かる？」

「聖杯……戦争？」

「まあ、簡単に言うとな勝ち進めばどんな願いも叶うのよ！あんたも英雄なんでしょ！叶えたい願い位あるでしょ？」

遠坂の願いという言葉にピンクのコスプレ？少女はジッと自分の手を見つめる。

その様子に一応、話が通じている事に凜はホッとするとサーヴァントの返答を静かに待った。

願い……その言葉がまどかの胸にポツカリと空いていた空虚なる穴を刺激する。

とても大切な思いだった気がするが今はもう思い出せない位に曖昧に掠れバラバラになってしまった記憶……

霞がかかり、継ぎ接ぎだらけの断片でしかない大切な思い達……そんな思いにまどかは呆然と立ち尽くしてしまう。

凜は呆然とどこか遠くを見つめるまだ自分よりも幼いであろうまどかに対してどう接していいのか分からず溜息を吐き、頭を掻きまわす。

だが、そう長い時間凜が待てる筈がなく痺れを切らし、まどかにこう告げた。

「何か聞きたい事があるならさっさと言いなさいよ！」

「えっ？あの、あのね……願いが叶うなら何か代償とかがあったりしないのかな？絶望とか……」

まどかは急に声をかけられて返す言葉が見つからず、思わず頭の

中に浮かんだ思いを凜に投げかけた。

なんで、願いに代償があると考えたのかまどか自身にも分からなかったが何故かそれがとても大切な問題であるように感じ、まっすぐに凜を見つめる。

そんなまどかの様子に凜はこの子もまたサーヴァントとして呼ばれている英霊であることを思い出すと頭の中にある知識を彼女にも分かるように噛み砕いて話し始めた。

「まあ、本当のところどうなのかは分からないけどアインツベルンって言ってもわからないわよね……そういう有名な家系が辿り着いた根源への門を固定し向こう側に至る技術って聞くから詳しくは解らないけど、根源は世界そのものでもあるから、それなりの代償は在るかも知れないけどあなたの言うような絶望とかそういうったモノとしての代償ではないと思うわね……膨大な魔力の塊って言われていたりもするし……えっと、貴方の真名って何ていうのかしら？名前が判らないと呼びにくいでしょ？」

「鹿目まどかだよ？宜しくね？えっと……「遠坂凜」凜さん！」

「凜さんは恥ずかしいわね。そうね！凜ちゃんってどうかしら？私はまどかって呼ぶから。それでいいかしら？」

その言葉にまどかはにつこり微笑むと大きく頷いた

こうして二人は固く握手をした。

これが最強の魔法少女と遠坂凜の運命の出会いだった

これは魔女になる前の魔法少女を救う為に概念にまで成り果てた少女の救いの物語……

「それで？ 魔法少女ならこの瓦礫の山片付けられるわよね？ 後は任せたから！」

魔法少女であるのだからこの世界とは違う魔法体系でこんな瓦礫の山をさっさと片付けられると考えて後は全てまどかに任せて少しばかりの仮眠を取ろうとするが、その手をまどかに取られてしまう。凜はそんな必死なまどかに何事かと思い振り返るとものすごい速さで首を横に振るまどかがそこに居た。

「む、無理だよ！ 凜ちゃん！ 私の魔法はただ弓を魔力で生み出すだけだからそんな事出来ないよ！」

「えっ？ 普通、魔法少女って証拠隠滅とかでこれくらいのモノなら魔法を唱えて次の瞬間元通りじゃないの？ よくアニメとかの魔法少女って簡単にそうやってるじゃない！？ その服は飾りなの？」

全く持つて信じていない凜にまどかは必死に手伝ってくれように懇願する。

「飾りじゃないよ！ その……きっと、私の世界の魔女は現実的な器物を壊したりしないから必要なかったんじゃないかな？ だから、凜ちゃんお願いだから手伝って？ ねっ？」

こうして、凜はまどかの言葉に仕方なく手伝いを始めるが女手二人では当然の如く終わる筈が無く、一睡もせず夜通し作業しても結局半分済んだ程度で作業を投げ出してしまうのだった。

最強のカード（後書き）

まどか「あれ？これのやり取りって二度目だよね？」

ほむら「気にしたら負けよ。まどか……世の中気にしてはダメな事もあるの」

まどか「うん……そう言えば、ほむらちゃんも聖杯戦争参加してるの？」

ほむら「聖杯戦争？何かしらソレは……（後書きでぐらいあのマスターの激辛麻婆は思い出したくないわ……）」

まどか「あの？ほむらちゃん？大丈夫？なんか、全身が震えて汗が凄いいよ？」

ほむら「も、問題ないわ……なんでもないから……本当に何でもないから……」

お詫び

一度、まっさらな状態から始めたかったので削除させてもらいました。

応援してくださっていた方本当に申し訳ありません

一応、こんな形で書き直してなるべく早く追いつくつもりです。

演出が少ないなどの指摘を受けて結構心に来てましたし、設定が固まらずに進んでいたので少し矛盾があったりしたのでちょうどいい機会かなと思います……

感想待ってますね。

逸話無き英雄 鹿目まどか（前書き）

マミ「そう言えば、鹿目さんが魔法少女として登場するなら私が彼女の宝具の名前を考えないと！」

杏子「おいおい……せめて普通なのにしるよ？」

マミ「そうだ！Purification！イタリア語で浄化！ティロ プリフィカゾン！どうかしら？」

杏子「いや、私にどうって聞かれても困るんだが……」

ほむら「いいんじゃないかしら？」

杏子「びつくりするだろうが！って、本当にこんなアイツに言わせる気か？」

ほむら「なら、ハイパーまどかビームとどちらがいいかしら？」

杏子「えっ？今なんて？」

ほむら「ハイパーまどかビーム……私はそれよりはマシだと思うのだけど？」

あまりのまどかのネーミングセンスの強さに杏子は凍りつき返事をする事が出来なかった。

逸話無き英雄 鹿目まどか

「あれ……もう、朝じゃない……」

まどかの召喚時の失敗により出来た瓦礫の山は夜通し作業を続けたのにも関わらず、いまだに存在感を放っていた。その途方も無い瓦礫の量に凜は溜息を吐くと近くの椅子に腰を下ろした。

「もういいわ……まどか……それより、貴方って日本人よね？」

この瓦礫と召喚のミスにばかり頭が行っていて考えていなかったが、鹿目まどかという英雄など聞いた事がなかったからだ。聖杯戦争では英雄の逸話に基づく宝具が戦局を大きく左右するがそれは逆に言えば此方の真名が公のモノとなる諸刃の剣でもある。つまりは、使い所が難しい武器なのだが、マスターにすら真名を聞いても解らないとなると戦略の立てるのが難しくなる。それ故にまずは、日本人であることを疑ったのだった。

「えっ？そうだけど……」

質問の意図がまるで理解出来ないまどかはどうしてそんな質問をするのか分からず首を傾げてしまう。

だが、それ以上に凜は頭を捻っていた。

魔法少女……キャスターの可能性を考えたが、昨晚、監督役である言峰教会に召喚に成功した旨を伝え召喚したのがキャスターだと伝えるが、既にキャスターは召喚済みと返答されてしまった。そして、残っている座はセイバー、アーチャー、アサシンと言われてしまったのだ。

この状況で希望を捨てなければ、最強と名高いセイバーの可能性

もあるにはある。

だが、あの様子だとそれは夢を見過ぎだろう……。となると、最弱のアサシンかアーチャーなのだが、鹿目まどかという英雄の逸話など聞いた事がない。

残った可能性としては“未来”の英雄なのだが、これだと他のマスターに逸話から真名が判明しなには好都合だが、認知度の問題が起こってしまう。

しかし、先程も言ったように聖杯戦争におけるサーヴァントの強さはその英雄の認知度の高さに由来している。

つまりは、有名な英雄になればなる程に本来に近い姿で召喚されるのだ。

けれど、真名がばれないメリットだけでなく、デメリットも抱えてしまっている状態なのだが……

「はあ、あんた……本当に英雄なの？」

凜は溜息交じりにまどかに尋ねて見た。

どこからどう見ても、普通の平凡などこにでもいる中学生にしか見えないまどかに本当に聖杯戦争を戦い抜けるのか不安になってしまったからだ。

確かに魔術師も普通の社会に紛れ込むものだが、魔法少女もそういうものなのだろうか、疑問を思い浮かべてたりするのだが——それよりも、何と戦って英雄にまで上り詰めたのが非常に気になっってしまう。

「えっ？ 英雄って、私はなんの取り柄も無いただの中学生だよ？」

まどかのその返答に凜は呆れ果てて頭を抱えてしまう。

つまり、それは聖杯戦争でハズレを引いた事になるからだ。

何の取り柄も無い英雄などで到底勝ち抜ける程、聖杯戦争は甘く

は無い。

何せ相手もまた過去の英雄を連れているのだ。

その上、魔術師同士でも己の技術を競い合う戦う場面も起こり得てしまう。そんな中で、サーヴァントが無能であるのなら魔術師がサーヴァントと魔術師を同時に相手にするなど命を捨てるようなものだ。

その現実が夢であつて欲しいと願う凜は現実逃避を試みるがそんな事で今、目の前にある現実が変わる訳が無かった。

「そう言えば、あんたの武器は？ 魔法少女なんだから魔法のステッキ？ ステッキで相手を撲殺するの？」

「しないよ！それに、昨日言つたよ？ 私の武器は弓だつて！」

そう告げると、何も無い空間から弓を取り出す。

その花をモチーフにしているのであろう弓を視た凜はそれをすぐに仕舞うようにまどかに指示した。

視ているだけでも、有り得ないレベルの魔力が蠢いているのが理解出来てしまうソレは、まさに遠坂の目指す宝石剣のレベルに匹敵する一品だ。

何の取り柄も無いとか抜かしたまどかがこれ程までの一品を所持している事に世の理不尽さを感じながら、再び盛大な溜息を吐いた。

しかし、まどかはそんな凜の心中を知らずに心配気に凜にこう告げた。

「溜息ばかりしてると、幸せが逃げちゃうよ？」

まどかのその言葉に怒りの沸点を越えかけるが、常に優美たれの遠坂の家訓に加えてサーヴァントはどう見積もっても年下……その

怒りを飲み込むと大人の対応を心掛ける。

「まあ、気にしないで？　ただ、その弓が貴方の宝具の一つだろうからなるべく見せない方がいいわ……って、言っても貴方の宝具から真名を突き止められる筈は無いんだけどね……私も知らないし……」

まどかの持つ弓は遠坂が軽く見積もっただけでも、C―Bランク相当の一品でありあながちハズレを引いた訳では無い事に安心する。そして、アーチャーのスキルである狙撃を最大限に活かす為にまどかの狙撃の腕を知りたい所だが試し撃ちが出来る場所などある訳が無く、徹夜明けで学校を休むと街の様子を視て回る事にした。

「ねえ、霊体化して？」

街に出かける準備を整えた凜はまどかに当たり前の様に尋ねるが、全く霊体化する気配が無い……それどころか、何をどうしたらいいのか分からず凜の顔をじつと見つめるだけだった。

「霊体化って何……かな？」

「霊体になって人間に見えなくする事よ……元々、英雄自体が亡霊みたいなモノだからなれる筈なんだけど……まさか、出来ないの？」

まどかの服装は今だに魔法少女のコスプレのままで、この衣装で街を歩きなど狙って下さいと言っている様なモノだ。それだけでは無く、周りの注目を集め恥ずかしい事この上ない。

ただ、まどか本人が見て回ってこそ意味がある戦場偵察にまどかを連れていけない訳にはいなかった。

そんな事を考えていると凜はある服がある事を思い出した。

言峰が毎年贈って来る似合いもしない服である。

毎年、全く着られることなく箆笥の奥底に眠っていたそれを探し出し、中学生の時に送られたサイズのモノをまどかへと手渡した。

「そう……アーチャーが召喚されたの……」

「ああ、残る座はセイバー、アサシンだけだ」

「そのようね……ところで、そっちの子は誰なのかしら？」

黒髪の魔法少女は言峰神父が連れてきた白い少女を視線を移すと少し殺気を込めて睨む。

それに対して、言峰は何でもないかのようにその殺気を交わすところ告げた。

「何……協力者だよ……君に最初から参戦して貰う訳にはいかなからな……何せ、前聖杯戦争から存命しているサーヴァントであり今回のマスターにとってはイレギュラー的存在である君をそう簡単に動かせないからな……」

「そう……別に貴方が何を企んでいようが私には関係ないわ……私は聖杯を手に入れられればそれでいい」

そう告げると黒い魔法少女はどこからともなくデザートイーグルを取り出し、それを言峰に向けた。

だが、それに言峰はまったく物怖じした様子は見せずじつと黒髪の魔法少女を見つめる。

「ただし、私の邪魔をするならたとえマスターであつても容赦しないわ」

「覚えておこう……あとは、二人で話しておきたまえ」

言峰はそう言い残すと白い少女を部屋に残し退室する。

その後ろ姿を白い少女は睨み付けるが令呪で拘束されているのか唇を噛み締めると手を握りしめる。

「それで、あなたはまだ私に用があるのかしら？」

一人残った少女に対して、黒い魔法少女はまるで興味が無いように淡々と尋ねた。

それに対して、意を決したようにその白い少女はゆっくりと唇を動かし始める。

「なんで、あなたはあのマスターに従ってるんですか？」

その問いに対して、黒い魔法少女は初めてその白い少女を視界に入れると何も言い返すことはせず、黙ってその少女の話を聞き始める。

「信用していた……信頼していたマスターを不意を衝いて殺して令呪を奪って、それで服従させて……なんで、そんな人に従えるんですか！」

「自業自得ね……この戦争に参加した以上は全てが敵だとわかっていたはずよ？　令呪を奪われて殺される可能性もある」

「それは……そうかもしれないけど、でもそんなの間違ってるよ！」

熱くなる少女に対して、冷静に黒髪の魔法少女は一言だけその白い少女の言葉を訂正した。

「それに、一つだけ勘違いしているわ——私はあの男を信用なんてしていない、私は目的の為に利用しているだけよ…… たった一人の友達を救い出す為に……」

それはその黒髪の魔法少女が初めて感情をこめて呟いた言葉だった。

あとがきという名の言い訳

凜の件に関しては色々悩んだ結果、「凜さん」より、「凜ちゃん」のほうが遠坂に似合ってるかなと勝手に判断した結果です……なので、このまま行こうかとwww

思った以上に反響があったことに内心不安を隠せません。

では、宝具の紹介

まどかの宝具 その一

救済の弓

ランク 推定 C + B + + +

種別 対軍宝具

レンジ 不明

最大捕捉 測定不能

全ての魔法少女を救済した英雄まどかの用いた弓

その逸話から悪き穢れた魂を払う事が出来る対悪宝具でもある。

弓はホーミングとなっており、使用者の魔力が尽きるまで無尽蔵に増やせる。

但し、現在召喚の際に神性を失った為、本来の穢れを払う力は失われている。

逸話無き英雄 鹿目まどか（後書き）

現在、マミさん道場建設につき後書きは見送らせていただきます。
次回、マミ師匠とさやか弟子のマミさん道場！お楽しみに！

感想待ってます

平穩なる買い物（前書き）

杏子「あれ？マミの奴いないな？」

さやか「ああ、マミさんならさつき張り切って何かしてたんだけど、なんか少し不安だわ」

杏子「てか、なんなんだ？その体操服？狭夜迦って当て字にも程があるだろ……」

さやか「やっぱりそう思うわよね……私でも、これは少しきついわ……けど、マミさんのお手製なら着ないといけないかなって……」

杏子「ったく、しゃーねーな……少し貸してみろ」

さやか「ちよっと何消してんのよ！」

杏子「まあ、見てなって私がマミの奴の目を誤魔化しといてやるからさ」

平穩なる買い物

新都まで実体化したまどかを連れて偵察兼買物に来ていた。

目的の一つが霊体化出来ないまどかと街を出歩く為の服を買う事なのだが、何やら箱入り娘のように眼を輝かせて辺りを見回すまどかに凜は溜息を吐いてしまう。

だが、同時にいくら英霊とはいえ年相応の普通の少女のようで少しだけ安心していた。

だが、そんなに辺りに気を回していたら目の前が悪露底になってしまい、やはり前から歩いてきた黒髪の少女にぶつかってしまった。

ゴン

「あつ？ごめんなさい！」

「いいえ、こちらこそごめんなさい——まど……いえ、そんな訳が無いわね……気にしなくていいわ」

ぶつかった少女はまどかに対して何やら驚いた様子を一瞬だけ見せるが、気のせいだったのか次の瞬間にはにこりと微笑いまどかの身を案じ始める。

「それより、名前……聞いてもいいかしら？」

「えっ？かな……佐倉 仁美だよ！」

一瞬、まどかは本来の名前を告げそうになってしまう。

しかし、凜の真名はなるべく避けるようにと言っ言葉を思い出し、

咄嗟に頭に浮かんだ二人の名前を合わせて口にしてしまう。

それを聞いた黒髪の少女はどこか安心した様子で小さく「良かった……」と、呟いた。

「それじゃあ、ごめんなさい。私、急いでるから……」

それだけ告げると黒髪の少女は言峰教会のある丘へと続く道へと姿を消した。

その後ろ姿を何故かまどかは見えなくなってもじっと見つめていたのだが、急に頭に振り下ろされたチョップがまどかを現実へと引き戻す。

「あんたね……少しは気をつけなさいよ……」

「あはは、ごめんね？凜ちゃん」

「まあ、それよりさっきの子が気になってたみたいだけどどうかしたの？」

その凜の言葉にまどか自身もよく分からなかった。

分からないけど、どこか懐かしく大切なモノをあの少女に感じていたのかも知れない。

ただ、それを断言出来る根拠は無かった。

けれど、その何かわからないものが確実にあの少女とあるような気がして何故かまたどこかであるそんな気がまどかにはしていた。

「分からないけど、そんなに気にしてた……かな？」

「気にしてたわよ……姿が見えなくなっても見続けてたし……」

まるで箱入り娘のようだったりするまどかに対して凜はどのような逸話を持つ英雄なのか考えてしまう。

魔法少女……

しかし、それを除けばどこにいてもおかしくない普通の少女……彼女もまた魔術師のように現実の何かを犠牲にした結果に立つ場所が英霊の座なのだろうか、少し考えてしまいがその考えを振り切ると頭を切り替える。

そして、まどかの頭を撫で始めた。

「さつさと服買うわよ！なるべくお金はかけたく無いから、色んな店を回らないといけないし、その後は街の狙撃ポイントになりそうな場所を見て回らないといけないんだからね！」

「服を買うのに服屋を回るの？一件でいいよ！それに、なんだか頭を撫でられるのは恥ずかしいよ」

一応、財布の中の諭吉を確認するもこの出費はなるべく抑えたいのが凜の気持ちだった。

魔術師が皆、お金を気にする訳ではない。

遠坂に代々伝わる魔術の特性故のモノだ。

宝石魔法……つまり、宝石に魔力を溜めて使うのだが一回使うと二度は使えない。

故に、一発は大きいが出費が嵩む魔術なのである。

何せ一発使うと五十万といった単位で飛んでいくのだ。

確かに特許などで自然とお金は入って来るがそれでも、なるべく抑えておかなければ金喰い虫である宝石魔法はやっていけない。

「他の店の方が安かったら嫌じゃない……」

「えっ？他の店にもっと良いのがあったらじゃ無くて？」

まどかは最初に気にする所がそこなの！と驚いてしまう。

普通はまどかの答えが正解なのだが、金銭面を気にする凜からすれば着ればいいのである。

そして、五件もハシゴさせられ寝巻きを含め三着購入すると自宅に荷物をコインロッカーへと預けると狙撃ポイントを見て回る為に夜の街を歩き始める。

最後のポイントである深山町にある自身の通う学校に到着する頃には空には星が輝き始めていた。

「だいたいこんな所かしら？あなたのアーチャーとしての腕が活かせるだろう場所は」

「うん……多分、大丈夫かな？それよりも綺麗だね……この街は……」

凜の話を全く聞かずに夜景を眺めているまどかになぜか怒りは湧いてこなかった。

逆にそのどこか遠い場所を見るような眼差しに言葉に出来ない感情が押し寄せてしまう。

まるで、そこに居るのにも関わらずまるで違う世界からモノを見ているようで、絶対に届かないモノを見つめ続けるようなまどかに凜は何故か年齢以上の何かを感じた。

サーヴァント……英霊……

過去に偉業を成したであろうこの少女は何を得て、何を失ったのだろうか？

だが、そんな感情に浸る時間など存在しない。

ここは既に戦場なのだから……

「ゴメンね、悪いけど私と戦ってもらうよ！これも、マスターの命令だから！」

その声に凜とまどかが振り向くと、そこには何やら機械らしき杖を構えた純白の衣装を纏う少女が宙に浮かんでいた。

どこからどう見ても小学生の女の子なのだが、感じる魔力の量は一般人にはあり得ない量でありその膨大な魔力がソレをサーヴァントであると告げていた。

その魔力量と容姿のギャップに凜は啞然とするも相手が何のサーヴァントが分からない状態でアーチャーが近接戦を挑むのは分が悪いと判断し、舞台を変える為に屋上から飛び降りようとする。

しかし、凜は何やら理解出来ない魔術でいつの間にも拘束されてしまう。

その足にハメられた光のリングは空間に固定されているようでどんなに動いてもビクともしない。

必死に逃げる算段を立てようとするが、相手のサーヴァントがそ

れを待つ筈が無い。

「残念だけど、逃がさないよ」

そう告げるとその魔法少女はまどかと凜い向けて機械の杖を向けるとその杖を中心にピンク色に輝く中遠が現れる。

そして、次の瞬間ピンク色の光がまどかを包み込んだ。

時間は少し戻り、言峰教会

黒髪の少女は言峰教会に辿り着くと先程の少女に関して思い返していた。

鹿目まどかと同じ容姿をした少女――

確かにここが“あの世界”とは根本が違ふ異常は起こり得る事である。

ただ、その少女の近くに今回の聖杯戦争に参加を表明している御三家の一人、遠坂凜がいた事にが酷く気になって仕方が無かった。

「確か、言峰の情報だとアーチャーよね？ 遠坂凜のサーヴァントは？ まどかは魔法少女の時は弓を装備していた……十分、可能性はある……」

聖杯を手に入れるためには、護りたいモノを傷つけねばならないかもしれない。

その可能性に黒髪の魔法少女は深くため息を吐いた。

だが、ここである事を思い出す。

英霊は所詮、本体は時間軸からは外されて英霊の「座」にあり、こちら側の世界で活動しているのはその触覚たる分身のような物である。

通常、用が済んだらそのまま消滅する。

つまり、ここにいるまどかは本来の世界によって捕らわれているまどかではないとも割り切る事が出来る。

しかし、それは何をもってまどかをまどかとするのかという哲学的な問題にも発展し、そのような答えを容易に出せる筈が無かった。どうであろうが、英霊として召喚されたまどかはどの時間軸のまどかであろうともほむらの事を知っているまどかに他ならない……

答えの出ない袋小路に迷い込んでしまったほむらは小さくため息を吐くが、ほむらはまどかを救う為ならどんな事でもすると誓った事を思い出す。

だが、どちらにせよまどかがアーチャーであるかは全て憶測に過ぎなかった。

「少しいいかしら、ランサー」

そして、出た結論がランサーにアーチャーを調査させるということだ。

彼女を使えば、自らが出向かなくても確かめる事が出来る。

最悪、まどかを自らの手で殺すという場面を回避できる。

自分でもそれは卑怯だとは分かっているがそれ以外に今は方法が見つからなかった。

「あの……なにか用ですか？」

「確か、あなたは言峰に全サーヴァントとの交戦を令呪で命じられていたわよね？」

なら、アーチャーとはもう交戦したのかしら？」

黒髪の少女の問いにランサーは首を横に振り否定する。

既になっている事を前提に問いに来たのだが、していないという結果に黒髪の少女は答えを先送りできたことに少しか安心するもそれは結局何も解決していない事に気が付くとランサーにこうお願いをする。

「なら、アーチャーに関する情報を出来るだけ多く集めてくれるかしら？特徴、目的……なんでもいいわ！言峰には内密にお願いできないかしら！」

冷静な印象しかなかった黒髪の少女の変わりように、ランサーは驚いてしまう。

だが、その願いを否定する理由も無かったランサーはその願いを聞き入れる事にした。

あの神父は信じていたマスターを裏切るような信用ならない人間だったが、目の前にいる黒髪の少女はどこかあの大切な友人と重なってしまい放っておけなかったからだ。

だから、ランサーは決意を胸に黒髪の少女にこう告げた。

「わかりました。そのかわり、こっちからも一つだけ教えて貰ってもいいかな？ 別に大したことじゃないんだけど、名前……聞いてないから」

「暁美ほむらよ……ほむらでいいわ」

言峰への復讐の手助けをお願いされると思っていたほむらは予想外過ぎるお願いに一瞬、耳を疑った。

確かに真名を教える事は危険だ。

ほむらが求める情報との価値を比べればそんなモノには大した価値は存在していないが、それでもこちらの願いに膨大なモノをふっかけて来る程度の事は覚悟していただけにどこか呆れてしまう。

「よろしくね？ ほむらちゃん。私は高町なのは！なのはでいいよ！」

そう笑って手を差し伸べるなのはの顔がほむらの目にはどこか大切な友達 まどかにダブって見えた。

そして、高町が名前を尋ねた本当の“意味”にその時、初めて気付いた。

「これで、私達友達だね？」

その高町の笑顔にどこか昔の自分を思い出してしまいクスリと久しぶりに笑ってしまった。

平穩なる買い物（後書き）

マミさん道場

さやか「はあ……マミさん、こんな道場に呼び出して何かあったのかな？しかも、体操服にブルマ指定されたし……」

マミ「早かったわね？美樹さん」

その言葉に振り向くと目の前に広がる光景にさやかは固まってしまった。

マミさんの頭はどう見てもお菓子の魔女シャルロッテにマミマミされているのだ。

ただ、突っ込むとマミさんの心の傷を抉る事にもなりかねないので、笑ってスルーする。

さやか「そういえば、今日は何の用でsか？こんな道場にしかもブルマ指定で？」

マミ「ああ、その事ね！つまり、原作のタイガー道場的な事をするためよ！それにしても、どこから声がするのかしら？なんだか暗いし生暖かいのだけど、美樹さんはどうかしら？」

さやか「えっ？そうですかね？」

それはシャルロッテの口内だからですとは口が裂けても言えないさやかはこの状況にどう対応していいのかわからず右往左往してしまふ。

だが、そこへ現れた暁美ほむらがさっそうと現れた。

ほむら「その必要はないわ」

そう呟くとどこから取り出したのかRPGをマミさんの頭に食らいついたシャルロッテに向けて発射する。

その光景を見てしまったさやかは現状が理解できずに呆然と立ち尽くしてしまう。

ほむら「私は忙しいの。早くして貰えると助かるわ」

マミ「そうね？じゃあ、今回の聖杯戦争に対する意気込みをどうぞ！」

ほむら「まどかのありがたみを全世界、全宇宙の人間に知らしめることよ！」

そう強く断言したほむらと瞬時に復活したマミさんがもう次元が違い過ぎて着いて行けていないさやかはそれを完全に観客として見つめていた。

マミ「確か、まどかさんのリボンが聖凱衣として受け継がれているのよね？」

ほむら「ええ、そうよ！女神であるまどかから頂いた大切なものだから」

唯一の常識人である筈のさやかもこの異次元的な会話に自らの常識を疑ってしまう。

ほむら「それにしても、貴方達は大変ね。」

さやか「何がよ？」

ほむら「不幸が似合いそうだからってだけでこんな場所を任されて」

その言葉にさやかは一瞬固まってしまいが、次の瞬間、叫び始める。

さやか「ちょっと待て——！それは、私らが不幸って事が——
——！」

ほむら「そっちは頭からパクリとマミという新しい言語まで生み出した中二病、あなたはひぐらしの時報男ならぬ、時報女じゃない。結構な確率で魔女になるから」

さやか「時報女……そんな二つ名いやだ——」

ほむら「あら、もうこんな時間ね……そろそろお暇させてもらっわ。私も忙しいから」

マミ「私はチーズじゃない……チーズじゃない……友達いない寂しい中二病女じゃない」

ほむらの言葉に二人とも撃沈していた。

END

感想待ってます

高町なのは登場（前書き）

なのは「とうとう、私の出番だね！」

杏子「てか、あんた誰だい？ここはまどか マギカのキャラだけの場所なんじゃなかったのか？」

なのは「違うよ？一応、参加してるサーヴァントが登場するキャラに所縁があるキャラは続々と登場するんだよ？」

杏子「へーってか、私一人だけで知らない奴の相手かよ……マジかなのは「あははは、ごめんね？」」

高町なのは登場

凜とまどかを包み込んだ桃色の光の中を掻い潜りランサーへ向かって一本の矢が飛来した。

その矢はランサーでは無く、その光を放つ杖へと一直線へ向かい魔方阵に当たるとその魔方阵の向きを僅かにずらす。

「やるね！」

確かに魔力量の桁違いからまどかの矢では押し返すすべはない。

だが、物量で時間稼ぎ、光線を放つ杖にホーミングして矢を放つ事で狙いを逸らす事なら可能だと瞬時に判断したのだ。

そして、逸れたのを目視で確認するとまどかは素早く凜を拘束する輪を射ると校庭へと飛び降りる。

「なんなのよ！ あの拘束！ 魔術回路に魔力が流せないし、力も入らないしあの子の能力？」

「わからないけど、真正面から戦うのは危険だと思う……でも、向こうも簡単には逃げられそうにはないね」

そう凜に告げるとまどかは急いで背後のランサーの方を振り向いた。

まどかの目線の先には膨大な数のスフィアを待機させてまどかに狙いを定めているランサーの姿が目に入ってくる。

それに対して、まどかも弓を絞り小規模な魔方阵を展開して対抗する。

「面白い魔法だね！ 膨大な量のホーミング性能の矢を放てる弓……」

…でも、それだけじゃないよね？」

なのはがこの戦いを楽しむように笑いながらそう尋ねるが、まどかは首を横に振りそれを否定した。

「私に出来るのはコレだけ……貴方みたいに、多種多様の魔法が使える訳じゃ無いから」

「まどか！ 何で手の内を明かすのよ！」

背後で凜がまどかに呆れながら叫んだ。

手の内が弓しかないことを晒せばそれだけ接近戦に不利だという事を教える事になる。

特に目の前にいるランサーは推測でも中遠距離型……どう考えてもレンジでは分が悪いからだ。

だが、そんな凜の言葉は矢とスフィアの衝突による爆音でまどかには一切届かない。

拮抗し、激しくぶつかり合い、粉じんが辺りを覆い隠す。

そんな中でそのスフィアの嵐を掻い潜ったまどかの矢がランサーの背後から飛来し、ランサーを襲った。

しかし、その死角からの攻撃をまるで視えていたかのようにランサーは身体を逸らせるだけで難なく躲けて見せる。

その際にランサーは僅かにまどかから目を逸らしてしまう。

その僅かに視線が逸れた隙にランサーへ向かってまどかは走り込んだ。

互いの距離が縮まったことにより発射から、被弾までの時間が徐々に短縮され、まどかの矢がランサーのスフィアの生成量を追い越し、拮抗は崩壊し始める。

その状況にまどかは戦況が傾いた事を確信すると矢を放ちながら、ランサーに向かって懇願した。

「私は誰も傷つけない！ だから、退いて！」

「言ったよね？ マスターによる命令だつて！ それに、これは聖杯戦争だよ？ 最後の一人になるまで殺しあわないといけないの！」

そのランサーの答えに凜はすぐに令呪による強制の可能性が頭に浮かび上がった。

そうになると、令呪使用により本来の実力以上を発揮している可能性すらありうるのだ。

今のまどかではこの実力差を覆せないと判断した凜はここは生き残るためには令呪を使うべきだと判し、令呪を発動させようとする。

「学校から脱出……えっ！ 嘘！ なん、令呪が使えないの！」

だが、令呪は発動どころか一画も消費されることは無かった。

そんななかでランサーの保有する直観がここアーチャー以外にもサーヴァントがここにいると感じ取る。

それも、令呪の使用を阻害できるクラスの何か強大なモノが……大き過ぎる気配にランサーは辺りへの警戒を強めるも気配以外には感じ取れずサーチャーにすら引つかからない。

だが、次の瞬間急速に魔力を奪われるる感覚にまどかとランサーは見舞われる。

それにより、魔力により構成されたモノは全て分解されてしまい、先程まで押していたまどかの矢とランサーは展開していたスフィアが徐々に消滅していく。

同じようにマスターである凜の持つ魔力もまた減少し始めていた。

「何なのコレ！ まどか、何かわかる！」

「分からない……けど、何か不味い何かがここにいる……多分、この真下に……」

真下、そうなると地面の中だ。

確かに霊脈は流れているがここはさほど重要な霊脈ではない。

そんなモノが真下に本当にいるのかは疑問に感じてしまうのだが、本当に存在しているのならソレは今後の戦いの上で相当厄介な存在となるだろう。

だが、そんな事を考えているような暇などなかった。

その時、背後から小枝の折れる音が聞こえたのだ。

凜が振り返った先にいたのは衛宮士郎だった。

英雄達の人智を超えた死闘……

魔術師でもなくとも誰もが目を奪われる光景だった

そうたとえば

誰かがそこに居合わせてしまう可能性を忘れてしまうくらい

ランサーは即座に魔術師同士の暗黙の了解である目撃者排除にタワーゲットを変えて動き始める。

凜はそれを追いかけるランサーを止めようとするが、魔力消費は少ないまでも別の要因での消費があつて少し弱つてしまっているまどかに無理をさせる訳にもいかず、ランサーを追うことは出来なかった。

そして、凜はまどかを抱えたと一端、何かいるであろう学校の敷地を後にしてまどかの回復を待った。

衛宮 side

なんなんだアレは……

ただ、これだけは分かる

アレは見てはならなかった

だから……

逃げなければ殺される……

そう考えると急いで、学校を飛び出した。

だが、そう簡単にランサーから逃げられる筈が無く、その存在に
先回りされてしまう。

「ごめんね……私はこんなことしたくないんだけど……」

目の前に現れたのはどんなに見積もっても小学生高学年の少女な
のだが、その子が持つ杖が先程の戦闘を行っていた人間であると証

明していた。

そんな中で、自身の周りに何か違和感を感じた士郎は急いで右へ跳ぶ。

その咄嗟の判断にその少女は驚愕の表情を浮かべていた。

「嘘！ バインドの位置が分かるの！」

バインドと言われても士郎には何の事か分からない。

急いでその少女の横を急いで通り抜けると良く分からないがバインドと呼ばれるものがあるであろう位置を直感を頼りに避けて走り抜けた。

「はぁ……はぁ……」

家に辿り着き、安心して座り込んでしまいがすぐにこんな事をしている場合では無い事を思い出す。

生きている以上は口封じのためにここへやって来る可能性があるからだ。

その時、背後に何か不味い気配を感じた。

その桃色の光線は士郎を包み込み、窓を破壊してそのまま庭へと士郎を放り出す。

そして、転がって倉の壁に叩き付けられた士郎に立ち上がる隙を与えず、ランサーは杖を突きつけた。

「ごめんね……」

泣きそうになるのを必死に堪えながら、杖の先に現れた魔法陣に魔力を通していく。

死ぬ……？

俺はここで死ぬのか……？

冗談じゃない！！

俺はまだ誰一人として救えていない

俺はまだ正義の味方になっていない！

衛宮士郎はまだ死ぬわけにはいかない！！

その時、左手の痣が輝き、蔵の中に紫電が走った。

高町なのは登場（後書き）

マミさん道場

さやか「どうも！時報女こと、さやかちゃんでーす」

マミ「随分、吹っ切れたのね？」

さやか「気にしないでください！では、サーヴァント紹介行ってみようー！」

クラス ランサー

マスター 不明

真名 高町なのは

性別 女性

属性 秩序・中庸

筋力C 耐久A+ 俊敏C 魔力A++ 幸運A 宝具A+++

クラス別保有スキル

対魔力C

保有スキル

????

???

直感 A 戦闘時、常に自分に有利な状況を感じ取る能力

宝具

???? A++++

???? ???

さやか「マミさん？　なんか、優遇され過ぎじゃありませんかね？
Aばかりじゃないですか！」

マミ「まあ、根っからの主人公属性だし、参加メンバーの中で一番
主役っぽいじゃない？」

さやか「まあ……そうなんですけど、ことごとく赤毛のお兄さんに魔法
避けられてた気がするんですけど……」

マミ「あれは彼が世界の異常に敏感だからよ！　魔法陣の発動を直
感的に感じて避けてたの！」

さやか「そうか……まあ、いいや！　ところで、なんで令呪が使え
なかったんですか？」

マミ「それは後々判明するわ。ただ、使用不可になった訳じゃ無い
から注意してね？」

さやか「へーって事は、まどかの言った下にいる何かの影響の可能

性が大きいのか!」

マミ「そうなるわね? この聖杯戦争の中で最もイレギュラーな事よ」

さやか「まどか、生き残れるのかな? このキャラクター表見たら心配だよ……」

マミ「私達に出来るのは応援だけよ! それに、まだ宝具は使っていないわ!」

さやか「あれ? Zeroの必滅の黄薔薇は名前言わなかった気がする……」

マミ「あれ? そうだったかしら?」

さやか「それに、まどかの弓って真名解放したらどうなるんだろ……」

マミ「そう言えば、本来の能力失われて弱体化してたわよね……」

END

始まった戦争（前書き）

杏子「誰もいないな…… ったく、私一人に何しろっていうんだよ？」

ほむら「安心しなさい。次回から貴方も本編で出番があるわ」

杏子「まさか、その為にマミやさやかみたいに変な目にあわされてなかったのか！こりゃ、誤解してたね」

ほむら「次回からの前座もあなたの役目よ？」

杏子「へえっ？なんでだよ！私も本編で活躍するんだよね？」

ほむら「ええ、違う世界線の貴方が」

杏子「っておい！それは私とは言わないだろ！ここにいる私とは別人だよな！ふざけるな！」

ほむら「さて、本編に入るわよ…… 予約投稿をミスって全てがパアになっ て作者も相当打ちひしがれているみたいだし」

杏子「ちよつと、作者締め上げてここに連れて来てやる……」

始まった戦争

紫電の先から突如、跳び出して来た何かに咄嗟に反応してランサーは砲撃をキャンセルする。

そして、すぐさまランサーは自身の前面にプロテクションを展開し、すぐさま攻勢に転じられるようにと同時にスフィアを展開する。それに対して召喚された存在はスフィアを警戒し距離を取りつつ、ランサーの出方を窺う。

「何が……」

何が起こったのか理解できない士郎は蔵の中から外を窺うが粉塵によつて覆われてしまつて何も見る事が出来ない。

そんな状況に思わず更に身を乗り出してしまう。

それに気付いた影は慌てて士郎の方を振り向かずに叫んだ。

「何してるんですか！ 一般人は下がっててください！」

徐々に粉塵が晴れて現れたのは黒いスーツに金色の髪を靡かせた美女だった。

その光景にランサーは僅かに動揺し、口を噛み締めるがすぐに元の表情にもどる

金髪の女性はランサーとは違い、武器であるバルティッシュを構えるも目の前の光景を信じる事が出来ず、撃置く事が出来なかった。

「なのは………」

「フェイトちゃん……なの？」

互いに見知っているだけあって傷付けるを躊躇ってしまう。

フェイトにとって、なのはかけがえのない友人であり、大切な仲間だ。

そんな仲間を敵として排除するなど、出来る筈が無かった。

だが、そんな状態を続けて行く訳にはいかない……

なのはが間違っているのであるならば、絶対に止めなければならぬ。

そんな中でなのはとの出会いを思い出した。

今のように言葉ではわかり合えず、魔法を使いぶつかりあう事によってわかり合ってきた。

フェイトはそれを思い出すとバルティッシュを握りしめ、決心を固めるとなのはを見つめ問いを投げかけた。

「なのは……自分が何をしようとしたのか分かっているの？」

「それは、フェイトちゃんのマスターを殺そうとしたことかな？」

フェイトはその言葉に頷くと、アサルトフォームへと変形させた金色の刃をなのはへと向ける。

それに対して、なのはもフェイトに対してレイジングハート周囲に魔方阵を展開して魔力を充填させて臨界態勢でフェイトへと杖を向けた。

「答えて！　なのは！　なんで、こんな真似をするの！」

「なんでって、それはマスターの命令だからだよ？　フェイトちゃん……英霊として召喚された私はマスターの命令に縛られてるの……それがサーヴァントとして縛られた私達の運命なの……それに、力になりたい子がいるから……」

「なのは……」

その敵対宣言とも言えるなのはの言葉にフェイトは俯いてしまう。だが、すぐに顔を上げると深呼吸をしてバルティッシュを握り直すとなのはへと向き直った。

「なのはの気持ちは分かった……でも、それはなのはの友達として見過ごせない……私が全力でなのはを止める！」

フェイトの言葉になのはは小さく頷くとどこかその姿勢に対して嬉しそうに笑った。

「強くなったね……フェイトちゃん……なら、全力全開でぶつかりあうしかないね……」

フェイトが本気でぶつかるのであるなら自身も本気でぶつからないと失礼になる。
そう判断したなのはレイジングハートの柄を強く握りしめフェイトへと照準を絞った。

「まどか！ こつちよ！」

学校の敷地外で消費したまどかを休ませた後、凜は急いで衛宮家を目指していた。

校舎内を探したが既に衛宮君の気配が無い以上は家へと逃げた可能性が高いからだ。

それはつまり、そこでランサーに襲われている可能性も十分に……そんな中でまどかと凜の前に見過ごせない光景が現れてしまう。

「これ……もしかして、ここで何かあったんじゃない……」

目の前に現れた光栄に漏れたまどかの言葉に凜は唇を噛む。

そこには女性が倒れていたのだ。

外傷はまるでないが、まるで死んだように冷たくなっている。

凜はそのあり得ない状態にすぐさま、魂食いであると気が付くと冬木の管理者でありながらこのような所業を見斬に防ぐ事が出来なかった自分の不甲斐なさに腹が立つ。

——衛宮君の事も捨て置けないけど、魂食いなんて外道行為を見過ごすわけにはいかない

そんな二つの大きな問題の中で凜は迷いに迷ってしまふ。

そして、決心を固めるとその女性を最後にもう一度だけ視界にいられた。

（ごめんなさい……でも、これ以上あなたのような被害者を出させないと誓う……だから、今はもう一つの問題を優先させてちょうだい）

「衛宮家に急ぐわ……確かに見過ごせないけど……私の不注意で巻き込んだ上に命を狙われてとなると、捨て置く訳にはいかないから……」

「凜ちゃん……わかった!」

その選択に深く頷くとまどかは真剣な眼差しでいまだ見えてこない衛宮邸を見つめた。

「遠坂のやつ……やっぱり参加してやがったのか!」

先程、女性が倒れていた近くの物陰から現れた男性が忌々しげに呟く。

それに対してもう一人の黒い着物を着た女性は気に入らない様子

でその男を蹴とばした。

「なんで、私がこそそしないといけないわけ？ あんな奴らなら私一人でも十分なのに」

「しかたないだろ！　なんで……こんな奴がサーヴァントなんだよ……」

本来なら、もっと大物が召喚される筈だった。

召喚の媒体となったモノとしては何一つ間違っていない。本来なら霊獣としては最も格の高い一級品であろうものが召喚されるはずだった。

誰が考えただろうか？　媒体となったモノの持ち主とは別のモノを召喚してしまう事になると……

この召喚に関しては少年の祖父でも意外そうな顔で自らの目を疑ったくらいだ。

そんなマスターの心境を知らずにその女性は更に少年を蹴飛ばした。

「もう悪霊を集めるのは飽きてきたし、そろそろ本格的にあいつらにしかけたいのよね」

「お前、もう忘れたのか！　キャスターに完敗して命からがら逃げだしたことを！」

少年のその言葉に女性は踏み付けようとしている足を止めた。

キヤスターとの戦いは向こう側に一方的にやられるばかりで、命からがら逃げだしたのだ。

もしも、あのまま続けていたのならライダーを排除できないと考えてキヤスターの武闘派マスターにより自分が排除されていただろうと考えるとその少年は顔を青ざめてライダーに当たり散らす。

「わかったら、少しは俺の話を聞けよ！僕は選ばれた人間！いわばエリートなんだぞ！それなのになんでお前みたいなやつがサーヴァントなんだよ！糞！」

「随分と小馬鹿にしてくれるわね？　なら、此方からも言わせてもらうけど、どうして私が貴様のような人間の言葉に耳を傾けなければならぬのかしら」

そう告げると女性は懷に携えていた刀を抜き放つ。
それと同時に女性の背後に大きな影が現れた。

「おい……待て！　俺はお前のマスターだぞ！　おい！」

少年は涙目になりながら懇願し最後には気絶するのだった。

衛宮邸の庭先ではスピードとコントロールという勝負が行われていた。

フェイトはこれまで培った経験でその物量とコントロールに対抗し、隙を見て切り込もうとする。

だが、天性の才能を持つなのははその経験の差を才能で巻き返し、踏み込もうとするフェイトを押し返す。

しかし、どんなに天性の才能があつたとしても歴戦の経験と年齢による成長率を考えると大人のフェイトと小学生のなのはでは知識も運動能力も歴然たる差があり、押し負けるのも時間の問題だった。それでも何とか拮抗しているのはフェイトがなのはのスターライトブレイカーを警戒しているからに他ならない。

あれを殺傷で放たれてはマスターどころの騒ぎではなくなってしまう。

最悪、この町が地図から消滅という結果すら起こり得てしまうからだ。

そんな拮抗した状態を崩すべく先に動いたのはなのはだった。

「フェイトちゃん……ごめんね……」

そう呟くと魔力が杖の先に魔方陣を展開し当たりの魔力を収束し始める。

フェイトはその光景にその魔法がなのはの得意技とも言えるスライトブレイカーであると気が付くと、魔力を魔方陣へと流す際の僅かな隙になのはの方へと踏み込みながら叫んだ。

「なのは！ そんなものを殺傷で放つたらどうなるか本当に理解してるの！」

なのはは慌てて止めようとするフェイトに対して冷静に冷酷な言葉突きつける。

「ねえ、フェイトちゃんがそこから動くと……マスターに直撃するよ?」

仕事柄故か、マスターを背後で守るように戦って来たその戦い方がここに来て仇となってしまった。

直線位置にいる以上は放たればフェイトが防御しなければ確実にマスターが消滅する。

その状況を理解できていないだろうマスターの事を踏まえて次の行動を練り直そうとするが、時は残酷にもそのような猶予を与えることなどせず、レイジングハートが魔力充填を終えた事を告げた。

「ごめんね……けど、これが聖杯戦争なんだよ?フェイトちゃん……」

なのははそう小さく呟くとフェイトとそのマスターへとレイジングハートを向ける。

「スターライト————ブレイカー————」

「――」

フェイトとマスターに対して放たれた桃色の星を砕くとまで言われた魔法が襲いかかる。

そんな中で、一つの影がフェイトの目の前に割り込んできた。

「星の力を秘めし『鍵』よ、真の姿を我の前に示せ。契約のもと、さくらが命じる。『封印解除』」

小さな鍵を取り出しそう唱えるとその力ギは次第に杖の形へと変化する。

そして、カードを一枚取り出し空中へと放り投げると先程、鍵から変化した星をモチーフにしたであろう杖でそのカードを叩き、呪文を唱える。

「星の力を秘めし鍵よ。真の姿を我の前に示せ。契約のもと――
が命じる。リリース！」

その呪文と共に杖の星の部分が回転を始めると次第に当辺りの魔力がそのカードを中心に形作られ始めた。

始まった戦争（後書き）

なのはの宝具についての解説コーナー

さやか「今回使ったのって宝具なんですか？スターライトブレイカーって？」

マミ「いい質問ね？星を砕く砲撃……凄く素敵よね……まあ、それは置いといて、これは宝具じゃないわ」

さやか「でも、前回のステ表にはスターライトブレイカーが乗ってましたよ？」

マミ「よく見なさい！ここにEXってあるでしょ？今回使ったのは何かしら？」

さやか「スターライトブレイカー……って、凄く屁理屈臭いですよね？」

マミ「それにカートリッジを排出してない事からも僅かに違う事分かるわ！」

さやか「確かにそう考えると微妙に違うんですね！」

マミ「ええ、そうよ！だから、彼女の真のスターライトブレイカーはこんなレベルでは無い筈よ！私もあんな必殺技を習得しないと！って事で修行するから今回はこの辺りで失礼するわね！それでは、さようなら！」

一回、書いてたのが消えました
凄くショックで立ち直れません……
結構苦労した一時間がすべて無駄に……
泣きたいです

報告

全ての編集が終わりました

諸事情により一話カットしましたが気にしないで貰えれば幸いです
十四日に更新されるアサシン戦から大きく話が変化しています
そこまではチマチマ程度なのですがwww

九人目のマスターとサーヴァント創るかも知れない

感想待っています！

乱入者（前書き）

作者「なんで、私ここにいるんでしょうか？」

杏子「私にここを丸投げしやがったからに決まってるだろうが！」

作者「いやー！ネタが無くて……」

杏子「私はネタ要員か！」

作者「違いますよ！この話書いて杏子の在り方への好感度がゲン
グン伸びてますよ！まあ、女神まどかやほむらには負けますけど……」

杏子「お前……ただ、髪がロングなのが好きとか言わないだろうな
？」

作者「えっ？嫌だなーそんな事ないに決まって……あの、槍を向けるのやめてくれませんか？怖いんで」

乱入者

「盾よ。魔法の力より我を守れ！」

その言葉と同時に辺りに結界が張り巡らせられる。

結界とスターライトブレイカーがぶつかり合い、その衝撃で粉塵をまき散らし視界を悪化させた。

そんな中でフェイトはその光景に言葉を失わずにはいらなかった。

目の前にいる小学生があのだ天性の才能を持つ魔砲少女とまで言われていたなのは必殺技と張り合っているのだ。

だが、その張り合っているように見えるのはあくまでもそう見えるだけだ。

なのはのスターライトブレイカーはその盾に僅かに亀裂が入っていく……

「凄いね！　だけど、私の魔法はそんな盾じゃ止められないよ！」

闇の書事件での結界破りが結界を壊すという概念となり、ここで結界宝具に対しては優位性に立つまでに至っているので宝具ではないにしろスターライトブレイカーも低ランクの宝具並に強化されているのだ。

だが、相対する盾もまた同じように剣以外の属性には無類の強さ

を誇るという概念を持っている。

その二つの概念のぶつかり合いがこの拮抗にも見える状況を作り出してはいるが、潜在的な魔力量によって盾に決定的な亀裂が入る。

その光景にフェイトもその少女の前にシールドを張り巡らせようとする。

「まったく、勝手に突っ走って行っただと思ったらランサーとやりあつてんのかよ……」

その言葉と共に高町なのはが突如背後に現れた赤いポニーテールの少女に槍で吹き飛ばされる。

なのははその際に一瞬、レイジングハートを手放したがすぐさま掴むと乱入者に標的を変えた。

——僅かにその横やりが遅れていたならば、確実に高町なのはの魔法が三人をまとめて飲み込んでいただろう。

フェイトはそう考えるとホッと安心するが、それと同時に乱入者の出方となのはの動きを見る。

そんな中で少女は片手で槍をくるくると回しながらもう一方の手で持っていた焼き鳥をほうばった。

「あのさーキャスター……何度も言うと思うけどさ、私は別に人助けや正義の為とかそんなお茶らけた理由でこの戦いに参戦した訳じゃないんだよ。勝手に潰しあってくれるってんなら勝手にやらしとけばいいじゃん——なのになんで、自分から戦いに突っ込んでいくんだよ……」

キャスターのマスターはそう呟きながら焼き鳥の串を全て頬張るとその串をランサーに向けて頬り投げる。

すると、その串は本来の強度ではあり得ないほどの威力を持ってランサーの頬を切り裂き、近くの土壌に突き刺さった。

なのはは頬から垂れた血を手で拭くと、少女を睨み付ける。

マスターからはサーヴァントと張り合える人間などいないと聞いていたが、目の前の少女は明らかに何かが異常で即座に排除するのを躊躇わせる程の何かがあるように思えてならないからだ。

そんな中で、キャスターが割り込んできたマスターに対してこう叫んだ。

「でも、杏子ちゃん！ 私は困ってる人を見捨てることは出来ないから！」

「解ってない……って、あんたに文句言っても仕方ないか」

杏子と呼ばれた少女は頭を掻きながら槍の切っ先を警戒しているランサーへと向ける。

そして、面倒そうに溜息を吐くとランサーを睨み付けこう提案した。

「どうする？ 近くにもう一体サーヴァントの気配がするんだけど四つ巴にはなりたくないんじゃない？」

確かに先程戦ったアーチャーまでここに参戦するとなると分が悪い。

その上、最も警戒せねばならないであろう目の前にいるキャスターのマスターに関する情報が少なすぎる事も考えるとランサーはその言葉にマスターに対して念話どうすべきか意見を聞くこととする。

だが、マスターでは無く何故か暁美ほむらが念話に出て、それに対して回答した。

（撤退しなさい。今の制約がかかった貴方では勝ち目はないわ。それに、貴方からの報告も聞きたいから）

（でも、ここで潰しておかないと後々厄介になるよ？）

暁美ほむらはそれがキャスターを指している事に気付くと少し考える。

なのはの目が間違っていないとするならば相当厄介な相手になるのだろう。

そういう相手の場合、マスターを抑えるのが自然な流れだが、そのマスターも規格外となっている。

そうになると、なのはの言葉に間違いはないが、まだ聖杯戦争序盤である。

これからぶつかるとであろうサーヴァント達との戦いの事を考えるところで戦う必要がない事をなのはに伝えるためにこう説得する。

（どれだけ強大な宝具を持っていようが私の持つ規格外の宝具の前では無力よ。それに、規格外なら既にバーサーカーとアサシンがいるわ）

ランサーが戦った中で逃げに徹しなければ危険だった二体のサーヴァント……そして、現れたキャスター

御三家の一角であるアインツベルンの召喚したバーサーカー

そして、今だにマスターを捕捉できない神出鬼没なアサシン

それから、多彩な宝具を操る戦略型のキャスターに規格外のマスター……

今回の聖杯戦争の中で中核となるのはこの三名だろうと曉美ほむらは踏んでいた。

だからこそ、今ここで目となり手足となるランサーを失うという
痛みだけは避けなければならなかった。

なのははむらの意図を読み取ると深く頷きレイジングハートの
照準からキャスターのマスターを外す。

「そうですね。今回は引かせていただきます」

「そうかい。わかったのなら、さつさといきな」

こうして、戦闘は終結に向けて動き出していたのだが、そこへフ
ェイトが乱入する。

なのはの本心、どうしてこんな事をするのかをなのはの口から聞
きたかったからだ。

「待つて！ なのは！」

「フェイトちゃん……私達は敵同士、話す事なんて何もないよ」

なのはは振り向く事をせず、そうフェイトに告げるとそのまま衛
宮邸を後にした。

そして、残された杏子は持っていた槍をどこかへ仕舞うとキャス
ターの頭にデコピンをする。

「ったく、本当に世話が焼けるなキャスターには」

「ごめんなさい……ライダーの時は良かったからつい……」

ライダーとランサーの違い

それは、杏子にとって仕事か否かでしかなかった。

ライダーは抹殺すべき悪であり、掟破りの魂喰いを行う大罪人……何より、埋葬機関の一員である以上はアレを見逃すわけにはいかないからだ。

それに比べてランサーは見境なく喧嘩をふっかけているだけで杏子から見ればかわいいだけだった。

最も、こちらを狙ってくるのであれば容赦するつもりはないが……

「まあ、無事だったのならそれでいいさ……まだ、こちらの手の内もばれてないようだしな……」

ライダーとの戦いでライダーが消耗していたのは何もキャスターだけの力では無い。

キャスターの攻撃はあくまでも相手の魔力を削ぎ落とし、生気を奪う魔力攻撃で物理的な威力は無い。

つまり、物理的な破壊を行っていたのは他ならない杏子だったの

だ。

本来ならば敵わない筈のサーヴァントに対して対等に渡り合えているのはこれまで吸血種を相手に埋葬機関として狩って来た経験によるものに他ならない。

杏子はまだこちらを警戒しているフェイトに呆れ果てると、そのマスターを見つめながらこう尋ねた。

「んで、そっちはどうするんだい？ わたしらはあんたらと戦うつもりはないんだが——それでも、殺し合いたいってんなら話は別だが」

その言葉にフェイトは咄嗟に士郎の前に立ちバルティッシュを杏子に向ける。

杏子はそれが戦うという意思表示だと判断すると再び槍を握り、フェイトを睨み付けた。

そんな一発触発の状況に殴り込んできたのはアーチャーと凜だった。

「衛宮君！ 大丈夫！」

塀を乗り越えて現れた凜はその現状を見てすぐにランサーはおらず、まだ士郎が生きている事に胸を撫で下ろす。

しかし、士郎の前にいたサーヴァントに士郎がマスターになり、

聖杯戦争に参加するマスターである事を意味していた。

三人のマスターが同時に相対する状況――

戦いにならない道理はなかった。

いつ引火しても爆発してもおかしくない。

そんな中でまどかは杏子の姿を見て突然、頭痛に見舞われる。

「まどか！　どうしたの！」

突然、頭を押さえて膝をついたまどかに凜はすぐさま駆け寄ると心配そうに見つめる。

痛みが徐々に引いていくとまどかは凜の手を借りて立ち上がり、杏子を見詰めてこう呟いた。

「杏子ちゃん……だよね？」

「なんで私の名前を――あんたはさっきまでここにいなかった筈だよな！」

突然現れたアーチャー自分の名前を言い当てられた事に杏子は警戒を始める。

名前を知られているという事は自らの手札を知られている可能性があるからだ。

だが、凜の頭にはその杏子の思いとは別に一つの仮説が汲み上げられる。

平行世界の同一人物

そうだとするならばまどかの英雄としての伝承が存在しない事が証明される。

世界そのものが違うのであれば全く違う魔法体系もその認識の些細な違いも全てが説明できる。

だが、それと同時にこんな少女がどうして英霊に祭り上げられたかが凜には前以上に気になってしまった。

「えっ……その、私のこと知っているのなら教えてほしいなって……」

「わけわかんねえよ！ アンタの事なんか知る訳ないじゃん！ 私らは初対面なんだ——行くぞ、キャスター」

まどかの問いに一触即発だった空気は冷め切り、興ざめと言わんばかりに杏子は槍を片付けるとさくらと共にさっさと衛宮邸を後にする。

その立ち去る杏子の後ろ姿をじっとまどかは見詰めていた。

言峰教会

「無事でよかったわ。戦略的撤退も視野に今度から入れておいて。まだ、聖杯戦争は序盤なのだから」

暁美ほむらはなのはにそう告げると報告に耳を通した。

そして、予想はしていたがアーチャーの存在に言葉を失う。

守る為に戦っていた筈が自らの手で殺めなくてはならない……

そうしなければ、真に聖杯は手に入らないのだから

七体のサーヴァント全てを破壊する事により聖杯は真に完成する。真に完成した聖杯でなければ世界の法則を変えるほどの力は無い

……

そんな事を考えていると不意になのはが話しかけてくる。

「もう一つ、気になる事があったの……」

「何かしら？ 話してちょうだい」

「アーチャーと戦っている最中に——圧迫感を感じたというのかな……？ その、言葉では説明しにくいんだけど、まるで何かに無理矢理押さえ付けられている感覚がしたの」

英霊を押さえ付けられるとしたらそれはこの聖杯戦争のシステムに干渉できるモノのみだ。

だが、なのはの報告を聞けばマスターも英霊らしき存在でもないもつと異質なものだつたという話だった。

そうになると、曉美ほむらの中で一つ、忌まわしい出来事が思い起こされる。

第四次聖杯戦争で聖杯から溢れ出した泥

呪いの塊ともいえるものだ。

あれで聖杯が汚染されているのなら……

この戦争で何が起ころうともそれは想定範囲内と言えるのかもしれない……

だが、曉美ほむらはそこまで考えて思考を中断した。

もしも、何かが頭の中でそれ以上考えるなと囁いているのだ。

踏み込めば戻れなくなると……

「セイバーに関しては問題なさそうね……度を越した優しさは甘さに繋がる。そこを突けば簡単に潰せるわ」

曉美ほむらはこれ以上、深く考えないように話を変えた。

そうしなけば、自身が保てなくなると感じたからだ。

ほむらがこれまで戦ってこれたのは単にまどかの思いがあったからだ。

そして、この戦争が自身にとっては最後の希望だ。

ワルプルギスの夜を超えられないとすると、別の方法で救うしかない……

もしも、この戦いそのものが無駄であるならばこんどはどれだけ

探し回ればいいのだろう……

そう思えるまでにほむらの心は消耗していた。

「でも。油断しない方がいいと思う。フェイトちゃんは強い子だから」

「そう。でも、目下の問題はEX級の宝具を持つと思われるこの三名よ」

バーサーカーとキヤスターは多彩な力を用いる事が出来る。

逆にアサシンは一つだが、魔力で構成されている英霊に対して天敵と言える存在だ。

特にバーサーカーに関しては狂化してもなぜかそのままの意識を保っているというイレギュラーでもある。

早目に潰しておくか、消耗した所を叩くかになるが聖杯の杯を手に入れる為には――

必ずその“心臓”を手に入れなければならない。

「うん……それで、これからどうするの？ ほむらさんの指示に従えと命令されているんだけど……」

その言葉に曉美ほむらは首を傾げた。

あの男が全てを他人に丸投げとは珍しい。

むしろ、衛宮士郎辺りを突くのかと思っていた。

あれ程までに前回の聖杯戦争で執着していた衛宮切嗣の息子なのだ。

もしも、あの男のような男なら相当厄介な相手だけに全て言峰にぶつけて処理させたいというのが、ほむらの本心だった。

「悪いが、こつちも立て込んでいてね」

噂をすればご本人が登場する。

だが、言峰にしては珍しく少し疲れた表情をしていた。

「何かあったの？ 聖杯戦争に関わる事なら早めに教えて欲しいのだけれど？」

「いや、少しばかり知り合いの娘が参加しているのでな。まあ、気にする事は無い」

「意外ね。人の苦しむ姿を見て至高の喜びとするような貴方が他人の心配なんて」

「別に心配している訳では無い。むしろ、興味があるのだよ。何を聖杯に願うのかね……」

その言葉に曉美ほむらは忌々しげに言峰を睨み付けた。

だが、それを言峰は軽くあしらつと部屋をすぐさま後にしてしま
う。

「ほむらさん……」

なのはのその言葉だけが部屋に響いていた。

乱入者（後書き）

さやか「あいつまで登場してこの話に参加していないのって私達だけですよ？マミさん……」

マミ「大丈夫、美樹さん。あれは私たちの知る佐倉さんではないわ。あれは別世界線の佐倉杏子なのよ」

さやか「でも、なんか私達だけ扱いが酷くないですか？」

マミ「それはそうね……」

さやか「だって、マミさんなんて不幸過ぎてなんか変なミスで潰されるとか、私の宝具はネター……みたいな事この作者言っていましたから」

マミ「それは許しがたいわね……」

さやか「あつ、マミさんの固有スキルに厨二病がありますよ」

マミ「な！私はそんなじゃないわ！少し、作者に抗議して来るわ！」

さやか「あつ！行っちゃった……」

番外編 前夜

「それで、他にも何かあるんじゃないの？ 特にキャスターに関して……」

ほむらの言葉に言峰は小さく頷くとある映像を見せる。

その映像はつい先ほど行われたであろう戦闘の鮮明な様子だった。そして、その映像を見せながら言峰はこう呟く。

「何とも面白いとは思わないかね？ 聖職者でありながら、その身は“穢れた存在”と矛盾している……私の推測では彼女は此度の聖杯戦争において強敵になりうると思うのだが……」

愉しげに話す言峰の言葉など、ほむらには届いていなかった。

映像に映っているのは、佐倉杏子……

この世界には魔法少女などいないが、あの姿は紛れもなく佐倉杏子だった。

それにあの戦い方もどうみても見知った佐倉杏子の戦い方である。ほむらの頭にはあの悪魔の存在が浮かび上がってきた。

「まさか、この世界にも奴はいるの！」

「奴？ 何のことを言っているのかはわからんが、私の調べた限り彼女はすでに死んでいる……数年前に埋葬機関の手によって……なのに、今こうしてここに参戦している……実に興味深いと思わな

いかね？」

言峰の言葉になどほむらには興味などなかった。

死んだ身体、まるでソウルジェムを抜き出された魔法少女のようではないか……

その事で頭がいっぱいで言峰の話など全く入ってこない。

埋葬機関や時計台、封印指定……この世界のルールなどまどかが救えるのであれば破ってでも救って見せる。

それ故に佐倉杏子の姿をしたソレの出生には全く興味が無い。

ほむらの中で興味があるのはこの戦争に勝ち抜く手段とその方法、そしてこの世界に奴がいるか否かだけだ。

「少し、一人にしてくれないかしら？　考え事があるの」

抑揚のない、平坦な声でほむらはそう告げると言峰は小さく頷き部屋を後にする。

そして、部屋に残ったほむらは俯き、感情の籠っていない眼でもう一度その映像を最初から再生し始める。

別に佐倉杏子に興味がある訳ではない……

もしかしたら、この世界にもあいつ……QBが存在している可能

性がある事を懸念しているのだ。

あいつがいたとするならば無限のエネルギーを生むことができる可能性がある聖杯を見逃すはずがない。

だが、結論の出ない答えにほむらは深くため息を吐いた。

「ハロー キヤスター？」

その言葉に夜道を歩いていた二人の少女は振り向く。

少女たちの振り向いた先には灯の消えかけた電燈が一つあり、その点滅する灯の下で着物を着た女性が此方を見下ろしていた。

「へえ……随分と禍々しい英雄がいたもんだね……これじゃ、悪霊じゃないか」

赤い髪をポニーテールにした少女は口にくわえたポツキーを折ると懐から槍を取り出す。

それに追隨する形でもう一人の少女も星を模した杖を取り出した。

「意外ね？ 私のマスターと違って前線に出て来るんだ……そこは評価してあげるけど、所詮は人間、敵ではないわね」

「速い！」

気が付くとライダーは目の前から消えており、次の瞬間キャスターの目の前が真っ赤に染まる。

そして、隣でゆっくりと倒れていくマスターにそこで初めてマスターが刺されて事に気が付いた。

その光景にキヤスターは言葉を失うが、地面に当たる直前、マスターは飛散して消滅してしまう。

そして、同時にライダーの右腕が吹き飛んだ。

全く、状況が理解できないライダーはその理解できない状況に一度距離を取ると辺りを見回す。

「おかしいわね？ 確かに殺した筈なのだけど……感触もあつたし……」

そう呟きながらライダーは右肩を軽く回した。

すると、飛ばされた右腕が飛散し、消滅し始める。

そして、吹き飛ばされた右腕のあつた場所の肉が不気味に蠢き、やがてはもとの右腕として皮膚まで再生するのだった。

その状況にキヤスターは思わず、声を上げて驚いてしまう。

だが、戦いの真つ最中に長時間驚く暇などある訳がなく、一枚のカードを取り出すとそれを宙へと投げた。

「クロウの創りしカードよ。我が『鍵』に力を貸せ。カードに宿りし魔力をこの『鍵』に移し 我に力を！ ソード！」

そのカードを星の杖で叩くと同時にその杖でライダーへと斬りかかる。

だが、ライダーは携えていた刀でその杖を防ぐと面白そうに笑った。

「それが貴女の宝具って事なのかしら？　なら、私も使わせて貰うわね？　乱紅蓮、遊んであげなさい！」

ライダーがそう呟くと突如、背後に巨大な影が出現する。

ライオンのような体に複眼のように並ぶ目、尾には何匹もの蛇というおぞましい姿にキャスターは一瞬、怯えるも何かを呟き動揺した心を落ち着ける。

そして、すぐさまキャスターは次の手を考えるが、それよりも早くその不気味な化物が襲い掛かってきた。

しかし、その化物の爪も牙もキャスターへと届く事は無かった。

「まったく、世話の焼ける餓鬼だな……」

その声と共に、どこからともなく出現した槍が先程、ライダーを襲ったように乱紅蓮を襲う。

その攻撃により、その化物はライダーの背後へと吹き飛ばされてしまう。

「まだ、こんな所で切り札の一つなんか使いたくなかったんだけどさ……アンタは私と同類らしいし、その手の奴って確実に破壊しないと消滅しないからさ……手加減は出来ないよ？」

突如、キャスターと化物の間に現れた殺した筈のキャスターのマスターはライダーと背後の化物に殺気を放ちながら睨み付ける。

まるで無傷な様子にライダーは忌々しげに睨み付けると大声で叫んだ。

「舐めた事、抜かしてんじゃないわよ！ 人間風情が！」

「人間ね……アンタから見れば、私はまだ人間って事なのか……、さくら！ あんたはライダー本体に集中しろ！この化物を潰し次第、一気に畳み掛けるぞ！」

「えっ！ わかったよ！ 杏子ちゃん！」

あんな化物を一人で相手をするというマスターの言葉に耳を疑う

も、二人を同時に相手にする程の力が無い事が判っている以上はそれ以外にこの場を打開する方法は無い。

そのあとに映ったのはまるでランサーの如く槍を振るう佐倉杏子と杖でライダーを追い詰めるキャスターの姿だった。

ここから先は記録が無いが、最後に僅かに映った映像から判断するに佐倉杏子が独力でライダーの宝具と思われる化物を撃破、その後キャスターと共にライダーに瀕死の重傷を負わせている。

その高い実力から考えるに、この世界の佐倉杏子もあの世界でベテランとして生き延びてきた相当な熟練者であるとほむらは判断する。

映像の中で気になる点としては最初のライダーの攻撃を喰らった筈なのに無傷という点だ。

それ以上に気になったのは、何度か映像からも見て取れたが体の輪郭がぶれている場面が見て取れたという事だ。

高速で移動しているわけでもないのに、当たらないのは何かしらの魔術と考えるのが妥当だろう。

それも、相当なレベルで対魔力D……いや、Bですら防げないレベルの魔術と考えるべきかもしれない

つまり、何らかのアクションを見せずにそのクラスの魔術を行使できるマスターともなれば、それにも対策を立てながら戦わなければならぬ。

今回の事で救いがあるとすれば、戦う前にその能力の一部を掴めたことだろう。

もしも、何らかの魔術で惑わせているのであれば、ほむら自身の攻撃すらも躲されてしまう可能性がある。

その上、気になって仕方が無いのは切り札の一つと言っていた事だ。

まだこれ以上の切り札が存在する可能性を意味している。

そうなれば、こちらとしても本気で相手にせねばならなくなってしまう。

前回からの累積もあり、使える回数は数えられるほどしかないほむらの持つEX級宝具の使用も考えなければならぬかもしれない。そう思い至ると小さな声でこっぴどく呟いた。

「これで、キャスターは相当厄介な敵になったわね……」

しかし、ここではほむらは大きな見落としをしてしまう。

ライダーの能力である再生ばかりに気を取られて、禍々しい膨大な魔力にだ……

此度の聖杯戦争で最も魔力を保有し、それが穢れている存在……

この時はまだ、このライダーの真の脅威について気付く者は誰一人としていなかった

番外編 前夜（後書き）

ネタが切れました……

今回は休ませてください……

感想待ってます

アサシンの強襲（前書き）

前書きの使い方が判りません

ついでに、ネタがありません

質問への返信返しもかも感想に無いからできません……

サーヴァントの能力でも紹介しようかね

オリジナルスキル

オサレ A+++ アラヤにまで登り詰めた中二病

誰についているものかはおそらく大半の人間になら分かんと思いきが、まどかです。

あのハイパーまどかビームのネタからの派生
完全なネタスキル

因みにこの聖杯戦争においてまどかはそこまで強くありません。
周りがおかしすぎるのと、凜の召喚ミスによる補正でwww
では、アサシンが初登場します。

多分、誰だか分かる人は少ないと思いますが、すいません
魔法少女縛りはキツカッタwww

アサシンの強襲

「それで、取り敢えず私は今は戦う意思はないんだけどそっちはどうなのかしら？」

遠坂は戦闘の意志が無い事を示す為に両手を上げる。

先程の瞬時にマスターの前に移動したことから判断して、セイバーはスピードに特化したタイプである。

戦略的にアーチャーがこの場で戦うのは勝率が低いという思いもあるが、それ以上に衛宮士郎を巻き込んでしまったという責任感というモノが大きかった。

「マスター、ここは彼女を信じていいと思います。今のマスターはこの戦いについて知らない事が多すぎるから、そこを知らないところからの戦いに立ち向かう上で迷いが生まれると思うから」

「それは……なあ、遠坂……なんなんだよ？これは？」

その予想の斜め上に行く士郎の質問に遠坂は思わず呆れ返ってしまふ。

「あなた、まさかとは思うけど“令呪”のシステムはおるか、聖杯戦争の事すらろくに知らないの？」

「令呪？聖杯戦争？確か、さっきの奴らがそんな事を言っていたが、何なんだそれ？」

遠坂は一から説明しなければならぬことに溜息を吐くと、衛宮邸の方へと目を向ける。

聖杯戦争についてなど立ち話で済ませられるレベルでは無い。
アイツに説明を押し付けることも可能だが、後々で貸しにという
事にされては堪ったものではない。

「まあ、中で話しましょう？　長い話になるし」

遠坂のその言葉で居間へと移ると、士郎は遠坂とまどか、フェイトにお茶を出した。

「まず、最初に言っておくけれど私は正式に聖杯戦争に参加しているマスターよ」

その言葉に士郎は驚きを隠せなかった。

遠坂と言えば、学校では誰から見ても優等生、学校の男子からはアイドル視されている存在だ。

そんな人間にこんな裏があれば誰だって驚いてしまうだろう。

「そして、あなたと同じ魔術師……あの、衛宮君？　魔術師についての説明はいいわよね？　そこから始めるとすごく長くなるんだけど？」

「そこは分かっているから安心してくれ」

「そう、なら魔術師についての説明は省かせて貰うけど、この聖杯戦争のマスターには魔術師しかねないのよ。まあ……それでも、衛宮君の場合は何らかの事故によるものなんだろうけどね。それにしても、驚きだわ。まさか、衛宮君がマスターに選ばれたなんて……」

「そ、そうか、遠坂も魔術師でマスターだったんだな」

士郎の言葉に小さく頷き、一呼吸空けた。

「ようするに、七つのクラスが存在していて、そのマスターは自らのサーヴァントにどんなことでも従わせることのできる三回の絶対命令権を所持しているって考えればいいわ」

「長い話だったが、えらく簡潔にまとまったな……」

「そして、それぞれが万能の窯である聖杯を賭けて殺し合いをする」

遠坂の口から出た言葉に士郎は思わず、声を荒げた。

「そんなのおかしいだろ！人の命をまるでゲームみたいにやり取りするなんて……」

「そうね……だけど、言葉としてはその喩が適切よ……七人の選ばれた魔術師たちがサーヴァントと令呪を手駒として聖杯を賭けて戦う儀式……貴方はそのゲームに巻き込まれたのよ……それじゃあ、場所を移しましょうか？案内しなければならぬ場所があるの」

遠坂は淡々と士郎に告げると立ち上がり、玄関から外へ出る。そして、新都へと士郎とまどかを連れて向った。

「なあ、なんでお前はわざわざせつめいまでしてくれたんだ？」

士郎の口からこぼれた言葉に対して、遠坂は振り向かずおう告げる。

「私は変に貸し借りを作りたくなかっただけ。戦うか戦わないか貴方の自由だけど、もし貴方が次に遭った時にマスターとして私の前に立つなら……」

迷わず、あなたを殺すわ」

遠坂はそれだけ告げると士郎に簡単にこれから向かう先の話をすると、それ以上は何も語る事はなかった。

言峰教会につくと七人目のマスターとして言峰に士郎を預ける。付き添いとして霊体化したセイバーも一緒に教会へと入った中で遠坂とまどかは話が終わるのを教会の外で待っていた。

そんな中で、此方を観察するような視線に遠坂は気が付き、近くの草むらに目を向けるとその草むらの方へと気付かれないように視線を向ける。

（やっぱり、誰かに見られてるわね……）

そこで凜は除きの相手に対してカマをかけた。

「出てきたらどうなの？ 確か、杏子だっけ？」

相手があのキャスターのマスターという確信は無かった。

だが、その読みはどうやら正解だったらしく、ランサーのマスターが潔く凜の前に姿を現す。

そして、持っていたうまい棒を齧りながら、凜に探りを入れ始める。

「これは光栄だね……この土地を守護する遠坂の人間に名前を憶えて貰えるなんて……そんなに、身構えなくていいよ。別に戦う意思はないさ」

そういうと、杏子は持っていた紙袋から新たにうまい棒と書かれたお菓子を遠坂に投げ渡してきた。

凜はそれを一応は相手の機嫌を損ねない為に受け取るが、何かしらの魔術的な仕掛けがあるのではないかと疑いの目をその菓子に向ける。

だが、どこからどう見ても十円で買える駄菓子である事に思わず凜は首を傾げた。

杏子はそんな凜の様子に溜息を吐くところ告げる。

「お近づきの印だよ。それよりも、一つ聞きたい事があるんだよね……アンタにさ。その為のお近づきの印のつまらないモノって奴さ」

凜は杏子の言葉にお近づきの印のつまらないモノならもう少しマシなモノを持って来て欲しいと言い返しそうになる。

しかし、杏子の周りに溢れる魔力の荒れに遠坂の頬には冷や汗が流れ、その言葉を飲み込んだ。

いくら戦う意思はないとはいえ、この魔力の荒れは完全な臨界態勢という事である。

それに加えて、キャスターとアーチャーでは相性的な問題も考えるかどうか考えても分が悪い。

そのような結論に至った凜はここは相手の話に乗って機会を窺う方がいいと判断すると受け取ったうまい棒をまどかへと渡した。

そして、杏子へと笑いかけると念のために持って来ておいたポケットの宝石をいつでも使えるように握りしめる。

「内容によつては答えられないかもしれないけど、何かしら？」

「言峰つて前回の聖杯戦争からここまで不穏な動きをしたりしなかったか？」

遠坂は杏子の言葉に耳を疑った。

聖杯戦争を公平に行う上で設置された監督役を疑うなど聖杯戦争を行う上での規則を疑うに等しいからだ。

ただ、前回の聖杯戦争にアサシンとして参戦している上、その経歴の不自然さから考えるのならば疑いの目をかけられても仕方が無いのかもしれない。

しかし、全く持って杏子の欲しているような情報を凜は有していない。

その為、答えに迷っていると杏子は溜息混じりにこう告げた。

「その顔だと、何も知らないのか……いや、少し昔に親の関係で知ってるから挨拶に来たんだが、これまでの経験が言峰を信じるなつて訴えるんだよね……まあ、元々私は誰も信じちゃいないからいいんだけどさ」

「なら、こっちからも一つ聞かせて貰って宜しいでしょうか？ シスター？」

どこからともなく聞こえてきた言葉に杏子はすぐさま槍を構え、凜は握りしめていた宝石を更に強く握り締め声のする方向へと目を凝らす。

そこに居たのは小さな少年だった。

しかし、人としての機能を切除し、最低限動くようにしたガラクタというべきなのだろうか？

凜がそんな事を呟く中で杏子はその人形に対して忌々しげにこう呟く。

「おいおい……人形師って奴か？」

人形師……

文字通り、人形を創る者の総称だが完全に魂の器を模倣売る事が出来るのは一人を除いていない……

何故なら、人間を超えた人型は創れても、人間と同じモノは創れない。

おそらく、目の前の人形も人間と同じモノを創ろうとして出来たモノなのだろうが余りに出来そこない過ぎる。

動くのが奇跡的なくらいに……

「ああ、この身体ですか……かの蒼崎にすら無能の烙印を押されてしまいましたから……貴様は何と戦争するつもりかとね……」

「何が言いたい？」

「いや、だから人形師って呼ばれ方は好きじゃないんですよ。それはほかの人形師に失礼じゃないですか……所詮は未熟者で落第している私と彼らと一緒にするのはね？ 私は人形遣いです」

杏子はその言葉に舌打ちするとさくらの霊体化を解除する。

それと同時にその少年に対して突きを放つ。

杏子が行動を焦ったのは他でもない裏の世界では名の知れた封印指定や吸血種を狩る魔術師『人形遣い』を名乗る相手が目の前に現れたからだ。

人型でありながらヒトを超えたモノを創る事に関しては飛び抜けた才能を有しており、常に最前線で戦い勝利してきた狩人。

裏の世界では知れ過ぎている二つ名に先手を取ろうとした結果だった。

だが、それを容易く許す筈が無い。

霊体化していたのか、突如現れたアサシンが目の前に現れたのだ。杏子は掴まれそうになる寸前で、背後へと跳躍し何とか掴まれることは躲すいきなり体が重くなるのを感じた。

「マスター大丈夫ですか！」

「キャスター！ あんたは手を出すな！」

キャスターの言葉にすぐさま立ち上がると現れたアサシンに対して槍を構える。

そんな中で、今は協力する方が妥当だと考えると杏子にこう提案した。

「ねえ？ ここはお互いに協力して乗り切らない？ 悪い取引ではないと思うのだけど？」

だが、杏子からすればいくらこの聖杯戦争の御三家とは言っても

まだまだ未熟者にしか見えていなかった。
その為、その提案を鼻で笑って蹴り飛ばす。

「足手まといは引っ込んでろ！ テメエの御守りをしている余裕なんてないんだよ！」

「言ってくれるじゃない！ これを見てもまだ言えるかしら？」

遠坂はそう叫ぶと懷から宝石を取り出す。

そして、長年ため込んできた魔力を開放する。

それにより、作成された無数の氷塊を作成しアサシンとそのマスターへと降り注いだ。

降り注いだ氷塊は辺りに冷気を振りまき、みるみる内に着弾点に氷塊のオブジェを生成し、その氷塊のオブジェは辺りを侵食するようにあらに巨大化していく。

まるでコキュートスを現代に復元したような惨状に凜は確かな手応えを感じた。

だが、隣にいた杏子は違うらしくそれに対して小さく舌打ちをした。

「あんたの実力は分かった……だが、あつちはさらに上らしいぞ……」

杏子の言葉にアサシンの方へと目を向けるとアサシンとマスターの周りだけ全く無傷だった。

しかも、アサシンもそのマスターも微動たりしていない。

まるで、そこだけ攻撃が降り注が無かったかのような光景に凜は驚愕の声を上げる。

「どうして！あれだけの氷塊が降って一か所だけ無傷なんてありえない！」

「ああ……私でもあれだけのもの使われたら、掠る位するが奴はそれすらしてねえ……こうなったら仕方ないな、私の足だけは引つ張らないでくれよ？ 行くぞ！ キヤスター！」

マスターの言葉を合図に、キヤスターは一枚のカードを放り投げ、杖で叩いた。

それを見た杏子は再び真正面から突っ込んでいく。

「へえ、面白い魔法だね？ 私の使う魔法とは根本の理論が違うけど、大体は理解できた。闇を用いて視界を封じるか……確かに戦略としては悪くないが、相手が悪かったね……」

アサシンはそう呟くと目が見えないとは思えない速度で杏子に迫った。

そして、アサシンの手が杏子に触れる瞬間、杏子の姿が飛散していく。

いきなりの現象にアサシンだったのだが、アサシンは驚く事はせ

ず、楽しげに笑うと背後に手を向けた。

そして、そのまま空を切るように手を動かすと何かを掴むように地面に叩き付ける。

「残念だったけど、私の前ではいくら五感を支配しようが無駄だよ？ 私の口が近くにあるものを無差別に食べようとするからね」

凜はどうやって杏子を助けるか考えるが考えるが、全く持つて案が浮かばない。

そんな中で、まどかは弓を取り出すと三本の矢を生成し、アサシンに向けて放った。

「無駄ね！」

そう告げるとアサシンの肌が裂け、口となりその矢を食べ始める。凜はその光景に魔法が効かないと判断するが、こんどは弓の前に自分の背丈ほどの魔方阵を展開する事で大量の矢を同時生産し、アサシンへと放った。

すると、先程まで完全に口を使い分解をしていたアサシンが初めて回避行動を取る。

「助かった……アーチャー！」

解放された杏子は随分と魔力を食われたらしく、消耗していた。だが、まだ戦闘が終わっているわけではなく休む暇などない。けれども、此方には向こう側に通用する魔力攻撃以外の攻撃手段を要しているわけではない。

その事から凜はここは戦略的な撤退をする事を決めるとキャスタ

—にこう指示を飛ばす。

「キヤスター！ 私とまどかで奴の動きを止めるからその隙に奴をどこかへ閉じ込める事は出来ない？」

その言葉にさくらは小さく頷くと、凜はアサシンへ人差し指を向ける。

そして、自らの魔術回路にありつたけの魔力を流し込んで大量のガンドをアサシンに対して放つ。

「ガンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガ
ンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガ
ンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガ
ンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガ
ンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガ
ンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガンド！ガンド！」

「」

大量の魔力の塊にアサシンは左に転がり込み回避しようとするが、そこにはどかの大量の矢が待ち構えていた。

先程の回避の様子から同時に大量の魔力を消費する事が不可能と踏んだ上での作戦だったがどうやら効果があったらしく足止めに成功する。

「アーチャーさん！ そのマスターさん！ ありがとうございませう！」

！
」

キヤスターは小さく二人に対してお礼を言うと、アサシンが立ち上がる隙を与えず星の杖で一枚のカードを公使する。

そして、星のモチーフが回転し、アサシンの周りの台地が盛り上がり次第に形が変化していき、迷宮が形作られた。

この迷宮は上を飛び超える事が不可能な迷宮なのだが、ある裏技を持ちいられば簡単に脱出出来てしまう為にアサシン程度なら逃げる時間を稼ぐ程度にしか用いる事が出来ればいい方だろう。

アサシンとそのマスターが迷宮に閉じ込められるのを確認すると士郎の事が少し気かりではあるが、凜は衰弱している杏子を背負い急いでその場を後にする。

まどかも念の為にアサシンを警戒しながらも、凜の後に続いた。

「酷いやられ方ですね？アサシン」

「マスターが適当に戦えって“令呪”で命令したんじゃない？それを私の所為にされても困るわね……本来の10%も力を出せないんじゃないやりに難いっただけじゃない」

さくらの作り出した迷宮に空いた虫喰いのような穴から現われたアサシンは皮肉混じりに背後にいるマスターにそう答えた。

その様子にマスターも苦笑いを浮かべると近場に転がる失敗作の人形を蹴り飛ばす。

「ですが、我々としては上出来ではありませんか？ 彼らには我々が勝利するための楔を打ち込む事に成功した。後は我々は例のモノが届くのをゆっくりと待つことにしましょう」

「はいはい……しかし、よかったのかい？ わざわざ、私の宝具の弱点を露見させて？」

弱点……それは、彼女の食べられる量には限界が存在する事だ。つまり、それ以上の魔力を食べさせれば自滅してしまう。

だが、そのアサシンの疑問にマスターは不敵な笑みを浮かべた。

「大丈夫です……それも既に策があります……今回の戦いはその為の布石です。次の戦いのための為だね……その時は、誰の手のひらで回ってるのでしょうか？ 言峰綺礼……」

マスターはそう呟くと丘の上の教会を一睨みし、アサシンと共に杏子たちが降りて行った方向とは違う方向へと足を進めて行った。

アサシンの強襲（後書き）

ほむら「ようやくアサシン戦……って前回よりも凶悪になってるわね……」

杏子「てか、こいつ……どう倒せっていうんだよってレベルだよな……魔法利かないし魔力喰ってやがるし近接戦とか無理ゲーなキャラ？」

ほむら「安心していいわ。こいつよりも頭が痛く成るキャラがいるから……」

杏子「はっ？おい、それ本気で言ってるのか？これ以上、化物出たら街なんて消滅すつぞ！」

ほむら「そうなたら言峰が頑張るでしょう」

杏子「いや、それでいいのか？」

ほむら「深く考えたら負けよ」

感想待ってます

誓いと共闘と（前書き）

それは全ての終わりであり、始まり

私はその時の自分の行いを後悔している

好奇心は猫をも殺す

私は子供だった……餓鬼だった

好奇心に任せて深い森の中へと入っていき、ソレに出会ってしまった

「あら？　ここまで誰にも出会う事なくたどり着いたの？」

本来なら情人では辿り着く事の出来ない場所

運が良かったのか……

それとも悪かったのか……

私はソコへと辿り着いてしまった

「貴方は運がいいわね？」

私は目の前の存在に言葉を失った

子供から見てもわかる

絶対的な壁……そして、自らがいかに虫けら以下の存在であるかを

「本当に面白い子ね……貴方がここまで辿り着いたのも何かの縁……貴方の願いを一つだけ叶えてあげましょうか？」

「わ、私は………お父さんの言葉をみんなに聞、聞いて、欲しい………」

それがすべての悪夢の始まり

終わる事のない……生きながらにして地獄……

そう、それこそが彼女の死だった

そして、彼女が産声を上げた瞬間だった

誓いと共闘と

凜に肩を抱えられて逃げ出す中で杏子は夢を見ていた。

遠い過去の夢……もう思い出す事もないだろうと思っていたすべ
ての始まり……

まだ十代とは言え、前線で吸血鬼を狩り続けてきた

この聖杯戦争すらも、そんな戦いの一つにしか本来は過ぎなかった
しかし、自分の過去の幻影を他のマスターや自らのサーヴァント
に視てしまう

きつと、今更になりあの悪夢を思い出したのもそれが原因なのだ
ろう……

「もういい……私は大丈夫だ。それより、毎回あんな化物が召喚さ
れるのかい？ 聖杯戦争つてのは……私はソッチの方の部署には顔
が利かないから分からないけどさ」

新都と深山町を隔てる川原のベンチに杏子は腰を下ろしながら凜
にそう尋ねた。

ライダーの悪霊、異常なアサシン……アサシンはまだマトモかも
しれないが、ライダーに関しては反英霊どころか、英雄であるかど
うかすら怪しく思えてしまう。

それにあの女は確実に何かを隠していた。

もしも、杏子のこれまでの吸血種や封印指定ともとの戦いから培
われた経験に基づいた直感が正しければ、あの女は今後、何かしら
の仕掛けを施し最大の敵になるだろう。

杏子としてはその確認の意味もその質問には含まれていた。

「そんな事、私に聞かれてもわからないわよ！　ただ、何かがあるのかもしれないわ」

凜が何か思い出そうと必死に頭を動かす中で杏子はある事を思い出した。

第四次聖杯戦争の聖杯によって引き起こされたであろう大火災……大量の死者をだしたが、何を聖杯に願ったのだろうか？

第八秘蹟会に問い合わせれば当時の資料が手に入る可能性があるが、今の監督役がその戦いに参戦していた言峰だ。

そうになると、他に手を考えるとするならば他の参戦したマスターから情報を聞くしかないのだが、当時の戦いにおいて生き残ったのは三人であり、そのうちの一人の衛宮切嗣は既に死亡、ウェイバー・ベルベットは此方の立場上、接触は難しい……。

杏子はその事に完全にお手上げであると結論付けると小さくため息を吐いた。

「あの！　杏子ちゃん、聞いて見たい事があるんだけどいいかな？」

突然、まどかは杏子にそう切り出す。

知っている杏子とは違うが、失われている記憶の手掛かりがつかめるかもしれない……そう考えての問いだった。

まどかの中には、今も戦う事を迷っている自分がいた。

相手が自分と同じかそれ以下の少女であり、なんでも互いに傷付け合わなければならぬのか頭では理解出来ても心が納得できずにいる。

そんなまどかの真意に気が付いたのか、杏子は呆れながらこつまどかに告げた。

「あんたが聞きたいのは、私が何で戦うのかだろ——そんなに怖いのかい？ 人に武器を向けるのが」

「と、当然だよ！ 私はそんな事の為に魔法少女になったんじゃないよ！」

思わず感情の漏れたまどかに杏子は溜息を吐くと、頭を掻き毟る。その様子にさくらは思わず笑みを漏らした。

「なら、それが理由でいいんじゃないか？ あんたはその何かを守り通す為に魔法少女になったんだろ？ なら、それを最後まで守り通せばいい。簡単な話じゃないか」

「それは、そうかもしれないけど……なら、杏子ちゃんは何でそんな風に戦うの？」

その言葉に何かを言おうとするが、杏子はそれを寸前で思いとどまると顔を俯かせ顔の表情が分からないようにする。

さくらはそんな杏子の様子に何かを言いかけるが、さきに杏子に止められてしまった。

「別にいいよ……キャスター……どこにでも、ありふれた不幸だからさ。そんな不幸から逃れたくてこうなったってとこだよ」

そんなのはデタラメだった。

ありふれた不幸……私は自分で全てを壊してしまった。

私が戦うのは全て自分の為だ。誰の為にも力を使わない……自分の為だけに力を使う。

本来ならば既に死んでいたであろう自身がまだ生きているのは単にあの女の御眼鏡に適ったからである。

けれど、居場所などない……なってしまった以上はこの世に居場所などどこにも存在しない。

だから、戦い続けている。生きる為に……そんな事、まどかに言える筈が無かった。

そんな杏子の返答に凜はすこしだけ勘違いをしていた。

魔術師であろうとすればする程に今ある現実から離れてしまう。
それが魔術師としての性なのだ。

凜は杏子の使っている認識齟齬らしき魔術……それをサーヴァントに対して行使してる実力は全魔術師の中でもトップクラスの人間であるという事でもある。

それに加えて、英霊と対等に渡り合っている槍の技術……
普通に生きていないのは明らかだった

——実際は、凜が思っているよりも更に深い闇にいるのだが……

「ごめんね……変なこと聞いちゃって……そうだね、杏子ちゃん
のしている事は遊びじゃないもんね……命を危険に晒す仕事……気
まぐれなんかでやってるわけじゃないもんね……でも、何か思い出
せた気がする。私は大切な何かを守り通したくて魔法少女になった
んだと思う。だから、その時の自分の誓いを嘘にしたいくない！こ
れじゃあ、戦う理由にならないかな？」

まどかの言葉に杏子は深く頷く。

「いいんじゃないのかい？ 私にはあんたが何を思っ
て英雄の座にまで上り詰めたのかは分からない。だ
けど、アンタが生半可な思いで英雄になっ
たとは思わないからさ——なら、その思いを
貫けばいい」

杏子はそう告げるとそつとまどかの頭を撫でた。

はるか昔のように遠く感じてしまうほどの数年前……

姉思いだった妹に対して頭を撫でてやったように……

そう思うと自責の念が込み上げて来るが、涙が出るのを堪えるとまどかの頭から手を放した。

まどかはいきなりの行動に顔を真っ赤に染めて頭から湯気が出始める。

その様子を凜とさくらは楽しげに微笑んだ。

「それで、これからどうするつもりだい？ 確実に私らは協力関係だと思われちゃったし、私とキャスターだけではアサシンは倒せない——同じく、アンタとアーチャーだけでもアサシンは倒せない」

少し間をおいて、まどかが復活すると杏子はそう切り出してきた。アサシンのキャパシティは不明だが、能力的に言えば魔力を用いる攻撃は無意味だと考えた方がいい。

そうになると、キャスターの能力では不利になると考えての事なのだろうがそこで何かが引つ掛かってしまった。

キャスターの宝具は未だにわからないが、あの時使用したカードと考えていいだろう。

そうになると、魔力で何かを動かし戦うという方法を選べば十分に勝機はあるのではないか？

その答えに行きつくと、凜はこう尋ね返した。

「そうかしら？ キャスターの宝具は応用性の利くモノな気がするし、それ以上にアンタが何も切り札を隠してないようには思えないのよね」

「こりゃ、鋭いね……確かにそうなんだが、私が危惧してるのはアサシンじゃないんだよ」

杏子の言葉に思わず、凜は首を傾げる。

杏子の戦闘技術とキャスターの能力を考えると、ランサーとセイバー、ライダーとなるがそこまで彼女たちの強敵として立ちはだかるとは思えなかった。

それに加えて、バーサーカーはまだ表立っては動いていないが、前例から判断するに力押しで来るタイプだという統計を踏まえるのなら十分、杏子達だけでも対応しきれる筈だ。

そこで、先程の言葉を思い出す。

悪霊……つまり、杏子はこれまでの話から推測するにライダーを警戒しているのだ。

しかし、凜にはそこまで弱っているライダーを危惧する理由が分からなかった。

「ライダーのことかしら？ でも、貴方の言ってる事が正しいのならライダーはすでに相当弱っているはずよ？ ここまでの情報をまとめれば、一番魂喰いをしなければならぬほどに追い詰められる……それなのに、どうして、そこまで危険視するの？」

「はあ？ アレが弱ってるって？ あいつは無限の再生能力を持つバケモンだよ？ ——私とキャスターで撃退するのが精一杯だったさ」

撃退——凜はその言葉に驚きを隠せなかった。

キャスターの近接戦闘の能力はどう見積もっても低いが、それを補う形で杏子の近接戦闘技術は高い為に逃げられる事はあっても押し切れないというのは耳を疑ってしまう。

これまで見た杏子の戦いから、相当な熟練者である筈だ。

しかも、魂喰いをするまで追い詰められているという状況と喰い

違う。

ライダーをこの目で見るまでは分からない事が多すぎる……
杏子の言葉に凜は驚きを隠せないが、それ以上に動揺していたのがまどかだった。

「ソウルジェム……」

その言葉に杏子は左右に振り、こう答えた。

「ソウルジェム？　ライダーはそれを殺生石と言ってやがったぞ？
あとは解るだろ——殺生石っていやぁ九尾の狐の欠片……宝具に
何か隠していると考えるのが妥当だ……しかも、鵺らしき靈獣を操
ってやがったしな」

まどかはその言葉に何故かほっと一安心する。

そんな中で凜はランサーと戦った際の事を思い出していた。

アレが何によって引き起こされた現象かは全く判断が付かないが
これから戦い激化していく中で確実に目の前に現れる。

一人ではどうにもないであろう事は十分承知しているだけに今の
杏子の提案は素直にありがたいモノだった。

「わかったわ。でも、私から明かせる情報は無いわよ？ ランサーとも殺り合ってるみたいだし——あるとすれば、まどかが霊脈の中に何かが蠢いているのを感じた事くらいかしら？ ただ、すぐにその気配は移動したらしくて証拠はないんだけどね」

「それは初耳だね……良い情報をどうもありがとう。これで、交渉成立って事でいいのかな？」

杏子は凜に対して手を差し伸べると、凜もその手を握り返す。

こうして、凜と杏子の協力体制が出来上がり第五次聖杯戦争に大きな勢力図が出来始めようとしていた。

「先程は助けて頂きありがとうございました」

言峰教会の裏にある墓地は何もない荒野と化していた。
アサシンとバーサーカーの戦闘……

そして、マスターとマスターの戦いによるものだ。

実際にアサシンはバーサーカーをマスターから引き剥がしたに過ぎず、この荒野はアサシンのマスターによるものだった。

その上、凜と杏子が先程戦った姿である少年の姿とは違い、二十代後半の若い優男の姿だった。

「いえいえ、私はただ割り込んだだけですし、それに肩慣らし相手には本家本元であるアインツベルンの戦闘用のホムンクルスを見て見たかったですから……ですがどうやら、今回は出て来なかったようですね……」

「なんで、マスターを殺そうとしたんだ……あんな小さな子だぞ！」

助けられた筈の士郎はそう告げると、アサシンのマスターへと食ってかかる。

アサシンのマスターはそんな士郎の様子を一笑すると、士郎に人形を向ける。

「これは戦争ですよ？血で血を洗う戦い……その事を本当に理解していますか？ 貴方のような偽善者が勝ち残ることなど出来ません……衛宮切継の息子というので少しは期待していましたが期待外れもいいところですね……つまらない、本当に時間の無駄でした……」

「あんたが親父の何をしてるのかは知らない」 けどな、あんな小さい子を殺そうとするなんて見過ごせるかよ！女の子だぞ！」

「女の子……なら、貴方は目の前の小さい女の子に銃を向けられたのならば自らの命を差し出すのですか？」

「話し合えば、分かり合えるかもしれないだろう！ そんな事もせずにただ一方的に殺そうとするならそれは悪だ！」

その士郎の言葉に深くため息を吐く。

そして、人形を片付けると近くで退屈そうにしているアサシンに何やら合図を送る。

「悪ですか——あまり、ふざけた事を言っていると早死にしますよ？ 誰もが幸せになる理想郷なんて存在しない。人間の欲深さから考えれば、貴方の言う誰もが幸福になる世界などお時話です。そんなモノを追い求めても決して叶いませんよ？ 所詮は自己満足がいところですよ。行きますよアサシン…… 時間を無駄にしていました」

「なあ、いいのかい？ わざわざ、手を貸したってのは知り合いだったんじゃない？」

そうして、衛富士郎と別れ坂を下っていく中でアサシンはマスタ——にこう尋ねた。

「なあ、いいのかい？ わざわざ、手を貸したってのは知り合いだったんじゃない？」

アサシンの言葉に表情を失ったマスターは首を左右に振り、淡々とした口調でこう呟いた。

「衛宮切継は何度が会ってはいますし、彼のご子息ならあの件でこの戦いに全てを賭けて参戦していると思ったのですが、どうやら思い違いだったらいいですからね……あのような餓鬼に用はありません……いきますよ？ アサシン」

アサシンとアサシンのマスターはこうして再び闇に紛れて消えていく。

その足取りを追うのは教会の力を持つても不可能なモノだった。

こうして、聖杯戦争が開始して一日目の夜が終わった。

誓いと共闘と（後書き）

アサシンのマスターは蟲爺じゃないのかについて

黒桜難しすぎる……堕ちた英霊とか書けないが故の断念ですwww
それに、慎二君がいますからね……あの人は途中から話に割り込むKY老人だと思えます。まあ、出ませんが……つか、まずは桜が影薄いですwww

その代わりなのか、黒ワカメが出ます。

この小説ではワカメは地雷を踏みまくります。

士郎君も地雷を踏みまくります。

英霊エミヤポジの杏子様から見れば衛宮の在り方は虫唾が走りますからwww

感想待ってます

二日目～三日目予告

「さあ……始めるでしょうじゃないか！　僕を、見下してきた連中への復讐を！」

暗き闇に死者の魂が蠢く

辺りの空気は黒く濁り

最悪の二日間が始まる

「おいおい……こんなものありかよ」

止まらぬ悪霊たちの群れ

苦戦する杏子

「そう簡単には取らせてくれそうにないわね……」

「相手をしてあげなさい。鬼道丸」

現れた鎧武者と鶴を前に苦戦を強いられる遠坂達

そんな中、三人の人間が冬木市入りをする

「はあ、奴にはきっちり金を払ってもらわねばならないからな」

「あの……なぜ、私がここに？」

「アレはああ見えて一応、私の弟子みたいなものだからな。面倒事の一つくらい押し付けても問題なかるう。それに、奴の方がそういうモノの扱い方は詳しいからな」

アサシンのマスターへの届け物を届けに参上した燈子さん

それに、連れられるかのようにして現れたもう一人の女性

「ロアが片付いたと思えば、今度は悪霊退治ですか……さつさと、数を片付けて第八聖典の試作品を彼女に渡してメシアに直行すると思いますか」

埋葬機関第七位であり「弓」の異名を持つ代行者が夜の闇を舞う

冬木に覆われた瘴気の要因を取り除く事が出来るのか

明けない夜が始まる

「やってくれるじゃない……所詮は人間の分際で……ならば、己がどれだけちっぽけな存在か思い知りなさい」

その言葉と共に、闇が鼓動する

そして、最大の敵が姿を現した

二日目～三日目予告（後書き）

ノリです

気にしないでください

静かすぎる始まり（前書き）

すいません、嘘こきました

何が嘘かは最後まで読めば理解されると思います

分かる通り、ノンストップで走りきるとかできません

ただし、地獄が冬木の街に生まれます

てか、それこそライダーの本質と宝具を考えたらこういうのって
普通なんですけどねwww

では、怒涛の二日目の幕開けです！

静かすぎる始まり

「はぁ……おはよう……」

朝に弱い凧は頭を掻き毟り、大きな欠伸をしながらリビングへと降りる。

だが、そこで異変に気が付いた。

リビングから何かを焼く匂いがするのだ。

その香りに凧は慌ててリビングへと走るとそこには我が物顔で台所で料理をする杏子がいた。

「ああ、起きたか？もうすぐ飯が出来るぞ！」

「飯が出来るぞ！じゃないわよ！なんで、あんたがここにいるのよ！」

昨晚、話し合いが終わった後にわかれた筈の人間が自分の家にいる事に凧は驚きを隠せなかった。

何食わぬ顔で料理をする杏子に凧は苦笑いを浮かべるが、そんな凧を気にせず、料理を盛り付けると机の上に並べ椅子に座った。

「早く座れよ？冷めちまうだろ」

「ええ……そうねって！なんで、あんたがここにいいのかを聞いているのよ！」

凧は一瞬、食事をとる為に箸に手を伸ばすが、流れにのまれていく事に気が付くと慌てて突っ込みを入れる。

そんな凧に対して杏子は真剣な眼差しで凧を見つめると一拍置いて

てこう投げかけた。

「あんたが言っていた何かわからない気配の正体を探る為に教会側に聖杯システムの事で問い合わせたんだ……まあ、全く資料は無かったが一点だけ気になる事があった」

「まあ、システムについて御三家以外に詳しく知る人間はいなさそうなものね……で、分かった事って何よ？」

「いや、まあ……その、私達は本当に聖杯戦争の機能が正常だって信じていいのになってさ……ライダーが完全に悪霊の類でどう考えても英霊つてのに引つかからないんだよね……反英霊つてのもいささか疑問だったからさ」

凜はライダーとの面識がまだないためその問いには何とも答えられないが、確かに本来は英霊を召喚するシステムに英霊以外のモノが混じってしまったというのは少し気にかかる。

前例は調べてみなければわからないが、もしも前例がないならばそれは聖杯戦争のシステムそのものに異常がある可能性が高い。

そうになると、先日のもどかが感じた気配も何らかの聖杯戦争のシステムエラーによって召喚されてしまったイレギュラーの可能性が高い。

凜はその事をまだ寝惚けている頭の片隅に置くと欠伸を殺しながら

ら杏子の料理を食べ始めた。

それからすこしして、まどかが目をさましリビングへとやってくる。

「おはよう、凜ちゃん」

「ん？ ああ、おはよう。まどか、昨日はよく眠れたかしら？」

「うん。おかげさまで、あれ？杏子ちゃんたちが何でここに？」

状況が全く理解できていないまどかは首を傾げてしまいが、そんなまどかに対して杏子は早く飯を食うようにせかした。

そんな聖杯戦争の空気を感ぜさせない二人の様子に思わず凜は笑みをこぼしてしまう。

そして、二人のやり取りが終わると凜は杏子にある質問をぶつけた。

「ねえ、そう言えばライダーのマスターは判明してるの？一番危険なら、マスターを押さえればなんとなかなるんじゃない？」

「マスターか……どうも、アイツがマスターってのがしっくりこないんだよね……なんか、本みたいなの持って魔術を操ると素人のバカだったんだが、あのセイバーのマスターの事も考えればマジでそうなのかもしれないのか？」

凜のなかではその本というモノが気がかりだった。

もしも、その本がサーヴァントを操るものだとするならマスターが別に存在している可能性もある事となる。

衛宮君とセイバー、人形遣いとアサシン……

バーサーカーとは戦闘経験が無く、いまだに正体は不明
ランサーとライダーはマスター不明と来ている

ここは盤石な体制を敷くなら動かず相手の動くのを待つのが筋だが、あまりにイレギュラーが多い戦争に凜は決断に迷ってしまう。

「まあ、だから今後の方向を決めるために来たんだよ……今は均衡みたいなのが出来ちゃったお蔭で平穩に見えるが一度投石して波紋が出来るとそれは全体に広がっちゃう。一角を落とせば、確実に戦争は激化するからな」

仮初の平穩……確かにその言葉があっているのかもしれない。

ただ、アーチャーの能力上は奇襲や待ち伏せに弱い以上はどちらをとってもリスクは大きい。

凜は次の一手を迷っている中でまどかがこう凜に告げた。

「私はライダーさんが人に迷惑をかけているなら、それを止めたい。ダメかな？凜ちゃん？昨日、倒れていた人がこれ以上、増えるようなことは見過ごせないから！」

昨夜、凜とまどかが見た魂食いの被害者……

その時、凜は何を誓ったのか

その事を思い出すと凜はまどかの言葉に少し考え、溜息混じりに
こう返した。

「確かに、私はこの冬木の地の管理人である以上はその行動を黙って見過ごすわけにはいかないわね！そうと決まったら、ライダーをとつちめてやらないといけないわね！まどか」

「ライダーって決まったんなら、夜に見回りって所か？なら、それまで休ませてもらうわ……日の光は少し苦手だね……克服したとしてもキツイもんだ」

杏子はそう告げると食べ終わった食器を片付け、流しに置くとソファで眠り始めた。

そして、凜とさくらとまどかで何ができるかの確認などの準備を行い、夜が来るのを待つ。

間桐邸

「まだ、魔力の補充はできないのかよ！ライダーは！」

焦るマスターを他所にライダーは不敵に笑う。

前回のキャスターへの敗北を踏まえて準備は着々と進めてきた。魂喰いなど、その前哨戦に過ぎない。

その真の目的はもう一つの目的を隠す事だ。

悪霊をこの地へと集め、それをスキルで使役する。

すでに自らの力でもって場を乱し、魍魎や火車と言った霊が着々と集まり始めている。

後は、一度ライダーが合図を行えば冬木は惨状となるだろう。

「おい、聞いているのか！ マスターは僕なんだぞ！」

背後で喚くムシケラの様子にライダーは溜息を吐くが、そこである事を思いつく。

魍魎は人の死体に取りつくが、その力は対して強くは無い。

だが、もしも見知った人間に取りついたのならそれを殺すのに並大抵な覚悟が必要だ。

「そうだ……貴方は天才なのよね？ マスター？」

「当然じゃないか！ 僕は選ばれたモノ！ この戦いだって僕が生き残るに決まってる」

ライダーはそのマスターの自惚れ具合にニヤリと口元を釣り上げた。

この男ならそれなりにアレを上手く使えるかもしれない。

自滅するまでの時間、暴れまわり他のマスターの目を逸らしてくれればいい。

コレが死ねば本来のマスターとのラインが復元され、魂喰いの必要もなくなるからだ。

「貴方は力がほしいのよね？ なら、私がその力を与えてあげるわ

……」

そう呟くと額が割れてそこから現れた石にライダーは手を伸ばす。そして、その石を二つに分けるとそれを慎二に見せ優しく微笑みかけた。

「この石に選ばれれば無限の力を得る事が出来るの。あなたの望む魔術を使う為の魔力も、力も思いのまま……どうかしら？」

「嘘じゃないんだろうな？」

「あら？貴方が無限の魔力を得ればこれからの戦いなんて楽勝よ？それに死なない体を手に入れる事も出来る。貴方の願いである聖杯なんて簡単に手に入るわよ？」

その言葉に踊らされて慎二はゆっくりとその石へと手を伸ばす。ライダーはそのマスターの様子に何とか笑いを堪えると、その石をそつと慎二の手に乗せた。

「受け入れなさい……石の力を……」

そう告げると石をゆっくりと心臓の位置へと持っていき一気に押し付ける。

すると、まるで吸い込まれるかのようにゆっくりと皮膚の下へと落ちていき、やがては見えなくなった。

それと同時にマスターである慎二が苦しみだす。

「な、なんなんだよ！これは！」

叫ぶ、慎二を他所に高らかにライダーは笑うと部屋を出て、地下

へと続く階段を降り始める。

そして、地下に待っていた真のマスターに向かってライダーは笑いかけた。

それに気が付いたマスターも目の前に広がる光景を視ながらライダーへと笑い返した。

「ほう……なかなか面白い事をやりおる」

「それはお互い様ですわ？ 貴方も酷い事をなさいますね？ これだけの死体を集めるなんて……」

目の前には死体の山が積み重なっていた。
ただ、一つ普通の死体と違うのはその頭になにやら取り憑いてい

る事だ。

カテゴリーCの魍魎であり、死体を動かし人を喰らうしか能が無い悪霊……

ただ、それがこれだけの量となれば話は別だ。

目の前には百はあろうという死体が並べられており、それに今まさに魍魎が取り憑こうとしていた。

「貴方の息子さんにも道化になって貰いましたわ……あまりにも使い物になりませんでしたから少しばかり細工をさせていただきました……」

「構わん……奴では聖杯を手に入れることなど不可能だろうからな……」

マキリが日本に渡ってきて何代も代を重ねる事により、土地が合わなかったのか魔術師としての才を失ってしまった。

そんな人間になど最初から期待などしていない。

此度の戦いには自ら出陣しようとするこのサーヴァントが召喚されたときに一目見て決めたからだ。

すでに聖杯の器も確保している……だが、欠片で作った模造品では心もとない……真の聖杯を手に入れるにはやはり、アインツベルンの聖杯の器が必要だ。

「それよりも、準備はどれほどかかる？」

ライダーは真のマスターの言葉に一言、こう答えた。

「今日の夜には全ての舞台が整います。いかにサーヴァントとして優れていようと同時多発的に起こる戦闘と、我が宝具の前では無

力と言えましよう……」

「そうか……ようやく、我が悲願が叶う時が来たのか……」

静まりかえった地下室の部屋で悪霊が蠢く中、その人間の言葉が静かに何度も反響を繰り返し、やがては再び静まり返った。

静かすぎる始まり（後書き）

先に言うと、黒桜はでません

あれは士郎に認められなければなりません、この作品では一切そのような事はありません

わかるようにこの作品の士郎君は空気の読めない痛い子です

真の主人公は杏子様です（嘘）

すいません、まどかです

二日目の最初から分かった通り、惨劇を起こします

多分、批判が来るのではないかと不安です……

しかし、ライダーの話ですから彼女が輝かなければならない！

感想待ってます。

Self is taken, self is hidden
and self is not given.
It is the first cruel temporary
peaceful actually.
The temporarily first hope to
despair which finally is not I
n the department of a crime wh
ich finally is not, it is temp
orary help.
I will take over my offense of
the temporarily.
it is not saved - a soul In m
y dream, one time should save
and be.

固有結界の詠唱を考えるのは意外と難しいです

なんか、英語が苦手なので変な英文にw w w

誰の固有結界かは内緒ですが

目的のキャラとは違ってたんですがねw w w固有結界詠唱は難しい

策謀（前書き）

杏子「って、またお前かよ」

ほむら「いいじゃない。それより、本編では大変ね」

杏子「お前もその能力使って、暗殺とかしろよ！」

ほむら「その必要はないわ。貴方達が勝手に潰し合うのだから」

杏子「そうかい、そうかい……てか、ライダーやり過ぎじゃね？」

ほむら「そうね……あの言峰が死んだ目をしてたから、相当なんじゃないかしら？」

杏子「マジかよ……他人の不幸は蜜の味なんだよな？」

ほむら「けれど、どう隠せばいいのか分からない状態に頭を抱えてるから、静かで助かるわ……麻婆とか食べさせられないで済むし……」

……

杏子「麻婆？お前は麻婆豆腐が苦手なのか？」

ほむら「あれだけはもう二度と思い出したくないわ……」

策謀

夜になり、新都へと杏子と凜、まどかは来ていた。そんな中で杏子はポツリとこんな事を呟く。

「もしかしたら、アイツも私と同類なのかもな……」

「何か言った？」

凜は杏子の言葉が聞き取れず、尋ね返すが杏子は何でもないと誤魔化すだけだった。

すでに見回りを初めて数時間が経過しているが一向にライダーの気配はない。

これまでの魂食いの頻度からすれば、まるで嵐の前の静けさともいような不気味な静けさを思わせる空気が新都を覆っていた。

「おかしいな……これまでの頻度とやり方を考えるとそろそろ引がかかってもいい筈なのに……」

ライダーのマスターの下僕と思われる無能の行動を考えれば明らかに異常だ。

これまでの露見を鑑みない行動が明らかに一変している。

その時、杏子の鼻に嗅ぎ慣れたあの嫌な臭いが漂って来た。

他の二人は気が付いていないようだが、この臭いは確かに血の臭いだ。

しかも、ちよつとやそつとのレベルじゃない……何十人も人間から抜き去り、それをばら撒いて作られた血の池が放つ異臭だ。

杏子はその事に槍をいつでも使えるように手を添えながら、その悪臭の方へと走り出す。

「杏子！一体、どうしたの？」

「この先に何か嫌がる……お前らも覚悟しとけ！」

凜達も杏子の後と追い、角を曲がろうとするが、杏子はそれを制止しようとする。

しかし、凜たちはその制止を聞かず角を曲がってしまった……

そして、目に入ってきた光景に言葉を失う

いや、失わずにはいらなかった

「慎二……アンタ、何してるの……」

それがやつと凜の口方漏れた言葉だった。

血の池で人間だった肉片を蹂躪し、踏み付けている慎二の行動など凜に理解出来る筈が無い。

頭の中にはソレに対する拒絶感とその光景の気持ち悪さに今にも

吐き気を催す……だが、ここで、その流れに乗ってしまえば戦う事が出来ない。凜はなんとかそれを飲み込んだ。

そんな中で槍を握りしめて黙っていた杏子が、慎二を睨みながらゆっくりと近付いていく。

槍は怒りによって震え、凜や英霊である筈のまどかすらも冷や汗を掻いてしまう程の殺意を発していた。

「デメエ、やってる事の意味をわかってるのかよ！」

「意味？これまで、僕の事をバカにしてきた奴らを皆殺しにしてやっただけさ！僕は選ばれたモノなんだからね！」

その言葉に杏子は何も言わず、慎二の身体を槍で振り抜いた。手加減すらない、本気の一撃……

サーヴァントですら、並みのモノでは吹き飛ばされる一撃である。しかし、その一撃を人間としては考えられない筋力で慎二は耐えきったのだ。

その事に、杏子は目を疑うが、瞬時にライダーが何かをしたと結論に至る。

あの女の策略だとするならば、他にも何かしら手を打ってくる……そうならば、ここで全員が留まるのは愚策だ。

相手の戦力が見えない中での力の分散は危険だが、杏子にとっては一人の方が戦い易い。

さくらがいても本気の杏子にとってみれば足手まといにしかなら

ない。

杏子がそう分析していると、何とか持ち直した凜が目の前の光景について尋ねてきた。

「どういう事よ！佐倉杏子！こいつは人間の筈よ！魔術師としての才能すらない！」

「分からねエ……ただ、これじゃあまるで吸血種って感じだな……こうなっちまったらもう助からねえ……一思いに殺してやる方がこいつの為ってもんだろ……ライダーが何かしたようだがな……」

そう杏子は言い終わると、慎二から距離を置く。

そして、空いた片手で槍を持つ右肩を掴むと目を閉じ、誓言を唱え始めた。

「私が殺す。私が生かす。私が傷つけ私が癒す。

我が手を逃れうる者は一人もない。

我が目の届かぬ者は一人もない」

「打ち碎かれよ。

敗れた者、老いた者を私が招く。私に委ね、私に学び、私に従

え。

休息を。唄を忘れず、祈りを忘れず、私を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる」

「装うなかれ。

許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、光あるものには闇を、生あるものには暗い死を」

「休息は私の手に。貴方の罪に油を注ぎ印を記そう。

永遠の命は、死の中でこそ与えられる。

——許しはここに。受肉した私が誓う」

「—— “この魂に憐れみを” キリエ・エレ
イソン」

その言葉を言い終えると同時に杏子は瞼を開けると慎二へ向かって走りだし、跳躍すると同時に心臓めがけて槍を振り下ろした。

心臓を穿たれた人間は死ぬ。

絶対的な法則の中でその場にいた誰もが慎二が死んだと思った。

だが、それで話が終わる事は無かった。

心臓を貫かれて死んだ筈の慎二が刺した槍を掴んだのだ。

そして、ゆっくりとその槍を引き抜くと槍ごと杏子を近くのビルへと叩き付けて瓦礫の中へと沈める。

慎二はそれを自らの目で確認すると高らかに笑った。

「そうさ！これが選ばれたモノである僕が得た力だ！これなら、もう誰にも負ける事は無い！今ならこれまでの事を許してやってもい

いぞ？遠坂？」

「誰があんたなんかに謝るのよ！」

みるみる傷が繋ぎ合わされていく慎二の心臓の穴に凜は恐怖を感じながらもそう言い放つ。

凜はまどかが配置につく為の時間稼ぎをする為に人差し指を慎二へと向け、魔術回路に魔力を流し込む。

前回戦ったアサシンとは違い、ダメージは通る……ならば、宝石を使う事もないと考えるの判断だったが、それは誤算だった。

大量に放たれるガンドの嵐に後退する事無く、徐々に凜の方へと近付いて来るからだ。

そして、凜の目の前に来ると慎二は高く腕を振り上げた。

「愚かだったな！遠坂！」

「馬鹿はアンタよ！」

その言葉と共に、射撃位置に移動したまどかが弓を振り絞り、小さく呟いた。

「ごめん！でも、もうこれ以上罪を重ねるのはよくない事だと思うから！」

弓の前には小さな円形の魔方陣が現れる。

そして、まどかが弓を射ると同時にその魔方陣に魔力が流れ、ピンク色に発光すると大量に生成された矢が慎二に襲い掛かる。

だが、それらが突如現れた轟音により跳ね返されると同時に、慎二の前に黒い影が現れる。

「どうした！遠坂のサーヴァントはこんなものなのか？雑魚じゃないか！あれだけ、僕の事をバカにした癖に哀れだな！」

「おいおい……私は眼中に無しかよ？ど素人の糞餓鬼が！いきがってるんじゃないよ！」

いつの間にか瓦礫から抜け出していた杏子は今にも凜へと襲い掛かるうとしていた鶴を素手で掴むとそのまま隣のビルへと叩き付ける。

そして、すぐさま杏子はライダー本体を探すように指示していたさくらにこの場を離れるように指示を追加する。

「さくら！あんたは凜の指示に従ってライダーを見つけ次第、対処しろ！あの女はこの近くにいる筈だ！このバカはあたしが潰す！」

「ちょっと待ちなさいよ！そいつを殺すつもり！」

凜の動揺に杏子は溜息を吐くと髪を掻き毟る。

魔術師としてはまだまだ未熟な凜にとってこの男は現実の一つなのだろう。

杏子が失った掛買の無い時間……

だが、この状況でそんな優しい事は言っていられない手を抜けば逆に喰われる

弱肉強食……弱者は蹂躪され、強者の食い物にされるだけだ
しかし、それは凜の生きる世界とは別の世界の話だ

「助けるにしても、なんでこうなったのかわからないなら助けようがないだろ？だから、私がここで足止めしといてやる！だから、急いでライダーから情報を聞き出せ！そう長い時間、私も持ちこたえられないぞ！」

だが、その言葉が嘘である事にさくらはすぐに気が付いた。
杏子は分かっているのだ。

もう、目の前にいる人外は戻れない事を……
身内にそれを出し、殺してしまったという責を凜に負わせない為の優し嘘だった。

「わかった！急いでライダーを探し出す！行くわよ！まどか！さくら、ライダーの居場所まで案内して！」

「えっ！はい！こっちです！」

さくらは突然、凜に話しかけられた事により、現実へと引き戻される。

そして、さくらは凜とまどかの元へと現れると高みの見物をしているであろうライダーの元へと案内を始める。

しかし、そう簡単に辿り着かせる筈が無く、鵜はそれを阻むために三人の後を追いつめた。

「いいのかい？あんたの護衛を手放して？」

杏子は軽く首を回しながら慎二に向けて殺気を放つ。

普段の慎二なら耐えられないであろう殺気を軽く受け流すと嫌らしく嗤いは始めた。

「無限の魔力を手に入れた僕に怖いモノなんてないのさ！だって、僕は天才だからね！以前の逃げ回るだけの僕とは違って所を見せてあげようじゃないか！」

「そうかい、そうかい……こんな事なら、例のアレを携帯しておくべきだったな……」

杏子の持つ最大兵器……

神代の宝具のレプリカだが、吸血種や封印指定を殺す槍としては十分すぎる兵器

だが、まだ試作段階でもあるため、いつでも持ち歩ける品ではなかった

その為、一応先輩であるいけ好かない野郎から槍を一本拝借していたりして、戦場を駆けていたりするのだが……

こんな事なら、今持ち合わせている武器を全て持って来ておくべきだったと反省するとやれやれと言いながら、槍に魔力を通していく。

「言っておくけどさ……私は手加減しないぞ？アンタを殺す気で行く」

杏子の目は槍に魔力が通されるにつれて見る見るうちに朱く輝き始めた。

それだけではない。

爪も伸び始めて、十の刃となる。

そして、変化が終わると同時に音も立てず、空気に溶けてしまった。

「おいおい、あれだけ言っておいて逃げ……なんだよ、これ！なんで僕に傷が付いてるんだよ！」

叫んでいる間にも慎二の身体には傷が増え続ける。

姿が見えず、どこから攻撃しているのかも判らない。

激しい猛攻に反撃の隙すら与えない。

杏子の“人間”を相手に戦う際の常套手段である魔眼による感覚支配だ。

その激しい猛攻は体の傷の再生させる余裕など与えず、新たな傷を生み出していく。

息をつく暇すら与えず、反撃の隙を見せない。

これがプロと素人の実力差だった。

気が付くと、辺りには慎二の血が大量に飛び散っていた。

慎二は身体中をずたずたに引き裂かれ、穿たれた慎二は恐怖のあまり逃げ出そうとするがその首を杏子は槍を空いた片腕で掴み高らかに持ち上げる。

そして、今は輝く事を止めた目で慎二を睨みつけた。

「ふざけるな！僕が負ける筈が無い！こんな奴に！」

この状況になっても負けを認めないその神経に杏子は呆れ果ててしまう。

だが、こうなった以上はこの雑魚も滅する対象だ。

せめてもの救いとして痛みの感ずる暇もないくらいにあっさりと

……

杏子はそう誓つと槍を慎二の首へと向ける。

「チカラの使い方すら知らないヒヨッコなんて所詮はこんなもんさ……アンタには背負う覚悟もその代償も足りなかったんだよ！いくら不死っていつてもさ……頭を潰せば死ぬだろ」

そう呟くと杏子は槍の穂先を慎二の頭に狙いを定める。
そして、一気に頭めがけて槍を突き立てた。

しかし、寸前の所で何かに突き飛ばされた。

「おい……お前が通り魔の正体か！」

その聞き覚えがある声に、杏子は思わず舌打ちをする。
こんな事なら、さくらをこちらに残しておくべきだったと後悔するが、こんな事で令呪を使う必要が無い……
令呪を使う必要が無い……

杏子はそこである事に気が付いた。

ここまでボロボロにされてもライダーを令呪で呼ばないのは不自然すぎる。

確か、慎二は本を使ってライダーを操っていた。
しかし、今はその本が無い……

まさか、別にマスターがいる？

その疑惑が浮かんた時、全てが杏子の中で繋がろうとしていた。
もしも、真のマスターがいたとするならこいつは“私”をここに
足止めさせておく為の布石だとしたら……

ここにセイバーが現れたのも全てあの女の策略だったとするなら

……

そう考えると、この場に長居する必要はない。

必要な武器を持ち込み、早急に対処せねばならない
仕事として……

「糞……めんどいのが出てきやがったか」

サーヴァントの中で最優と謳われ近接戦に秀でたセイバーと真正
面から渡り合うのは本気になった杏子でも部があるか分からない。

しかし、ここでアレを見逃すわけにもいかない。

かといって、セイバーと戦い消耗するのはもつての外だ。

どう動くか杏子が悩んでいると、セイバーが戦闘の構えを示しながら告げる。

「答えなさい！返答次第では貴方を倒します！」

「倒すね……やっぱり、殺し合わないと話が進まないか……私としてはそいつを引き渡して逃げられたか」

気が付いた時には慎二の姿は消えていた。

ならば、もう杏子にセイバーと戦う理由は無い。

しかし、どうやら、向こう側のマスターにはあるらしい。

「もう、魂喰いなんて止める！」

「はあ？ 何言ってた？ 私はあの糞餓鬼に用があるんだよ……
デメエになんざ用は無い」

「慎二に何の用があるんだよ！」

「奴を殺す。アレはこの世界には居てはいけないものだ。存在自体が悪だ。早めに処分しなければ大変な事になるぞ」

その言葉は衛宮士郎にとって許せるモノではなかった。

全てを救う事を望む衛宮士郎にとって、誰かを切り捨てる事は絶対にあつてはならない。

だから、目の前にいる杏子が慎二を殺そうとするのを許すわけに

はいかなかった。

杏子が向こう側が仕掛けようとしている事に気が付き、距離を取ろうとするが、足が固定されて動かない。

そして、気が付いた時にはフェイトの金色に輝く鎌が杏子へと迫っていた。

「何!？」

鎌がふれる瞬間、杏子の姿が消滅したのだ。

それと同時に背後から槍が振り下ろされる。

いくら対魔力の高いセイバーとはいえ、物理でならダメージを与えられると考えるの事だったが固い壁へと阻まれてしまう。

「まったく、バリアなんてありかよ……」

「それはお互い様です。幻術が得意なようですね……」

互いにとって戦いにくい相手……

フェイトの魔法は非殺傷設定とは言え、魔力変化による雷撃で一時的に行動を制限する位ならば容易いだろう。

しかし、杏子の幻術の前には攻撃を当てる事すら難しい

睨み合いが続く中で、杏子はフェイトから目を逸らすと辺りを見回した。

そして、乾いた笑みを浮かべる。

「おい、こりゃマジか……ここは停戦といかないか？さすがの私もこいつら相手には骨が折れるし、アンタらが居たら邪魔だ」

「なんだよこれ……」

目の前に現れたのはビルの高さもある蜥蜴と死者の軍団だった。

策謀（後書き）

フェイトVS杏子は少し先送りになりました

ただ、二日目〜三日目のライダー編の中ではもう一度戦う予定です
さて、ここまで話が多くなれば日本在中のあの方も動きます

流石に埋葬機関も待ち一つが死の街になるのは見過ごさないでしょう
次回は死の軍団です！

固有結界案

Self will cover thou crime .

Truth is reversed to false hood
d .

A lie is wandered to truth .

No intentions are repainted here .

The truth of and falsehood is
a dream carried out in which
one time is transitory .

The dream is osamu which awakes
some day .

Just if it becomes , disappear
as a phantom of a transitory dream .

我は汝の罪を覆い隠そう

真実を偽りへと反転し

虚言を真実へと流転し

全ての意思をここに塗り替えん

されど、偽りの真実は一時の儚き夢なり

その夢はいつかは醒めねばならぬ理

なればこそ、儚き夢の幻として消えよ

立ちはだかるもの（前書き）

「君は殺生石に何を望む？」

悪魔の囁きに黄泉は答えてしまった

「私の本当の望み、本当の願い……それは神楽……あの子を守りたい。あの子を全ての不幸から守りたい。あの子を全ての災いから守りたい。あの子を傷つけるもの、あの子を危険に晒すもの、あの子を災いを齎すもの……その全てを消し去りたい。お願い、あの子を守って……不幸を消して、災いを消して……例えば、それが私自身であつたとしても！」

それが、諫山黄泉が死んだ瞬間だった。

大切な妹の手によって……

自慢の妹の手によって……

大好きな妹の手によって……

立ちはだかるもの

「そう簡単にはライダーの元へは行かせてもらえないようね」

なんとか、悪霊の群れを掻い潜りライダーの居る街を見下ろせるビルの屋上へと辿り着いた凜だったが目の前に立ちはだかる鎧武者に苦戦していた。

ライダーはまどかとさくらが苦戦する様子を愉しげに観戦するばかりで手を出してくる様子は無い。

完全に舐めきった態度に漬け込む隙はあると凜は考えるが、目の前の障害が予想以上に大きかった。

「まだまだ！」

まどかは幾度も矢を大量に放つが、その度に完全に撃ち落とされてしまう。

さくらも目の前の鎧武者にどう攻めるか思い悩んでいるようでなかなか斬りかかれずにいた。

「あら？ その程度なのかしら——前回までの威勢の良さはどこへ行ったのやら」

ライダーの小馬鹿にした嗤いに凜はガンドを撃ち込もうとするが、魔術回路に魔力を流し込んだところで思いとどまる。

ただでさえ、二対一で苦戦しているのだ。

ここで、ライダーが入って来たのなら完全に劣勢の流れになってしまう。

それだけは避けなければ無いのだが、戦闘は悪い方へと転がっていく。

上空を黒い影が通り過ぎたかと思うと、それはさくらとまどかの前に降り立ち吠えた。

「まどかさん！ 危ない！」

目の前の化物が吠えた事により発生した衝撃波がまどかの矢を吹き飛ばし、衝撃波と共にまどかへと降り注ぐ。

本来の咆哮だけでも人を殺すには十分すぎる威力がある。

それに、まどかの宝具である矢が加わるのだから、当たったら幾らサーヴァントとは言え致命傷になる可能性がある。

そんな中で、さくらは一枚のカードを素早く取り出すと、それを使役する。

さくらと最も共にあり続けたカード「一風 ウィンディ」

風邪を生み出し操る事の出来る四代元素のカード

そのカードにより生み出された風が、乱紅蓮の咆哮とぶつかりあい、乱紅蓮の咆哮を相殺する。

だが、行き場を失った矢は上空へと打ち上げられ、その場にいる全員へと襲い掛かった。

「大丈夫？ まどか！ さくら！」

辺りはビルが破壊されたことによる塵が蔓延しており、視界を遮っている。

ラインから魔力を吸い上げられる感覚から令呪を確かめる事なくまだまどかが存命している事は解るのだが、どこにいるかまではつかむ事が出来ない。

視界を遮られた凜は思わず叫んでしまいが、それが命取りとなる。叫ぶという事は、まどか達に位置を知らせると同時に敵にも位置を知らせてしまう。

ここに来て、遠坂家に伝わる呪いである『うつかり』を発動させてしまった。

そんな中で、遠坂の背後に大きな黒い影が現れる。

遠坂はソレに気付くと咄嗟に、振り返りガンドを放つ。

放たれた黒い弾丸は刀を僅かに逸らせ、なんとか鎧武者から距離を取ることに成功する。

だが、危険である事には変わりない。

まどかが此方の位置を把握するまでは一人で相手をせねばならない。

そんな中である事に凜は気が付いた。

（まさか、こいつ……対魔力は無いの？）

鎧武者の頬にガンドが跳弾した際に出来たのか、傷が出来ていた。それを考えれば、まどかの矢を全て弾き飛ばした事にも納得がいく。

あれは魔力の塊だ——対魔力が無いのなら一発が致命傷に成りか

ねない程の高純度の魔力を秘めた……

つまり、この相手はまどかやさくらが戦うよりもマスターである凜本人が戦った方が有利に戦える。

そう判断すると、頭から逃げるといふ選択肢を消し去り、目の前の鎧武者へと目を向ける。

敵の武器は刀が両手に一本ずつの二刀流……

まだ、何かを隠しているかもしれない。

凜は細心の注意を払いつつ、宝石をいつでも使用できるように左手に持つと右手で鎧武者の足もとにガンドを放つ。

鎧武者の足場を崩し、足を殺す事が目的だがそのような事が鎧武者に気付かれない筈が無い。

ガンドが当たる直前に跳躍すると、凜へと迫る。

凜は軽く舌打ちをすると、持っていた宝石を使用して自分の身体機能を即座に強化する。

だが、そんな強化如きでは完全に躲す事は叶わず、身体には徐々に切り傷が出来始めた。

そんな中で、凜は左手に持っていた宝石の一つを回避する際に落としてしまう。

（ああ、やつぱり一筋縄には行かないようね……けど、杏子も頑張ってくれているんだし、私もこんな所で時間をかける訳にはいいのよ！）

そう思い立つと、一気に鎧武者へと走り込む。

そして、体中に刀による切り傷を作りながらも懐へと入り込むと、もう一度肉体強化の重ね掛けを行う。

本来ならば、身体の負担が大き過ぎる為、するべきではないが今

は手段を選ぶ余裕は無い。

倒せなければ、そこに待つのは死だけだからだ。

（綺麗に教わった中国拳法がここに来て役に立つとは思わなかったわ……礼を言うのは癪だけどね）

トラックが衝突するような衝撃に鎧武者は後退するが、僅か三歩で踏み止まる。

しかし、凜にとってはその三歩こそが重要だった。

先程、宝石を落とした場所……

その宝石を発動させた際に最大限に威力を発揮できる場所……

凜の攻撃により、膝についている鎧武者は今度は回避することは出来ない。

「これで、終わりよ！」

その言葉と共に、宝石から魔力は解放され辺りが白い稲光に包まれる。

近くにいた凜もその衝撃に吹き飛ばされるが、確実に鎧武者に攻撃を与える事が出来たという確信が凜にはあった。

雷が幾つも落ちたような轟音と発光……

その衝撃は同時に辺りの粉塵を吹き飛ばす。

「あらあら……人間にしてはやるようね」

そのあまりの威力にライダーは笑う事を止めた。

（やったかしら？あれだけの威力を叩き込んだんだから……）

吹き飛ばされて地面に倒れ伏していた凜は身体を起こすと鎧武者のいた方へと目を向ける。

そこには片膝を地面に付き、黒こげになっている鎧武者がいた。満身創痍の状態の鎧武者に凜は一瞬、気を抜いてしまう。

だが、まだかすかに息があり、完全に消滅した訳では無い。

鎧武者の身体から棘が映え始めたかと思うと、次の瞬間にはその棘が凜に襲い掛かっていた。

気が付いた時には既に遅い。

身体強化の重ね掛けによる身体疲労と気の緩みから即座に身体を動かし回避する事は叶わない。

目の前に迫る棘の嵐に凜は必死にあがこうとするが、奮闘敵わず幾つもの棘が凜へと襲来する。

「凜さんをもう傷付けさせない」

いつの間にかまどかが凜の前で弓を弾いていた。

そして、全ての棘を撃ち落としていく。

それだけでは無い。

幾つかの矢は当たると同時に、棘を消滅させているのだ。

矢と棘の競い合い……

先に根を挙げたのは鎧武者だった。

棘が止まると同時に鎧武者は刀でその矢を弾き落そうとしていく。しかし、矢が当たった瞬間、刀はみるみるうちに消滅していきそれは身体へと拡がって行く。

その状況に鎧武者も動揺し、驚愕の顔を浮かべるがそれが何なのか理解するには至らなかった。

「何よ……あの矢は……あの鬼道丸を浄化したって……」

ライダーですら驚きを隠せない。

もしも、倒されたというのなら納得がいっただろう。

しかし、浄化されたというのなら話は別だ。

あのサーヴァントは自分にとっては天敵である。

先程から攻撃は矢を放つだけに留まっているから大した事が無いと鷹を括っていたのだが、それがここに来て大いに覆される。

それは凜も同じだった。

凜の目に見えていたスキル表が一瞬だが、書き換わったのだ。

しかし、それは目の前の鎧武者を倒すと同時に消滅した。

（なんなの……まどかって……）

マスターである凜も戦闘中に能力値が書き換わるという現象は聞いた事が無い。

確かに、狂化スキルを使う事が出来ればそれは可能だがまどかに

そのようなスキルは備わっていない。

「あれ？ 私……凜ちゃん大丈夫！」

その上、自分が何をやったのか覚えていないような言い回しで凜の無事を確認しようとしてくる。

まるで、無意識の内に何かしらの能力が発動したのか……
もしくは、別の誰かがまどかに憑依したかのように……

しかし、そのような事を考えている暇は無い。

後は残る障害である乱紅蓮を倒し、ライダーを倒して慎二に何を
したのか聞きださなければならない。

凜は先ほどのまどかの異常を頭の隅に記憶し、今は目の前のライダーへと集中するとまどかとともに乱紅蓮へと向き直った。

「ここだな……」

煙草を啜えた女性と礼園女学院の制服を着たどこか気弱そうな少女があるビルの一室の扉を叩こうとしていた。

二人はノックをしても返事が無い……

そんな家主の態度に痺れを切らした煙草を啜えた女性は部屋の扉を返事を待たずに明けた。

扉の向こうにはまるで蠟人形館のように多数の人形が並んでいる。それは全てが人を模して創られたのだろうが、全てがどこかかけており伽藍堂としていた。

「あのバカはまだ私のよう人形を創る事に固執していたのか……才能が無いとさっさと断言してやっただがな」

此方をじつと眺めている作品の数々を面白げに眺めながら煙草を啜えた女性は奥へと進んでいく。

そんな中、その女性の後ろを付いて来ていた気弱そうな女性が恐る恐るその女性へと尋ねる。

「あの……なぜ、私がここに……？」

歪曲の魔眼をこれ以上使うなと忠告されたかと思えば、いきなり連れ出されてこんな片田舎の街に連れられて来られたのだ。

数か月前の事件の事を考えると何があってもおかしくは無い。

自分はそれだけの事をしているのだ。

だが、そんな心配を他所に煙草を啜えた女性は近くにあった人形を掴むとその人形を睨み付ける。

「まあ、あれさ。今回は作品の納品と同時に不出来の弟子が久しぶりに顔を見せるっていうんでわざわざ出向いた訳さ。奴にはきつちりと金を払ってもらわねばならないからな」

まったく、話を通じていないのだがそんな事をしていると大きな広間に出る。

そこには小学生くらいの少年がいくつものテレビの前に座り、じっとテレビを見ていた。

「貴様は相変わらずのようだな」

「そちらこそ、おかわりないようで…… すいませんが、今いいところなんです。まさか、ここまでやるとは私も念の為に師匠に連絡しておいて正解でした。料金はそのアタッシュケースの中にあります。ざっと、一千万円程ですが足りますよね？」

「足りるが、いいのか？人形一体で五百万と電話では言ったんだが？」

料金を多くもらう分には悪い話ではないが、これからこちらからも面倒事を押し付ける身からすれば流石に受け取り辛い。

だが、そんな師匠の言葉にその子供は振り返るところ答えた。

「師匠の作品にはそれだけの価値がありますから——いや、そんな価値すらつけられないかもしれません。中世の錬金術師の推測を踏みにじるその人形に一千万など安いくらいですよ」

作品の出来を絶賛するその子供に対して師匠と呼ばれた煙草を啜える女性は大きく紫煙を吐きだす。

本人は本当に絶賛しているつもりなのだろう。

しかし、しれは褒められている本人からしてみても目の前にいる子供の創る作品は異質だ。

それ故に『人形師』として名高い青崎燈子が目の前の少年を才能が欠片もないと言い切った。

それは、自身のような人形を創る才能が無いからに他ならない。部品一つ一つの代替えパーツなら完璧に再現するのだが、それが

全体となると途端に作成できなくなる。

しかし、それは単に青崎燈子が異端であるに過ぎない。
ただ、それだけであり少年が人形を創る上で才能が無いわけではない。

むしろ、有り過ぎるといべきだろう。

死徒の身体の一部や、封印指定の魔術師の魔術回路を用いて生前の持ち主の力を再現する。

それだけならばまだいいが、魔眼の複製や固有結界の再現まで行う異常っぷりなのだ。

「私からすればお前も十分異端なんだがな……」

燈子さんの呟きにその子供は楽しげに笑うと本題を切り出すように促す。

「それで？　こちらからの要件は終わりました。そちらの要件を聞きましょうか？」

「こいつに魔眼の使い方を教えてやって欲しい。そいつのはお前の方が詳しいだろ？」

その言葉に思わず、子供は呆れ返る。

何せ今は戦争中なのだ。いつ殺されてもおかしくは無い。

確かに、今手駒が増えるのがうれしいがそれを死なせたとなっちは後々禍根が残ってしまう。

当然の如く、その女性も燈子さんに何を考えているのかと言おうとするが、真剣な眼差しでこう告げる。

「アレはああ見えて一応、私の弟子だからな。面倒事の一つくらい押し付けても問題なかるう。それに、奴の方がそういうモノの扱い

方は詳しいからな」

「おい、本人の前でアレって言い方は無いんじゃないか？ 確かに魔眼関連の扱い方は師匠よりは詳しいが……んで、系統は？」

「歪曲に透視のおまけつきだったな」

つまりは、物陰に隠れてもねじ切られてしまう事を意味する言葉に啞然とした様子でその女性を見つめる。

「それで、代替えの眼を創ればいいのか？ それなら、あんたが……」

「違う……コントロールの仕方を教えてやってくれ……それが無いと、無痛症が治療出来んようだな」

「無痛症って、人工的に痛みを消す事によって長年封じ込めたのか——考えた奴の顔が知りたいね。そんなエグイ方法で封じ込めるなんてさ」

少年は楽しそうに笑うと、少女を頭から足元まで値踏みするように眺める。

どう考えても戦闘向きではないうえに、その話を聞いた限りは頭脳戦も難しいだろう。

戦争が終わればいくらでも付き合っているのだが今は何分、時間が無い。

それ故に断ろうとするのだが、燈子さんはこう条件を付け足した。

「依頼人からは出来んのなら殺せと言われていてな……また、暴走するかもしれない爆弾を抱えるのは御免だそうだ」

「まったく、わかったよ……ただし、死んでも文句は言わないならって条件があるがな」

「ああ、問題ない。肉弾戦を仕込もうが何をしようが構わんが襲うなよ?」

そう言い終わると、入ってきた方のドアに顔を向ける。

少女もそちらの方を振り向くとそこには小学生くらいの少女と三十代くらいの青年が立っていた。

立ちはだかるもの（後書き）

マミ「さて、アサシンサイドにも動きがあつたわね！」

さやか「なんか、あそこつてどんどん強くなつて行つてないですか？ まさか、家のまどかがあんなことやこんな事に……」

マミ「大丈夫よ！まどかさんがそう簡単に誰かに負けるとは思えないわ！」

さやか「それはそうですけど、歪曲の魔眼で透視付きとか厄介過ぎませんか？」

マミ「それはそうだけど、魔術師ではなく退魔の方の一族だし戦闘経験は殆んどないっていうキャラだから少し危うい印象を受けるわね」

さやか「確かに……死んでも責任は取らない発言しましたしね」

マミ「まあ、それはおいておいて、まどかさんのマスターは今回大活躍ね」

さやか「たしかに、二人が苦戦した相手を追い詰めたからね……」

：最後はまどかに仕留められましたけど」

マミ「さあ、今回はどうなるのかしらね」

さやか「えっと、今回は……未定だそうです。って、作者考えておけよ！」

介入（前書き）

ネタが切れた……

毎回、前書き考えるのは難しいです。

質問もないので返答とかもできないので……
って、事で始まります

介入

「おい……なんなんだよ！これ」

それが誰の叫びだったのかは杏子に確認する余裕はない。

突如、現れたソレらにより大通りは血と叫びが支配していた。

目に付くのは死体ばかりであり、それが動き人を捕食する。

救いたくても救えない、守りたくても守れない。

圧倒的な数の暴力の前にはいかにサーヴァントと言えども、マスターを守る為に動きを制限される。

埋葬機関に所属し、吸血鬼を狩り続けてきた杏子もまた装備が万全でないこともあり防戦一方の戦闘をしていた。

「おい、セイバー！ 何ビビってんだ！ こいつらはもう死んでるんだ！」

杏子には目の前で動く人間が死んでいる事を本能的に嗅ぎ取っていた。

吸血鬼の創るグールのようなものと考えればいいのだが、フェイトとそのマスターである士郎はそれを割り切れない。

それ故に戸惑い、一瞬だけ止めを刺すのを躊躇ってしまった。

その時、二人の前に赤い鮮血が飛び散る。

二人をかばった際に杏子の右腕の肉が食い千切られたからだ。

だが、杏子はその怪我に対して痛みを見せるようなことは無く、ただ冷静に死者の肉体を破壊していく。

「状況を弁えろ！ 今の状況の中でお前がしなきゃならねエのはなんだ！ こいつらによる被害を最小限に止める事だろうが！ なら、そんなところで寝ている暇なんてあるのかよ！」

杏子はそう叫ぶと一刻も早くこいつらを倒して凜の後を追う為に走り出す。

だが、自己催眠により痛みを消していた事により大きな隙を生んでしまう事となる。

死者の軍団の中に飛び込んだ杏子は槍を振るい、死者を行動不能にしていく。

次の槍を振る為に足を踏み込むが、その際に体の体勢を崩し血の池へ落ちて行ってしまう。

なぜそうなったのかはすぐには理解できなかった。

ただ、頭の中にあるのは自身に群がろうとしている死者をどう潰してこの場を離脱するかだけだ。

しかし、対魔用に加工されていない槍では力で粉碎しなければ奴らを破壊する事は叶わない。

そして、何より今の体勢では手首だけで振るうわなければならない……

杏子は襲い掛かって来た死者を殴り飛ばすと急いで立ち上がろうとするが、そこで初めて何故こんな事になったのかを理解する。

杏子の目に入って来たのは自身の右足首だった。

それが何故そこにあるのかは理解できないが、それがこの状を作り出したすべての原因である事はすぐに解った。

「くそが……」

この時ほど、自身の本当の武器を持つてこなかったことを後悔したことは無い。

アレがあればこのような死者如きに後れを取る事もないからだ。

だが、今更そんな事を言ってもすでに遅い。

杏子の左足首から流れる血は徐々に止まっていき、それは新たな左足首となり始める。

「伏せて下さい！」

突然のフェイトの言葉に急いで頭を下げると、さっきまで頭のあった場所を金色の大きな刃が通り過ぎる。

そして、その刃は死者達を切り裂き辺りに新たな血を撒き散らした。

杏子はその様子にようやくセイバーの覚悟が決まった事を悟る。

「随分と遅い登場だね。それってもしかして正義の味方つてのがいつも遅れて登場するからなのかい？」

「私はただ、今守れるものを守りたいだけです。それを守る為に最善なのは何か、それを見失っていました。ここで彼らを殺す事を躊躇すればするほどに犠牲者の数が増えてしまうのであればしかたがありません」

「意外と物わかりがいいんだな。けど、まだ戸惑いは隠せないか……なら、お前はあつちの蜘蛛みたいなのでつかい獣みたいなのを相手しろ。こつちも死者どもを片付け次第、そっちに向かう」

杏子が指差した先には真っ赤に燃え上がる獣と高足雲のような奇

妙な形の悪霊が町を破壊しようと動き回っていた。

フェイトはそれはまだ戸惑いを隠せないマスターを思われての提案だと判断すると静かに頷く。

それを見た杏子は士郎の方へと槍を向ける。

『我、汝の穢れを抜いたもっ』

そう告げると杏子は槍を地面へと突き刺した。

すると、士郎の周りに網目の障壁が突如として現れ、四方を囲い込む。

その様子に士郎はその壁と突撃して自分も戦いに参加しようとするが、その障壁はビクともしない。

「セイバー、これでアンタも少しは後ろの事を気にせずに戦えるだろう？ まあ、大抵の攻撃は耐えられる結界魔術だからこんな雑魚には破られはしないよ」

「ありがとうございます。でも、貴方は私を敵視していたのに何故？」

「今だけだよ。私もさっさとこいつらを片付けてライダーを倒しに行かなきゃならない。それなら、アンタが最大限に暴れられるような状況を創ってでか物片付けさせた方が速いだろ」

そう告げると、杏子はいまだに人を襲い続け数を増やしていく魍魎の群れを睨み付ける。

そして、息を深く吸い込むと目を閉じた。

先に倒さねばならないのは先程、足首を切った存在だ。

それを倒さない限り不意打ちで形勢逆転も起こり得てしまう。

「士郎はそこにいて。すぐにこの惨劇を止めるから」

フェイトも士郎にそう告げると飛び上がり、火車の前へと立ち塞がった。

（にしても、これじゃ埒が明かないな……あの悪霊……倒しても倒しても湧いてきやがる。これじゃ、ライダーを先に潰した方が早そうなんだが……）

杏子は目を見開くと誰もいない場所を一閃する。

だが、その一閃は火花を散らし何かに弾かれてしまう。

「くそ……軌道を読んでも向こうの起こす風で弱められて弾かれちゃう……こりゃ、少しばかりてこずりそうだね」

杏子はそう小さく呟くと槍に魔力を流し込み、強化していく。

今の武器には対悪霊用の概念武装としての機能は全くない為に完全に威力のみで圧倒しなければならぬからだ。

しかし、強化は武器そのものに無理をさせるために度重なる強化はかえってその武器の強度を弱める事にも繋がりがねない。

それでも、杏子が強化に踏み切ったのは目の前の鎌鼬がそれだけ厄介な敵であることに他ならなかった。

防戦、防戦、防戦

あまりのスピードの速さとその風の防御でなかなか杏子は攻撃に転じられずにいた。

それどころか、攻撃を受けた際の余波で体中に切り傷が出来ており、それが杏子へと悪霊を呼び寄せていく。

完全に後手に回ってしまっている状態に軽く舌打ちをするが、現在持っている武器ではこれが限界だ。

埋葬機関外の仕事と言って大半の武器を置いて来てしまった事を今になって後悔する。

だが、後悔したところで今の流れが変わる事はない。それどころか、杏子の中に焦りを生むばかりだった。

「仕方ないか……魔眼は使えないようだしな」

杏子の持つ魔眼は相手の脳に直接干渉するために目を通して幻術を見せる。

その為、石化の魔眼などと違い相手の目を見る事が出来なければ全く持つて効果を発揮する事が出来ないのだ。

それ故にいつものように相手の感覚を僅かにずらして戦うという方法が封じられてしまっていた。

そんな苦戦している中で杏子はニヤリと笑うと自らの魔術回路に魔力を流し込み始める。

杏子の胸を鎌鼬の鎌が貫き、紅い鮮血が飛び散った。

魔術回路に魔力を流した際に出来た僅かな隙を突かれての事で杏子は反応できなかったのだろう。

杏子の身体からは赤い血が噴き出し、ゆっくりと地面へと落下していく。

そこへ死霊や魍魎たちが殺到し、血肉を喰らわんと群がった。

そのあまりに無残な光景に士郎は言葉を失う。

そして、飛び散った血がそれを現実だと告げていた。

しかし、次の瞬間にはその血が飛散してしまう。

そして、鎌鼬の身体を一本の槍が貫いた。

「やっぱり、風の流れて感じ取ってやがったか……まあ、解答さえわかれば本当に何でもない相手だったな」

杏子はそう呟くと鎌鼬から槍を抜き、亡霊の群れへと再び向き直る。

しかし、次の瞬間体中から鮮血が噴き出した。

「一体じゃなかたのかよ！」

目視で確認出来ただけでも五体の鎌鼬がいる。

それどころか、杏子の姿をして槍を此方へと構える山彦までいる

始末だ。

その状況に槍を振るおうとするが、体の腱が切り裂かれており身体を動かす事が出来ない

絶体絶命のピンチに杏子は令呪を使う事を考えるが、向こう側がライダーと戦っていたら……

さくらを戻す事で倒すチャンスを潰す事になったらと考えると令呪を使う事が出来なかった。

けれど、それは今ここで杏子が倒れても同じことである。

いくらサーヴァントと言えどもマスターの魔力供給無しでは生き残る事は厳しい。

ライダーに勝つなど以ての外だ。

（仕方ないか……アレを使うとするかな）

そう心に決めると徐々に犬歯が伸び始める。

身体中の血が熱く煮え滾り、瞬時に体中の組織を再構築し、途切れた神経をつなぎ合わせ始めた。

しかし、その再生も即座に回復する訳ではない。

その僅かなロスに再び悪霊の群れが杏子へと襲い掛かろうとする
が突如、降り注いだ黒剣に貫かれ、燃え始めた。

これだけ膨大な黒剣を扱う人間など埋葬機関に一人しか存在しない。
い。

埋葬機関第七位シエルー『弓』の二つ名を持つロアの転生体
埋葬機関の中ではまだ話の通じる相手なのだが、不死身な上に催眠で他者の記憶を書き換える能力持ちの為に一番やりにくい相手なのだ。

「なんで、アンタがここにいやがるんだよ？ シエル？ アンタはロアを追っかけてたんじゃないのか？」

ビルの屋上から降り立ったシエルを杏子は立ち上がると睨み付ける。

だが、それに対してシエルは二本の槍を杏子に投げ渡すと杏子を睨み返した。

「ロアは先日滅した為、もうこの世には存在していません。それよりも、この状況はどういう事ですか？ 私は貴方に第八聖典試作型を届けるように命じられただけなのですが、町に入った瞬間にこれだけの穢れた気配が町中を蠢いている状況……説明していただけますよね？」

シエルの有無を言わさぬ物言いに杏子は二本の槍を受け取ると一本の封を解いて外気に触れさせながらこう返した。

「吸血鬼じゃない……過去の英雄を召喚して戦わせる聖杯戦争って儀式で何を間違えたか過去の大怨霊を呼び寄せちまったらいいんだそれで、私はそいつの呼び寄せた悪霊に足止め食らってたってわけさ」

杏子の言葉に小さく頷くとカソックから何本もの黒剣を取り出し、それを悪霊のほうへと投擲する。

すると先ほどとは違い、何人もの悪霊の頭を貫きコンクリートの地面へと突き刺さった。

「事情は理解しました。つまり、その根本を倒せばこの状況は打破できるわけですね？」

「おそらくそうなんだが、一筋縄ではいきそうに無い」

それは杏子の本心からの言葉だった。

あのライダーがこれだけの怨霊を集めたのには何か理由があるはずだ。

マスターだと思っていたワカメ頭の男の言動も少しばかりおかしかった。

ライダーの保有している殺生石と言う宝具は史実では白面金毛九尾の狐の欠片と言われている。

しかし、この白面金毛九尾の狐についても色々な諸説がありその実態はあまり掴めていない。

それを宝具として保有しているということはライダーとしての経歴上それを召喚出来てもおかしくは無い。

「もしも、本当に九尾の狐なんて召喚されたとしてら、根本を倒すだけでは終わらない可能性がある」

獣といわれて思い出すのは死徒二十七祖の第一位なのが、九尾は史実が正しければ人間によって一度は滅ばされている。

その為、ガイアの意味ではないとは思うのだが……

考えれば考えるほどに嫌な予感しかせずこの類の直感は良く当たってしまうのだ。

杏子は溜息をはくと第八聖典を振るい、死者の群れを吹き飛ばした。

「分かりました。我々がマスターではない状態で聖杯戦争に関わったとなれば色々と厄介なことになるでしょうから、その根源の排除は貴方一人に任せるとしましょう」

そう告げると次々と黒鍵を投げて死者の群れの殲滅を開始する。

「けれども、この亡霊の群れは我々の協議に反するので見過ごせませんけどね……次にあった時にカレーでも奢っていただきましよう

か？」

「相変わらずのカレー好きだな……わかったよ。それで貸し借りはなしだ」

杏子はそう呟くとさくらたちの向かった方向へと走り出す。

しかし、その道は巨大な土蜘蛛によって塞がれており通り抜けることは出来ない。

だが、杏子は止まることなく足を踏み切るとその巨体へと跳躍し、第八聖典を振り下ろした。

その勢いは止まることなく、土蜘蛛を貫通し反対側の通路へと出る。

そして、第八聖典に付着した土蜘蛛の体液を振り払うと突如、土蜘蛛がゆっくりとその巨体を道路へと倒れこませる。

動かなくなつたその巨体に杏子は新しい武器である第八聖典試作型の威力を実感した。

「いくら神殺しの槍の劣化コピーとは言え、流石は神を傷付ける程度のことは可能と言われるロングヌスの槍量産試作型だな……」

杏子はそう呟くとビルの壁を走り、凜達のいる場所へと急ぐのだった。

介入（後書き）

第八聖典試作型type ロンギヌス

埋葬機関が神殺しの槍を量産しようとした際に開発された試作実験機

しかし、思った以上の効力を出せなかった為に計画は白紙に戻った。

神を傷つける程度の神殺し能力は残留しており、それはそれ現象にまで至った魔術師や死徒をも傷つける事が可能である事から杏子がそれを改造して用いる事となった。

だが、試作型という事もあり調整を定期的に行わなければならない不安定さもあり、使用時以外は埋葬機関内部に保管されている

感想待ってます

変貌する事態（前書き）

今回、少し動きます。

読めばわかると思いますが、それぞれの信頼関係に若干の動きが……
それが吉と出るのか凶と出るのか？
一気に加速し始めます。

追伸

第八聖典試作型の設定を少し弄りましたので使用時に説明します。
概念武装としては特殊なモノに変更しました。

変貌する事態

「キリが無い……倒しても倒しても湧き続ける……」

バルティッシュの雷撃の刃を振りかざし、大型の化物を切り刻んでいくが、切り刻んだところから湧いてきているのだ。

魔力消費はまだ大したことは無いが、これが長時間に渡れば完全に追い詰められるだろう。

金色に輝く髪も妖魔の赤黒い血に染まり、乾ききっていた。

「やっぱり、根本を倒さない限りキリがありませんか……」

今すぐにでも、キャスターのマスターが言っていたライダーを倒しに行きたいが、背後にいるマスターがいる。

おそらく、私が行くと言えばマスターもついて来るだろう。

しかし、そんな危険な真似を侵させる事は出来ない。

そう決めると、まずはこの場所にいる妖魔を殲滅する事を念頭に置き、フェイトは金色に輝く魔方阵を展開する。

セイバーはザンバーフォームからハーケンフォームへと形態を変更すると、目の前の地獄を見つめる。

「これ以上、貴方達に好き勝手暴れさせて誰かを傷つけるマネはさせない！」

セイバーは鈍足な土蜘蛛の脚を掻い潜り、ハーケンセイバーという魔法によって作り出された金色の刃で全ての脚を切断していく。少しずつではあるが大型の妖魔の発生速度が倒す速度に圧倒され始める。

だが、その下では多くの人間が魍魎により、動く死体へと変えら

れ続けていた。

「もう一度言いますが、本来ならば聖杯戦争に埋葬機関が参戦するのは時計台との協定違反なのですが、流石にこのような事態は見過ごせないのです、そうここにいる監督役にお伝え下さい……それを否というのであれば、貴方方でこれを沈められるものと判断し、町外堀にて待機し、終了と同時に浄化作業に入りますますが？」

シエルは業務連絡のように背後にいるであろう監督役との連絡役にそう告げた。

しかし、何も返って来ない。

シエルはいつでもあの亡者の群れに仕掛けられるように柄だけになっっている黒剣に両手に三本ずつ握る。

極めて異例の事態……イレギュラーすぎる悪霊がライダーに召喚されたとなればこの地だけで収まりきらない可能性がある。

そうなれば、監督役としても事態の隠蔽が困難になり魔術などの裏の世界の事がばれてしまう事態にもなりかねない。

難しい判断が求められる中で言峰は『サーヴァントとマスターに危害を加えないという制約の中でならば、悪霊を異端として排除するのを許可する』という結論を出した。

「サーヴァントとマスターに危害を加えない限り、我々は黙認するだそうです」

シエルにそう告げると同時に監視の気配が消えた。

その言葉にシエルは即座に聖書のページを刃へと変えて黒剣を亡者の群れへと次々と放っていく。

黒剣に刺された亡者のあるものは燃え盛る炎に焼かれ、あるもの

は背後に並んだ亡者と共に串刺しにされていく。

圧倒的までの実力差の前では数の暴力などさして意味は無かった。しかし、それを補うかのように湧き続ける亡者の群れにここに釘付けにされている事には変わらない。

「それにしても、不自然ですね……先程から、霊脈にこの状況を引き起こしているものとは違うもつと別の禍々しい気配があるように感じますが……さつさと終わらせて後輩にこの町で一番絶品のカレーを奢らせることにしましょう」

背後から迫ってきた鎌鼬を難なく串刺しにすると、黒鍵を構えて走り出した。

「ここなら、ライダーの呼び寄せた奴らの大半が一望できるんじゃない？」

とあるビルの屋上にコートを着た白銀の髪の少女が立っていた。その少女の真下では執行者が死者の群れを屠っている。

だが、それは彼女の知るルールに違反している事の筈だ。

（教会側はこの聖杯戦争には手を出さない筈だったわよね……それを破っている事が他の組織にバレたら色々と厄介な事になりかねな

いじゃない……)

その少女は小さくため息を吐いた。

「もしかしたら、外部組織の介入まで考えないといけなくなるかもね……でも、一番は他の組織にこの事実が伝わる前に執行人を潰す事よね……やりなさい！バーサーカー！」

「いいの？そんな事をしたら教会も黙っていないと思うけど……」

背後に現れたフードを被った小柄な子供が心配げに呟くが、マスターである銀髪の少女は一言、振り返らずにこう告げる。

「戦いに介入した以上、事故は付き物だと思わない？あなたなら、ここからあの死霊の群れを一掃出来るわよね？」

その言葉にフードを被った小柄な子供は返答を渋った。

「もしも、そのような事をしたならばマスターに危険が及ぶ可能性が高いからだ。」

「何よりも、自身の基本ステータスを鑑みても狂化して対等に渡り合えるか怪しい……」

因果律を捻じ曲げる武器を使えば殺せない事は無いかも知れないが、心臓を潰したただけでは死なない可能性も高い……

「まさか……私に口答えするつもりじゃないでしょうね！アサシンに押されて逃げ延びた癖に！」

アサシンは基本的に忍んで背後から不意打ちをするのが常套手段となる絡めてを好むバーサーヴァントだ。

そのバーヴァントにバーサーカーでありながら力負けした事が二

人の信頼関係に揺らぎを引き起こしていた。

「どうなの！バーサーカー！何か言ったらどうなの！」

『いやー！こりやすごい光景ですね！まさに地獄絵図！こんなこと仕出かしたマスターとサーヴァントのコンビはそうとう頭の行かれた連中なんでしょうね！てか、マスターの頭も怒りでとうとうイカれ……』

って、何私を死者の群れの中に投げ込もうとしてるんですか！た、助けて！マスター』

今にも死者の群れの中へと投げ入れられそうにしているそのお喋りな杖とマスターのコントのような様子に若干、苦笑いを浮かべるとその杖をマスターから奪い取った。

「何のつもりかしら？バーサーカー」

「一応、これが無いと宝具が使えないので流石にそれは困るから……」

杖を奪い取った小柄な少女は一枚のカードを取り出すとそれをその弓兵の絵が描かれたカードをその杖にかざした。
すると、そのフードの中が一瞬光る。

「マスターは下がっていて

『――投影、開始』

『……憑依経験、共感完了』

『……工程完了。全投影、待機』

その詠唱と共に小柄な人影の背後に多くの名も無き剣が浮かび上がる。

それらは徐々に数を増やして行き、終いには万を超える量の剣を生み出す。

（本来のこの技を使う“英霊”だとうはいかないだろうけど、私の“スペック”と本来の“役割”のお蔭かしら）

その剣群は徐々に角度を変えてビルの上に蠢く死霊の群れと執行人へと照準を合わせていく。

「宝具には至らないけどそれ相応な名剣の数々よ！これだけ撃ち込めば、少しは効果あるでしょう」——停止凍結、全投影連続層写……！！！！」

その言葉と共に、全ての剣が一斉にビルの間隙に降り注ぐ。

名も名声も持たない剣の群れではあるのだが、死霊の群れ程度ならこれだけで十分に事が足りる。

大通りは血と呻き声で別の意味で地獄と変貌した。

『……同調、開始』

フードを被った小柄な子供は即座にこの英霊が好んで使っていた干将・莫耶を投影し、飛来してきたソレを弾き飛ばした。

即時、離脱も考えたのだが目の前の執行人にいつの間にか立って

いた執行人はそう簡単には逃がして貰えそうにはない。

“サーヴァント”であるバーサーカーですら感じる相手の覇気に次の一手に何を選ぶことが最善かなかなか決める事が出来ない。

「いや、すみません。てつきり、彼らの同類かと思っちゃって咄嗟に手が出てしまいました」

笑いながらそう告げる目の前の執行人にバーサーカーのマスターは睨み返す。

「何のつもり？確かに前は教会の人間がマスターに選ばれるイレギュラーはあった。けど、マスターでもない！しかも、埋葬機関の人間が聖杯戦争に関わる事を許した覚えは無いのだけれど？」

バーサーカーのマスターの言葉に執行人は答えにくそうに頭を掻いた。

ここで、キャスターのマスターである杏子に第八聖典を渡しに来たと答えれば事態はややこしくなる。

暗示をかけるにも相手は恐らく、御三家の一つであるアインツベルンの作製したホムンクルス……

無理矢理排除すれば時計台との衝突になる可能性も高く、難しい

……

「此方が協力を要請したのでね」

その言葉に全員がビル内部へと続く扉の方へと視線を向けた。先程まで人の気配すらなかった筈のその場所にはランサーとそのマスターらしき少女、監督役の言峰綺礼が立っていた。

「どういう事か、分かるように説明してくれるかしら？」

「流石にライダーはやり過ぎたという事だよ。魂喰いだけでなく、町一つが消え去りかねないこの事態——我々の情報処理をもってしても、少しばかり厳しいので偶然居合わせた彼女に協力をして貰ったのだよ。彼女は元より君たちより彼らのような手合いとの戦いに慣れた言わばプロだからな」

「そういう事です。私が許されているのは悪霊退治のみでライダーを滅する許可は下りていません」

その言葉に嘘をついていない以上はここは認めるしかない。
だが、ライダーの扱いについては話が別だ。

「それなら、ライダーについてはどうするつもりなのかしら？」

バーサーカーのマスターの問いに言峰は少し考えたフリをするとこう答えた。

「此度のこの行為は看過する訳にはいかないからな。前回の聖杯戦争の際に使われたルールを使おうと思っっている。ライダーを倒したマスターに令呪を与えるというな。もちろん、協力して倒したのなら全員に与えるつもりだ」

言峰はそう言い切ると右腕の令呪をバーサーカーのマスターに見せる。

それを見たバーサーカーのマスターは少しだけ驚きのような表情を見せた。

「これまでに使われなかった令呪は代々監督役が管理してね……」

「なら、さっきの言葉に嘘はなさそうね……けど、それはいつから適応されるのかしら？まだ、全てのマスターにその追加ルールが伝わってないと思うのだけど？」

「それもそうね……私としても“既に”一画使ってしまったているからその提案は美味しいのだけど、それが問題ね」

まるで、右腕に刻まれた一角失われている令呪を見せているかのようなランサーのマスターにすこしだけバーサーカーのマスターは疑いの目を向けるが、それが何かは今分らなかった。

「一応、日付が変わり次第のろしを上げて召集をかけるつもりだ。——そうそう、もう一つ言い忘れていた。どのような形であっても、その召集に応じたモノのみがランサーを倒した際に令呪が一画貰える権利を得る事が出来るという事を……」

それだけ連絡事項を告げると執行人と言峰は何かを話し始める。バーサーカーのマスターはランサーのマスターをの方に目を向けるが気が付いた時にはランサー共々消え去っていた。

「バーサーカー……ここは、一端引いて様子を見ましょう」

そう告げると、バーサーカーのマスターも町の闇の中へと姿を消した。

「なんなんだよ……これ……」

衛宮士郎の目の前に広がるのは鉄の臭いが広がる地獄だった。
もしかしたら、そこに転がる肉片だったモノを助けられたかもしれない……

「俺は……十を救う正義の味方にならないといけないのに……」

覆っていた結界はいつのまにか消えており、士郎は血の中へと座り込んだ。

「クソ……クソ……何か手はあった筈だ！」

「士郎……あまり、自分を責めてはダメだよ。一度、家に帰って休もう？っね？」

「違う！全力を尽くしたとかそんなのは関係ないんだ！

俺は！

俺はみんなを助けなくっちゃいけないんだ！」

そんな土郎の悲痛な叫びにセイバーは初めて土郎の歪みを理解した。

自分の持っていた歪みよりも尚も深く、根深い歪み……

きつと、その歪みは土郎を……マスターを殺す事になるだろう。

そんな風に思えてしまうような……

「何か手はあった筈だ！俺がもつとちゃんとしていればこんな事にはならなかった筈だ。こんなザマで正義の味方なんて笑わせるなっ！」

誰かを救わなければならないという強迫観念に近い思いに支配された土郎にセイバーの言葉は届かない。

正義の味方……セイバーはどんなに最善を尽くした所で悲しい結末を迎える事もある事を知っているからこそ、その思いを否定し、土郎を正さねばならない。

しかし、それは恐らくこの主従関係を壊すキツカケにもなりかねない。

「土郎……まだ、ライダーは倒れていない。だから、こんな所で泣いてる暇があったらする事があると思うの。それに、その痛みは一人で背負う必要はないから……私も救えなかったのは同じだから」

それがセイバーが今、土郎にかけられる最大の言葉だった。

全てを否定すれば昔の自分のように壊れてしまいかもしれない……

そんな思いがセイバーの思いを食い止めていた。

そう告げると、セイバーはどこか心配げな眼差しで土郎に手を差し伸べるのだった。

変貌する事態（後書き）

眼を誤魔化すための策としてランサーのマスターが登場……

そして、セイバーと士郎の間に少しすれ違いが生まれました。

大きな事態の動きとしては第四次の狐狩りが今回も行われるという事

以前として、動きを見せないアサシン

突如、現れたランサーのマスター……

そして、ライダーVSまどか、さくらの決着は着くのか？

感想待ってます！

さくら対乱紅蓮　そして……（前書き）

恐らく、また更新が停滞しそうですwww

後半部に杏子の概念武装の説明を載せておきましたので何か質問があれば感想の方で指摘して貰えると助かります。

さくら対乱紅蓮　そして……

「風よ。彼の者を捕らえよ」

キヤスターはその言葉と共に風のカードを取り出す。

カードから噴き出した戒めの風は乱紅蓮を包み込み、見えない枷として乱紅蓮を拘束していく。

しかし、元より風対風の戦い……そのような拘束など、咆哮波の衝撃波で容易く振り解かれてしまう。

さくらの宝具は多彩な能力を誇る反面、同時に発動させられる数には限りがある。

現状で八枚にまで絞り込んで現界させてはいるものの、そこまでの誘導経路を計算して更にカードを使う順番を練っているのだった。

（元はケロちゃんみたいな霊獣だとすると、姿を消されたら厄介だし……でも、そろそろ勝負に出ないとまどかさんだけでライダーと戦う事になる）

アーチャー陣営の勝負が着こうとしている事を直観的に感じ取ると、キヤスターは風のカードを戻して一気に二枚のカードを取り出した。

「クロウの創りしカードよ。我が『鍵』に力を貸せ。カードに宿りし魔力をこの『鍵』に移し　我に力を！ウォーティ！水よ。戒めの鎖となれ！」

その言葉と共に大気中に漂っていた水分がまるで意思を持ったかのように乱紅蓮へとまとわりついて、徐々にその身体を包み込み始めた。

しかし、水一枚の力では風同様に乱紅蓮を押さえつける事は難しい。

上位の靈獣である事もあるのか、暴れまわり何度も水を払いのけながらさくらの方へと突撃してくる。

そんな靈獣に対してさくらは冷静にもう一枚取り出しておいたカードをリリースした。

「残念だけど、これであなたの負けだよ」

その言葉と共に、カードから白い光と轟音を伴いながら飛び出した雷がまるで獣のように乱紅蓮へと喰らい付きおその巨体に襲い掛かる。

元来のカードの性質としても獰猛な性質だが、それが水と合わさり乱紅蓮を貫いたのだ。

靈獣としての格ならばこの程度の攻撃では行動に支障は出ないのだが、水による電流強化という相乗効果もあり、その大きな身体を初めて地面に横たえた。

しかし、まだその眼はさくらから離れておらず、いまだに唸り声を上げ続ける。

（さくら！ そっちはどうなってる！ 私もすぐに到着する！）

脳内へと直接響いてくるマスターである杏子の声にさくらは小さく頷くと目の前の戦いを早く終結させるために動き出した。

しかし、その直後何か嫌な予感めいたものがさくらの中を走り抜ける。

この靈獣を倒してしまつてはならないという恐怖にも似た人間の本質を揺さぶる何か……

その何かが何なのかは分からないが、それがさくらの手を鈍らせるのには十分過ぎるほどのモノだった。

さくらが気が付いた時には身体が宙を舞っていた。

その瞳から見えるのは逆さに映った上手く働かない足を震わせながら立ち上がる乱紅蓮の様子……

その光景に初めてさくらは咆哮波を直撃したことを悟った。

「なら！えっ！？」

吹き飛ばされた際に利用しようとしていたカードは吹き飛ばされて辺りに散らばっていた。

つまり、手元には今すぐ使えるカードは存在しない……

そして、目の前に迫るのは乱紅蓮の強靱な爪であり、その爪に切り裂かれたらいくら英霊と言えど無事では済まない。

さくらは散らばってしまったカードを頭から一度、消し去ると新たに一枚のカードを取り出してそれをリリースする。

剣のカード——それを用いてその爪の攻撃を何とか防ぐ中で、さくらは一つの可能性を思い立った。

乱紅蓮を破壊せずに無力化する……

可能性では僅かだが、もしも成功すれば大幅にライダーの宝具ともいえる乱紅蓮の力を削ぐ事が出来る。

しかし、カードの精質的に可能かどうかでは怪しいのだが……

そんな迷いの中で覚悟を決めると散らばってしまった新たに一枚のカードを現界させる。

乱紅蓮は新たなカードを使おうとしている事に気が付くと、さくらに向けて吠えた。

一か八か……けれども、その賭けはどうやらさくらの勝ちで終わったらしい。

乱紅蓮が吠えたにもかかわらず、咆哮はさくらを襲う事は無かった。

「あなたの声を奪わせて貰ったの。本来は他人のきれいな声を奪うものだけど一か八かあなたを無力化して倒さないままライダーを倒す為に」

そう呟きながら、落ちている一枚のカードを手にとった。

凍結——ありとあらゆるものを凍らせてしまう危険なカード

さくらが何をしようとしているのか野生の勘で気が付いた時には全てが既に遅かった。

乱紅蓮の脚はゆっくりとだが、着実に凍り付いていく。逃げ出そ

うにも最大の武器である声と肺活量を奪われている為、身動きのできない巨体では手も足も出ない。

そして、抵抗虚しく乱紅蓮は氷塊の中に閉じ込められた哀れなる獣へと化してしまうのだった。

「さくら……それ、どうしたの？」

それが凜の口から洩れたその光景を見たときに漏れた言葉だった。キヤスターとは本来は騙し討ちや搦め手を主体とする戦い方が基本だが、さくらの能力は一度共に戦った時に既に十分に戦闘も行えると理解したつもりになっていた。

だが、目の前の光景はその予想を遙かに上回っているだけにそれ以上の言葉は出て来なかった。

「無事でよかったよ。それより、ライダーは？」

さくらの言葉に現実に戻ってきた凜はライダーは先程いた場所に目を向けるが既に座っていないかった。

「あら？どこ見ているのかしら？」

ライダーの言葉に慌てて氷像の方へと顔を向けるとそこには刀を携えて今にも自らの宝具である筈の乱紅蓮に止めを刺そうとするライダーの姿があった。

自身の宝具を破壊しようとする意味不明な行動に凜の中にも先程のさくらと同様に嫌な予感が走る。

そうまでして、この時点で宝具を破壊するという事はあれが何かの枷になっているからだ。

それも、この乱紅蓮以上の宝具を使用する為の……

凜は慌ててそれを止めようとするが、体が動かない。

それはキヤスターとまどかも同様のようだった。

「嘘！　なんで!？」

「身体が動かない……どうして!」

サーヴァントとして石化の魔眼にかかったとしてもそれは行動に支障が起こる程度である。

だが、今のこの現状は全く身体を動かす事が出来ないのだ。

魔術回路に魔力を流して抵抗するが、それでも全く動かないだけに何の手の出しようもなかった。

「今から、貴方達に面白いモノを見せてあげる。私の宝具である殺生石の真の力を……」

その言葉と共に、その氷像へと刀を振り下ろす。

それと同時に乱紅蓮は完全に消滅し、乱紅蓮が封印されていたであろう刀も朽ちて消えてしまった。

だが、それと同時にライダーの手には七支刀が現れ、その刀が静かに脈動を始める。

その脈動は禍々しく、サーヴァントではない凜の眼からしてもあれが相当にヤバイモノである事はすぐに理解できるほどのモノだった。

ライダーはそんな凜の動揺に気が付いたのか楽しげに笑うと言、こう呟いた。

「貴方達が九尾の狐と呼ぶ玉藻前が従えたと言われる最大の妖怪白面金毛九尾の狐の正体が何だか知っているかしら？」

その意味深なライダーの言葉に相手の出方を確かめながら静かに凜は首を横に振った。

ライダーはそんな凜の様子に少しだけ笑うと言だけ凜に告げる。

「貴方達がガイアと呼ぶモノの意思よ。それが私の真なる宝具……それを前にして貴方達は太刀打ちできるのかしら？」

ガイアの意思——それはこの地球そのものの意思に反抗する事を意味している。

そんな大きな力の前では人間など脆弱なモノであり、あの死徒二十七祖第一位のガイアの怪物は人類に対して最強の一つに数えられる。

もしも、それほどのクラスのモノを使われたとなれば聖杯戦争だけの括りでは収まらない……

凜はここからどのような手を打つことが最善か考えるがそんなものがすぐに浮かぶ筈が無かった。

「おいおい、誰か忘れやしちやいないか？ ライダー？」

その言葉と共に、上空から赤い髪を靡かせてライダーの心臓めがけて突きを放った。

ライダーは咄嗟に七支刀でその突きを払うがその際に、槍の先端が頬に触れて煙を上げて小さな傷を作り上げた。

「やっぱり、あなたが私にとっては一番の強敵という所かしら？ その槍、相当私にとっては天敵そうね……まだ完全にあの子が覚醒していない以上はここは一旦、引く事にするわ」

言葉では余裕ぶるが、全く再生する気配のない頬の傷に杏子の持つ槍を睨み付けると即座に退散する。

杏子はライダーを一度は追撃しようとするが、現状で一人で挑むのは危険と判断し、凜達を拘束していた影に刺さっていた針を引き抜いた。

「わりい……それより、あいつ前に会った時より禍々しさが増してたが何かあつ！ あれは教会からの狼煙か？」

こうして、二日目の戦いが終わりを迎えた。

教会はライダーの暴走から狼煙でマスターたちに召集をかける。

そして、この戦争には直接参加しない退魔組織や埋葬機関も状況次第では即座に参戦できるように外延部に部隊を展開させる動きまで見せ始める。

第六次聖杯戦争はこれまでのどの聖杯戦争以上に重大かつ緊急の大きな局面を迎えようとしていた。

さくら対乱紅蓮　そして……（後書き）

第八聖典ロンギヌスレプリカ

概念『死の確定』

「確かに肉体の死を確認した」という事から『倫理的な神殺し』となった。また、神の子の死を確認した聖遺物故に、神を殺す魔槍となっている。

聖遺物としての属性から多くの不死者の『既に死んでいるモノを殺せない』という倫理的不死性すら破壊しかねない教会の最終兵器とも言える。

しかし、あくまで杏子の振るうのはレプリカであり、『既に死んだものを傷つける』事に踏み止まっている。

もしも、本当のロンギヌスであったのなら、傷付いた頬からその概念が広がり、ライダーは窮地に立たされていた事だろう。

サーヴァントステータス表（前書き）

随時更新していきます

サーヴァントステータス表

セイバー

真名

マスター 衛宮士郎

属性 秩序・善

性別 女性

武器 デバイス

筋力

耐久

敏捷

魔力

幸運

宝具

アーチャー

真名 鹿目 まどか

マスター 遠坂 凛

属性 秩序・概念

性別 女性

武装 弓

筋力 C

耐久 A

敏捷 C

魔力 A+

幸運 B

宝具 B

クラス別能力

対魔力 D

鹿目まどかの対魔力は脆弱なモノである。そのランクはD、すなわつて一工程の魔術なら無効化出来る程度のモノであり、魔力避けのアミュレット程度のモノではない。これくらいの守りであれば、少し強い能力を持った魔術師であれば、容易に突破する事が可能である。

単独行動 B

通常サーヴァントがマスターを失うと現界するための魔力をどこからか補充しない限り、数時間でこの世から存在が消滅する。消滅までの時間は英雄によりさまざまだが、単独行動ランクがBである鹿目まどかの場合、二日間も継続して現界し続ける事が可能。ただし、これは戦闘や宝具使用などの消耗を避け、魔力を出来る限り温存した場合の理想値である。

保有スキル

千里眼 A

ごくまれに未来視を起こす事がある。遠距離まで見通せる鷹の目。能力的には視界に捉えたモノに向けて放たれた矢を外すことはありえない。

宝具

救済の弓 対軍宝具 C＋ B＋＋＋

決して外れる事のないホーミング性能の弓を無尽蔵に魔力が尽きるまで放つ事が出来る宝具

その矢は魔力で生成されている為、対魔力に対しては弱体化するがそれを数で押し通す事が出来るほどのモノである。

ランサー

真名

マスター

属性 秩序・中庸

性別 女性

武装 魔法

筋力 C

耐久 A＋

敏捷 C

魔力 A＋＋

幸運 A

宝具

ライダー

真名 諫山 黄泉

マスター

属性 混沌・悪
性別 女性
武装 刀

筋力 B +

耐久 B

俊敏 B

魔力 E X

幸運 E

宝具 E X

クラス別能力

対魔力 B

元来は対魔を生業としていた為もあって、極めて高い対魔力を有している。ライダーのクラスが持つ対魔力のクラス別能力は、三騎士のクラスに比べると効果の低いモノだが、それがこれだけ高いランクになっているのは諫山黄泉自身の対魔力が高いためだ。

ランクBの対魔力は三節以下の魔術は難なく無効化する事が可能。さらに言えば、大魔術、儀礼呪法であっても、諫山黄泉にダメージを与える事は難しい。

騎乗 A ++

ライダーのサーヴァントに選定されるだけあって、諫山黄泉は高いランクの騎乗能力を有している。しかも、その能力は特定の獣や乗り物に対して発揮される訳ではなく、ガイアの意志にまで簡単な意識操作を行えるほどである。

保有スキル

悪霊 A +

精神汚染をすべて無効化され、暴走時にはステータスが1ランク上がる

心眼（真） B

それまでに得た情報を元に、相手の行動を予測し。状況を打破する危険回避能力

汚染 A + +

辺りに悪霊を引き寄せ、自らに従わせる事が出来る

宝具

師子王（乱紅蓮）対人宝具 B + +

赤い獅子のような巨大な獣の姿で、尾は無数の蛇である師子王に宿る霊獣を召喚し使役する事が出来る。

また、この霊獣は任意に霊体化を行えるため倒すのは非常に困難となっている。

キャスター

真名 木之本 桜

マスター 佐倉杏子

属性 中立・善

性別 女性

武装 杖

筋力 E

耐久 D

敏捷 D

魔力 B
++

幸運 A
++

宝具

アサシン

真名

マスター

属性 秩序・中立

性別 女性

武装 無し

筋力 B

耐久 B
+

敏捷 C

魔力 B

幸運 E
++

宝具

サーヴァントステータス表（後書き）

凜視点ではこんな感じかな
もしかしたら、削除するかも

連合と襲撃（前書き）

レビューが付いた事もあり、そこし記念の話を考え中です。
少しばかり聞いて見たい事がありますので後書きまで読んでいただ
けると幸いです。

連合と襲撃

教会 未明

薄暗い教会の中で言峰は静かに溜息を吐いた。

狼煙を合図にマスターに召集をかけたのはいいが、直接出向いて来たのはランサーのマスターとセイバーのマスターだけである。

当然と言えば当然なのだが、いまだに表へと出て来ないアサシンのマスターを突き止めるチャンスだっただけに言峰としては少しばかり面白くない結果だった。

「やれやれ、直接出向いて来たのは二人だけか……まあ、使い魔を入れればライダーのマスターを除いてここに参上しているのだからよしとするか」

そう呟くと、言峰は単刀直入に話を切り出そうとする。

しかし、それを一匹の使い魔が遮った。

「先に聞いておきたいんだが、あんたはライダーのマスターを知っているんじゃないのかい？」

キャスターのマスターである杏子の放った使い魔の声に言峰は何も知らないと言を横に一度だけ振る。

だが、杏子はそれを信用はしない。いや、余計に信用できなくなつたというのが正しいだろう。

確かにマスターの教会への参加申請は義務付けられていないが、あの間桐慎二は確実にマスターであり、あの手の輩の行動を教会が追跡していないのは怪しい。

だが、これ以上問い詰めても言峰はのらりくらりと躲すだけだと

判断すると、杏子はそれ以上は何も尋ねる事はしなかった。

「君らには説法を聞くような習慣はないだろうから単刀直入に言う。現在、第五次聖杯戦争は存続の危機に瀕している。既にこの冬木の外縁部には退魔組織、教会の舞台がこちらの合図を今か今かと待ち受けている。もしも、この町から災疫が一滴でも外に零れ落ちればそれを理由にこの町へと侵入を開始するだろう」

「御託はいい。結論だけを言ってくれないかしら？」

ランサーのマスターらしき顔を隠して少女の言葉に言峰は小さく咳払いする。

「昨夜の一件は既に多くの組織に露見しているが、今もこうして平穏を保っているのは規定があるからに他ならない。よって、これを聖杯戦争存続の危機という非常時と判断し、監督権限を行使、暫定的に聖杯戦争のルールを改変する事とする」

「ルールの変更？どんなルールにするのかしら？」

「何、簡単だ」

そう告げると、言峰はカソックの右袖を捲り上げ、右腕の肌を露わにする。

そこにあったのは大量の令呪だった。

（やれやれ、厄介な事になったな）

それがその令呪を見た際にアサシンのマスターが感じた純粹な考えだった。

この聖杯戦争において最も信用ならない人物が監督役である以上、余剰令呪の存在は絶対的な戦力差になりかねないからだ。

その上、言峰は元代行者であり、戦闘能力でも並の人間では太刀打ちできない。

（ここは従うフリが一番正しいのは解っているんだが、引つかかる事が多すぎる……）

ここまで姿を現さなかったランサーのマスターの登場……

しかし、それが事前に入手していたマスター情報とは明らかに違う事も気になっていた。

バゼット・フラガ・マクレミツ――

情報が正しければ神代の宝具を継承する家系であり、サーヴァントと共に戦う武闘派と前情報から考えており、その宝具についての対策も敷いていた。

読みが外れたと考えると全てに納得がいくのは確かだが、言峰という存在がそれを否定してしまう。

バゼットと言峰が旧知の中であり、背後から襲って令呪を奪う可能性もある。

つまり、ここにいるランサーのマスターは替え玉……

そう考える考え方も十分にあり得てしまうからだ。

（手っ取り早く、バゼットの遺体……証拠隠滅されている可能性も――いや、魔術師が居を構えるなら人通りが少ない場所……探してみる価値はある）

アサシンのマスターの絶対的な強みはその手の広さだ。

彼の創る人形は完全に人間を再現する事は出来ないが、それぞれに特化したものであるなら問題なく作る事が可能……戦闘用に特化していないなら別にさしたる機能も必要ない。

（ネズミでも放ってみるか……）

アサシンのマスターはそう決めると目を閉じてもう一人のマスター代理へと視界を交代した。

「これは過去の聖杯戦争を通じて回収され、今回の監督役の私に託されたモノだ。決着を待たずしてサーヴァントを喪失し、脱落したマスターの遺産——彼らが使い残した令呪だ。私はこの余剰令呪ひとつひとつをに私個人の判断んで任意の相手に譲渡する権限が与えられている。ここまで言えば、分かると思うがライダーを倒したマスターに令呪を一画与える」

「へえ？ なんだか、面白いことしているわね？」

その言葉にその場にいた全員が教会の扉の方へと振り返る。

黒い長髪に着物を着た女性……今回の標的たるライダーそのものだった。

「おやおや？ 悔い改めに来たのか？」

「何を言っているのか理解できないわね。わざわざ、宣戦布告しようとしてるみたいだからわざわざ来てあげたの——それに、貴方が隔離したマスターも返してもらわないとならないからね」

ライダーの言葉にその場にいた言峰以外は耳を疑った。

杏子の質問に知らないと答えていながら、裏でライダーのマスターを確保していたのだ。

その不信感に対して言峰は溜息を吐くところ説明した。

「教会としては助けを求めるマスターを保護するのは義務なのでね」

「けど、彼には冬木市で一番霊格が高い場所に行って貰わないといけないから返してもらえないかしら？」

そう告げるとどこからか七支刀を取り出して言峰へと向ける。

七支刀から漏れ出す黒い気にそれが相当な魔剣であると判断すると、自らの精神の影響も考えてマスター達は次々と使い魔との感覚供給を絶ち始める。

しかし、生身の肉体で来ているセイバーのマスターである士郎とランサーのマスターは逃げる事が出来ない。

絶体絶命の状況、武器もなく、目の前の何かわからないものに感じる恐怖に士郎は動く事は出来ない。

そんな中で、金色に輝く一閃が士郎とライダーの間に割って入る。

「無事ですか？マスター！」

セイバーはライダーを一睨みすると辺りを見回して逃走手段を考えながら、相手の攻撃を警戒する。

昨夜の事も考えれば、どう考えてもライダーとの一騎打ちは危険であり、何か逆転の策を用意していない状況ではぶつかりたくないというのが本心だった。

「あらあら？　さすがにサーヴァント二人を同時に相手するのは厳しいわね……なら、こうしましょうか？」

そう呟くとライダーはにこやかに笑い指を弾いた。
すると、教会内部から何やら禍々しい気配が漂い始めた。

『綺礼、どうするの？　貴方を守りながらここを脱出するのは不審に思われる気がするのだけれど？』

『ランサーのマスターは既に令呪が一画無いが確かにそれだけでは説得力が足りないな……』

綺礼の返答にほむらは溜息を吐くと霊体化していたランサーを実体化させる。

「ランサー、状況は分かっているわね。ここはセイバーと協力してこの場を脱出するわよ」

「わかりました。マスター……」

そう告げると、ライダーに対して杖を向ける。
それに対してライダーは何かを思いついた笑みを浮かべるのだった。

「なのは……」

「ここはマスターも協力しようっていつてるから襲ったりはしない

よ。フェイトちゃん。それに、ライダーが一筋縄ではいかないよ?」

「話し合いは終わったかしら?」

そう呟くと七支刀を振り下ろそうとする。

セイバーもそれに応戦して斬りかかろうとするが、背後に現れた気配に即座に士郎の守りに入る。

それは、ランサーも同様だった。

「これが、ライダーの言っていた力って奴か……本当に素晴らしいじゃないか!」

笑いながら現れたのは昨晚、槍使いに襲われていた慎二だった。

その光景に士郎は思わず言葉を失ってしまう。

目の前にいるのは間桐慎二……他ならない士郎の親友なのだ。

「慎二……お前何してるんだよ!」

「ああ、衛宮か……お前も僕の事を影で見下していたんだ……魔術も使えない出来損ないってな!」

慎二がそう叫ぶと同時に黒い影が一気に士郎へと襲い掛かる。

ライダーへの牽制をしているセイバーは士郎をかばう事が出来ず、士郎も目の前の光景に動く事は出来ない。

そんな中で言峰はやれやれと小さくため息を吐くと即座に間桐慎二の懐へと入り、打撃を撃ち込んだ。

「残念だったな。ライダー……貴様の願いはどうやら叶わなかったらしい」

八極拳の中で『寸勁』と呼ばれる絶技を本気で喰らったとあればただの人間如きでは即死は避けられない。

言峰としても内臓を潰す感覚を感じている為、間桐慎二が死んだことを疑う余地は無かった。

「あら？本当にあなたはソレを殺したのかしら？既に人の道を外れたソレをそう簡単に殺せると思って？」

その言葉に言峰は振り返るとそこにはゆっくりと立ち上がろうとする間桐慎二の姿があった。

その光景はその場にいる誰もが信じられない光景だ。

特に前聖杯戦争の結末を知っているほむらからすればあの技の威力を知っており、それに耐えられる人間がいるなど信じられない。

ソウルジェムが存在しており、間桐慎二が魔法少女と言うのであれば既にあのまどかの取り巻きの一人（名前は思い出せないけど）がいたから納得がいくがこの世界にそのようなモノが存在する筈が無い。

それに、復活という行為には何らかの代償を払わなければならぬ。

つまり、何か仕掛けがあるという事だ。あの間桐慎二の復活には……

「貴方の願いは間桐慎二という事かしら？それとも、彼に埋め込まれている石かしら？」

「つまり、彼を返すから見逃せと言ってるのかしら？それとも、ここで彼を消滅させるという手もあるのだけれど？いくら、再生能力

「があろうが、対城宝具に耐えられるかしら？」

対城宝具が使われれば肉体消滅は避けられない。

そうなれば再生できない可能性が高い……ランサーは僅かに動揺を現した。

「つまり、そうされたら不味いのね？ 貴方にはここでリタイアして貰う事にしましょうか……ランサー——！！」

『待て……ここは彼らに一度引き渡す方が面白いとは思わないかね？』

『それよりも、ここで思惑を潰しておく方が得策と思うのだけれど……』

『そうか……なら、ここで君への魔力供給を止めるとしようか』

その念話にほむらは小さく言峰に対して敵意を露わにする。

現状で魔力供給を止められれば確実に聖杯の器を手に入れる事は出来ない。

本心ではここは定石を踏んで間桐慎二を消して思惑を消しておくのが筋だとは分かっているが、苦渋の決断で言峰の言葉を飲むしかなかった。

『なんのつもり、綺礼……何を考えての事が説明して貰えないかしら？』

『何、ここで殺すより自らの手で殺めさせる状況になった方が面白いと思わないかな？ 衛宮切継の息子である衛宮士郎が友人と街の人々を天秤にかけて苦渋の決断をする。私は実がじつくりと熟れてから収穫したいのだね』

『そう……本当にあなたって人間はいけ好かないわね』

「おい、慎二をどうするつもりだ！」

衛宮士郎の言葉をほむらは軽く無視するとライダーにこう告げた。

「さつさと連れて行きなさい。それで、話は終わりでしょう？ 本
当に消されたいのなら話は別だけれど」

ほむらの言葉にライダーは忌々しそうに睨み付けて来る。

だが、そんな視線になど興味が無いほむらはそれを受け流しなのはにいつでも合図があれば狙い撃つ事が出来るように待機させる。

「確かに、今ここで無茶をする必要はないわね……昨夜、宝具を破壊されてしまつて今の私は無手同然なのだから……私にここまで苦
勞させたのだから、それなりの働きはして貰うわよ？ マスター」

ライダーはそう告げると慎二を連れてどこかへと歩いて行つてしまふ。

その後ろ姿を呆然と士郎が眺めている中でいつの間にか、ランサーとそのマスターは姿を消しており、教会には言峰とセイバー、マスターの三人になっていた。

「大丈夫？ マスター……」

だが、その言葉が士郎の耳に届いていない事はセイバーが一番理解していた。

衛宮士郎の闇——十全てを救わなければならないといけないという強迫観念……

何が原因かはセイバーには分からないが、一つだけ解る事がある

とすればその先に待ち受けるのは絶望しかないという事だけだ。
常に十を救えることなど出来はしない。

九ですら難しい事もある。

どんなに頑張っても、一しか助けられない事も起こり得る。

だからこそ、本来ならば失ったものよりも守れたものに目を向けなければならぬのだ。

それが、フェイトがこれまでの経験から学んだ事だった。

「慎二の目を覚まさせないと……」

フェイトはその呟きの先に待ち受ける結末を想像し胸が痛んだ。
背後でその言葉にどこか満足げな様子の言峰に気が付く事なく……

連合と襲撃（後書き）

第四次聖杯戦争について触れるためにサーヴァントを考え中

セイバー 未定（話的に切継とコンビになりそうで折り合いが悪そうなのが思いつかない

アーチャー 当然の如くほむら

ランサー セルベリア センジョウノヴァルキュリアの怖い人

ライダー ラオウ なんとなく、肉体派

キャスター 未定（なんとなく、今回の面白そうなキャラが見つからない……

アサシン ラース 最強の眼の御仁

バーサーカー カオス 愛くるしさと逆ベクトルの残虐性

こんな感じですので後、二枠募集中

実は投稿の際にステ表を消滅させるかもしれませんが
割り込み投稿が面倒なので……

まあ、それぞれの思惑も動き始めたし、なんとなく今年度最後の投稿になりそうな予感……（裏で書いてるオリジナルを本気でどうにかしないとならないのでwww

それでは、次回をお楽しみに

恐らく、早ければ十二月

遅いと一月になりますwwww

感想待ってます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4858w/>

魔法少女だらけの聖杯戦争

2011年11月11日18時56分発行